風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書14

史跡出雲国府跡

－1－

2003年3月

島根県教育委員会

風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書14

史跡出雲国府跡

－1－

2003年3月

島根県教育委員会

題字：勝部　昭

出雲国府跡と神名樋野（茶臼山）

奈良時代の祭祀遺構（５号土坑）

墨書「意宇」

序

天平５（733）年に編纂された『出雲国風土記』に記述がある出雲国庁跡は、江戸時代からその所在地について論争がありました。これに終止符を打ったのが、昭和43（1968）～45（1970）年に松江市教育委員会が奈良国立文化財研究所などの支援を受けて行った発掘調査であり、これにより出雲国庁の所在地が確定しました。昭和46（1971）年には史跡出雲国府跡として国指定史跡となり、一部は史跡公園に整備されて今日に至っています。

その後、島根県教育委員会では平成３（1991）年には「八雲立つ風土記の丘整備構想」、平成９（1997）年には「古代文化の郷“出雲”整備構想」を策定し、八雲立つ風土記の丘周辺の史跡土地買い上げや整備を行ってまいりました。一方、現在準備を進めている古代文化研究センターも八雲立つ風土記の丘に建設することとなっており、風土記の丘地内遺跡の再整備も課題の一つとなっています。

こうした状況を受け、島根県教育委員会では昭和43～45年の調査以来、本格的な調査が中断していた出雲国府跡の調査を再開することとし、平成11（1999）年度から継続的に発掘を実施しています。

本書は、このうち平成11（1999）～13年（2001）度の３年間にわたる調査成果を取りまとめたものです。「館」と見られる大形建物跡や律令祭祀に関わる遺構、また、「意宇」・「東殿　出雲積大山　伊福部」と書かれた墨書土器・木簡などの重要な調査成果とともに、自然科学的な検討結果も盛り込んだ総合的な内容となっています。本書が今後の出雲国府研究はもとより、豊かな地域の歴史像を構築する上で一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたって多大な御指導・御協力を賜りました地権者の方々、地元自治会、松江市教育委員会、関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成15年３月

島根県教育委員会教育長
広　沢　卓　嗣

例　言

1．本書は島根県教育委員会が1999（平成11）年度から2002（平成14）年度に国庫補助事業として実施した風土記の丘地内遺跡発掘調査事業の報告書である。なお、この間併せて発掘調査を行った来美廃寺については、すでに別途報告している。

2．本書に収録した内容は、1999（平成11）年度から2001（平成13）年度に実施した発掘調査についてであり、2002（平成14）年度は遺物整理と報告書作成を行った。2002（平成14）年度の発掘調査結果は次年度以降のものとまとめて、今後順次報告書作成を進める予定である。

3．発掘調査にあたっては、地権者である石川清・石川修一・石川良・門脇敦美・北垣秀雄・角嘉昭・藤原佳光・松浦俊雄・三島一男・三島吉永・三島正明・三島秀雄・吉岡勝次の各氏から多大な協力を賜った。記して衷心より謝意を表したい。

4．挿図中の方位は、測量法による平面直角座標系ＸＹ座標（日本測地系）、第Ⅲ座標系のＸ軸方向をさしており、磁北より7°12′、真北より0°32′東の方向を示している。

5．本書に掲載した遺跡分布図は国土地理院が発行したもの、遺跡周辺の地形図は島根県教育委員会で作成している風土記の丘地内の1：1000地形図を基に作成したものである。

6．本書の執筆者は本文目次と付論各節に明示したとおりである。本文のうち第２章第１節・第５章第１節については三瓶自然館中村唯史氏、第３章第２節の陶磁器・第５章第４節に関しては守岡正司、その他は角田徳幸が担当した。また、付論は奈良文化財研究所松井章・肥塚隆保両氏のほか、大谷女子大学三辻利一氏、文化財調査コンサルタント株式会社渡辺正巳氏、島根大学古野毅氏、川鉄テクノリサーチ株式会社岡原正明・天辰正義・小川太一・福田文二郎の各氏、応用地質株式会社高瀬尚人氏より玉稿を賜った。

7．本書に掲載した図面は、調査員・調査補助員が分担して作成した。図面の浄書は角田徳幸のほか荒川あかね、川上登志江、藤原須美子、島庭志津子、渡部恵子が行った。

8．本書に掲載した遺構写真は柳浦俊一・角田徳幸、遺物写真は角田徳幸が撮影した。また、赤外線写真のうち木簡は奈良文化財研究所中村一郎氏、墨書土器は古代文化センターが撮影したものを用いている。

9．本書に掲載した出土遺物、写真・実測図などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。

10．本書の編集は、各執筆者の協力を得ながら角田徳幸が行った。

調 査 組 織

1999（平成11）年度

調査指導委員会委員 町田章（奈良国立文化財研究所長）、井上寛司（大阪工業大学教授）、金田章裕（京都大学大学院教授）、佐藤信（東京大学大学院教授）、蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）、渡辺貞幸（島根大学教授）

指導助言 坂井秀弥（文化庁文化財調査官）

事務局 勝部昭（島根県教育庁文化財課長）、小田時通（同課長補佐）、若槻真治（同主幹）、足立克己（同主幹）、椿真治（同文化財保護主事）、守岡正司（同主事）、宍道正年（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、秋山実（同総務課長）、松本岩雄（同調査課長）、今岡宏（同総務係長）、川崎崇（同主事）

調査員 柳浦俊一（同文化財保護主事）

調査補助員 大西憲和（同臨時職員）

2000（平成12）年度

調査指導委員会委員 町田章（奈良国立文化財研究所長）、井上寛司（大阪工業大学教授）、金田章裕（京都大学大学院教授）、佐藤信（東京大学大学院教授）、蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）、渡辺貞幸（島根大学教授）

指導助言 坂井秀弥（文化庁文化財調査官）

事務局 勝部昭（島根県教育庁文化財課長）、小田時通（同課長補佐）、若槻真治（同主幹）、足立克己（同主幹）、椿真治（同文化財保護主事）、池淵俊一（同文化財保護主事）、宍道正年（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、内田融（同総務課長）、松本岩雄（同調査課長）、今岡宏（同総務係長）、川崎崇（同主事）

調査員 柳浦俊一（同文化財保護主事）、守岡正司（同主事）

調査補助員 赤井和代（同臨時職員）、今岡利江（同臨時職員）

2001（平成13）年度

調査指導委員会委員 町田章（奈良国立文化財研究所長）、井上寛司（大阪工業大学教授）、金田章裕（京都大学大学院教授）、佐藤信（東京大学大学院教授）、蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）、渡辺貞幸（島根大学教授）

指導助言 坂井秀弥（文化庁文化財調査官）

調査指導 松井章（奈良文化財研究所主任研究官）、光谷拓実（奈良文化財研究所古環境研究室長）、牛川喜幸（橘女子大学教授）

事務局 勝部昭（島根県教育庁参事・文化財課長）、藤原弘（同課長補佐）、田中敏大（同課長補佐）、足立克己（同主幹）、椿真治（同文化財保護主事）、池淵俊一（同文化財保護主事）、宍道正年（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、内田融（同総務課長）、

松本岩雄（同調査第１課長）、柳浦俊一（同調査第２係長）、今関宏（同総務係長）、安達真理子（同主事）

調 査 員 角田徳幸（同文化財保護主事）

調査補助員 赤井和代（同臨時職員）、今岡利江（同臨時職員）

2002（平成14）年度

調査指導委員会委員 町田章（奈良国立文化財研究所長）、井上寛司（大阪工業大学教授）、金田章裕（京都大学大学院教授）、佐藤信（東京大学大学院教授）、藪岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）、渡辺貞幸（島根大学教授）

指導助言 玉田芳英（文化庁文化財調査官）

調査指導 亀田修一（岡山理科大学教授）、山本信夫（山本考古研究所）、高橋照彦（大阪大学大学院助教授）、三辻利一（大谷女子大学教授）、榊原博英（浜田市教育委員会主任主事）、片岡詩子（玉湯町立出雲玉作資料館副館長）、中村唯史（島根県立三瓶自然館指導員）

事 務 局 勝部昭（島根県教育次長）、宍道正年（同文化財課長・島根県埋蔵文化財調査センター所長）、藤原弘（島根県教育庁文化財課課長補佐）、宮澤明久（同課長補佐）、広江耕史（同主幹）、池淵俊一（同文化財保護主事）、伊藤徳広（同主事）、卜部吉博（島根県埋蔵文化財調査センター副所長）、内田融（同総務課長）、柳浦俊一（同調査第２係長）、坂本淑子（同総務係長）、安達真理子（同主事）

調 査 員 角田徳幸（同文化財保護主事）、宍岡正司（同文化財保護主事）

調査補助員 阿部智子（同臨時職員）、平井大介（同臨時職員）

調査協力機関・協力者

大阪大学、大谷女子大学、岡山理科大学、京都大学、島根大学、宍道町教育委員会、玉湯町教育委員会、橘女子大学、東京大学、奈良文化財研究所、文化庁、平田市教育委員会、松江市教育委員会、松江市大庭公民館・竹矢公民館、島根県立三瓶自然館、島根県立八雲立つ風土記の丘資料館、島根県古代文化センター

高妻洋成・馬場基・山中敏史・渡辺晃宏（奈良文化財研究所）、平川南（国立歴史民俗博物館）、尾野善裕（京都国立博物館）、田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）、穴沢義功、岡崎雄二郎・吉岡弘行（松江市教育委員会）、濱田延充（寝屋川市教育委員会）、原俊二（平田市教育委員会）、平石充（島根県古代文化センター）

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過 ……（角田徳幸）　1

第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 ……（中村唯史）　2
　第２節　歴史的環境 ……（角田徳幸）　4
　第３節　出雲国府跡をめぐるこれまでの調査 ……　6

第３章　範囲確認調査
　第１節　分布調査 ……　9
　第２節　範囲確認調査 ……（角田徳幸・守岡正司）　10

第４章　本調査
　第１節　調査の概要 ……（角田徳幸）　30
　第２節　古墳時代の遺構・遺物 ……　33
　第３節　奈良・平安時代の遺構・遺物 ……　42
　第４節　生産関係遺物 ……　127
　第５節　遺構に伴わない遺物 ……　138

第５章　ま と め
　第１節　古景観の復元に向けて ……（中村唯史）　142
　第２節　古墳時代中期の集落 ……（角田徳幸）　143
　第３節　奈良・平安時代の施設群 ……　145
　第４節　平安時代の陶磁器 ……（守岡正司）　155

出雲国府跡土器・陶磁器観察表 ……　159
出雲国府跡玉作関係遺物観察表 ……　167
出雲国府跡金属器生産関係遺物観察表 ……　168

付　論
　付論１　出雲国府跡５号土坑から出土した動物遺存体 ……（松井章）　175
　付論２　出雲国府跡出土分銅の非破壊調査 ……（肥塚隆保）　178
　付論３　出雲国府跡出土金属器生産関係遺物の分析調査
　　……（岡原正明・天辰正義・小川太一・福田文二郎）　183
　付論４　出雲国府跡出土柱根・木製品の樹種（１）……（渡辺正巳・古野毅）　199
　付論５　出雲国府跡における花粉及び植物遺体分析 ……（渡辺正巳）　209
　付論６　出雲国府跡出土須恵器の産地推定 ……（三辻利一）　217
　付論７　出雲国府地内における地下レーダー探査 ……（高瀬尚人）　223

挿図目次

第1図　出雲国府跡の位置……1
第2図　出雲国府跡の周辺地形……2
第3図　意宇平野の層序想定図……3
第4図　出雲国府跡と周辺の遺跡……5
第5図　出雲国府跡発掘調査区配置図(1)……7
第6図　出雲国府跡地内遺物散布状況……9
第7図　出雲国府跡発掘調査区配置図(2)……11～12
第8図　第1～第3・第5・第7トレンチ遺構実測図……13
第9図　第6・第9・第11～第13・第15トレンチ遺構実測図…14
第10図　第2トレンチ1号溝出土遺物実測図(1)……16
第11図　第2トレンチ1号溝出土遺物実測図(2)……17
第12図　第2トレンチ1号溝出土遺物実測図(3)……18
第13図　第7・第8トレンチ4号溝出土遺物実測図(1)……19
第14図　第7・第8トレンチ4号溝出土遺物実測図(2)……20
第15図　第7・第8トレンチ4号溝出土遺物実測図(3)……21
第16図　第5・第6・第15トレンチ出土遺物実測図……22
第17図　第1・第5・第6・第13・第18トレンチ出土遺物実測図…23
第18図　第16～第18トレンチ遺構実測図……24
第19図　第19・第20トレンチ遺構実測図……25
第20図　第19・第20トレンチ出土遺物実測図……26
第21図　第21～第25トレンチ遺構実測図……28
第22図　第21～第25トレンチ出土遺物実測図……29
第23図　出雲国府跡本調査区遺構実測図……31～32
第24図　調査区西半部の古墳時代遺構実測図……33
第25図　1号竪穴住居跡遺構実測図……34
第26図　6号溝・7号溝出土遺物実測図……35
第27図　2号・3号土坑遺構実測図……37
第28図　2号土坑出土遺物実測図……38
第29図　2号・3号土坑出土遺物実測図……39
第30図　11号・12号土坑遺構実測図……40
第31図　11号・12号土坑出土遺物実測図……41
第32図　1号建物跡遺構実測図……43
第33図　1号建物跡出土遺物実測図……44
第34図　2号建物跡遺構実測図……45
第35図　2号建物跡出土遺物実測図……46
第36図　3号・5号・6号建物跡遺構実測図……47
第37図　3号・5号建物跡出土遺物実測図……48
第38図　3号建物跡出土瓦実測図(1)……49
第39図　3号建物跡出土瓦実測図(2)……50
第40図　3号建物跡出土瓦実測図(3)……51
第41図　4号建物跡遺構実測図……53
第42図　4号建物跡出土遺物実測図……54
第43図　7号建物跡遺構実測図……55
第44図　8号建物跡遺構実測図……56
第45図　7号・8号建物跡・3号溝出土遺物実測図……57
第46図　柱根のある柱穴実測図……58
第47図　柱根実測図……59
第48図　柱根・礎板他実測図……60
第49図　3号溝・4号溝遺構実測図……62
第50図　4号溝遺物出土状況実測図……63
第51図　4号溝上面・上層出土遺物実測図(1)……65
第52図　4号溝上面・上層出土遺物実測図(2)……66
第53図　4号溝上面・上層出土遺物実測図(3)……67
第54図　4号溝上面・上層出土遺物実測図(4)……68
第55図　4号溝上面・上層出土遺物実測図(5)……69
第56図　4号溝上面・上層出土遺物実測図(6)……70
第57図　4号溝下層出土遺物実測図(1)……72
第58図　4号溝下層出土遺物実測図(2)……73
第59図　4号溝下層出土遺物実測図(3)……74
第60図　4号溝出土遺物実測図(1)……76
第61図　4号溝出土遺物実測図(2)……77
第62図　4号溝出土遺物実測図(3)……78
第63図　4号溝出土木製品実測図(1)……80
第64図　4号溝出土木製品実測図(2)……81
第65図　5号溝出土遺物実測図……82
第66図　5号溝遺構実測図……82
第67図　8号溝遺構・遺物実測図……83
第68図　4号土坑遺構実測図……83
第69図　4号土坑出土遺物実測図……84
第70図　5号土坑遺構実測図……85
第71図　5号土坑底面祭祀遺構遺物出土状況実測図…86
第72図　5号土坑上面出土遺物実測図……87
第73図　5号土坑上面出土瓦実測図(1)……88
第74図　5号土坑上面出土瓦実測図(2)……89
第75図　5号土坑上層出土遺物実測図(1)……91
第76図　5号土坑上層出土遺物実測図(2)……92
第77図　5号土坑上層出土遺物実測図(3)……93
第78図　5号土坑上層出土遺物実測図(4)……94
第79図　5号土坑上層出土遺物実測図(5)……95
第80図　5号土坑下層出土遺物実測図(1)……97
第81図　5号土坑下層出土遺物実測図(2)……98
第82図　5号土坑出土遺物実測図……98
第83図　5号土坑出土木製品実測図(1)……100
第84図　5号土坑出土木製品実測図(2)……101
第85図　5号土坑出土木製品実測図(3)……102
第86図　6号土坑遺構実測図……103

第87図　6号土坑出土遺物実測図 ……103
第88図　7号・8号土坑遺構実測図 ……104
第89図　7号土坑出土遺物実測図 ……105
第90図　8号土坑出土遺物実測図 ……106
第91図　9号土坑遺構実測図 ……107
第92図　9号土坑出土遺物実測図 ……108
第93図　10号土坑遺構実測図 ……109
第94図　10号土坑出土遺物実測図 ……109
第95図　13号土坑遺構実測図 ……110
第96図　13号土坑出土遺物実測図 ……111
第97図　14号土坑遺構実測図 ……112
第98図　14号土坑出土遺物実測図(1) ……113
第99図　14号土坑出土遺物実測図(2) ……114
第100図　14号土坑出土遺物実測図(3) ……115
第101図　14号土坑出土遺物実測図(4) ……116
第102図　15号土坑遺構実測図 ……117
第103図　15号土坑出土遺物実測図 ……118
第104図　16号土坑遺構実測図 ……119
第105図　16号土坑出土遺物実測図(1) ……120
第106図　16号土坑出土遺物実測図(2) ……121
第107図　16号土坑出土遺物実測図(3) ……122
第108図　16号土坑出土遺物実測図(4) ……123
第109図　16号土坑出土瓦実測図 ……124
第110図　1号井戸跡遺構実測図 ……125
第111図　1号井戸跡出土遺物実測図 ……126
第112図　1号井戸跡出土下駄実測図 ……127
第113図　金属器生産関係遺物実測図(1) ……128
第114図　金属器生産関係遺物実測図(2) ……129
第115図　玉作関係遺物実測図(1) ……132
第116図　玉作関係遺物実測図(2) ……133
第117図　玉作関係遺物実測図(3) ……134
第118図　玉作関係遺物実測図(4) ……135
第119図　玉作関係遺物実測図(5) ……136
第120図　玉作関係遺物実測図(6) ……137
第121図　玉作関係遺物実測図(7) ……138
第122図　遺構に伴わない遺物実測図(1) ……139
第123図　遺構に伴わない遺物実測図(2) ……140
第124図　古墳時代中期の遺構分布 ……143
第125図　各地の円筒形土製品 ……144
第126図　本調査区内施設群の変遷 ……147
第127図　出雲国府跡中心部遺構配置図 ……148
第128図　施設群を囲む溝と護岸施設 ……150
第129図　墨書・ヘラ書き文字実測図 ……151

表目次

第1表　史跡出雲国府跡の発掘調査 …… 6
第2表　金属生産関係遺物観察表（分析資料以外）…129
第3表　玉素材別重量集計表 ……131
第4表　玉素材別点数集計表 ……131
第5表　墨書・ヘラ書き土器一覧表 ……152
第6表　陶磁器分類表 ……156
第7表　緑釉陶器・灰釉陶器一覧表 ……157
第8表　緑釉陶器分類表 ……157

図版目次

図版1　　意宇平野空中写真
図版2－1　第1～第10トレンチ配置状況（北西から）
図版2－2　第1～第10トレンチ配置状況（西から）
図版3－1　第2トレンチ1号溝遺物出土状況（南から）
図版3－2　第2トレンチ1号溝遺物出土状況（東から）
図版3－3　第2トレンチ1号溝土層（西から）
図版4－1　第6トレンチ2号溝遺物出土状況（北から）
図版4－2　第6トレンチ2号溝（西から）
図版4－3　第6トレンチ2号溝土層（南から）
図版5－1　第6トレンチ1号土坑遺物出土状況（南西から）
図版5－2　第7トレンチ4号溝遺物出土状況（北西から）
図版5－3　第8トレンチ遺構検出状況（西から）
図版6－1　第9トレンチ7号溝（東から）
図版6－2　第11トレンチ杭列（南西から）
図版6－3　第15トレンチ西隣サブトレンチ（北から）
図版7－1　第12トレンチ（東から）
図版7－2　第16－1トレンチ（東から）
図版7－3　第16－2トレンチ（東から）
図版7－4　第17トレンチ（東から）
図版8－1　第19トレンチ石敷（南から）
図版8－2　第19トレンチ土層（南東から）
図版8－3　第20トレンチ石敷（南から）
図版9－1　第20トレンチ土層（南東から）
図版9－2　第21トレンチ（南東から）
図版9－3　第22トレンチ（南東から）
図版10－1　第23トレンチ（南から）

図版10－2　第24トレンチ（西から）
図版10－3　第25トレンチ（北東から）
図版11－1　出雲国庁跡史跡公園と本調査区（北から）
図版11－2　本調査区全景（真上から）
図版12－1　本調査区全景（東から）
図版12－2　本調査区全景（西から）
図版13－1　6号溝土層断面（東から）
図版13－2　6号溝と2号土坑の土層切合関係（南西から）
図版13－3　7号溝トレンチ内遺物出土状況（南から）
図版14－1　2号土坑検出状況（南から）
図版14－2　2号土坑遺物出土状況（南から）
図版14－3　2号土坑（南から）
図版15－1　2号土坑南北土層断面（南西から）
図版15－2　2号土坑円筒形土器出土状況（北から）
図版15－3　3号土坑検出状況（南から）
図版16－1　3号土坑トレンチ土層（南から）
図版16－2　11号・12号土坑遺物出土状況（南から）
図版16－3　11号・12号土坑（南から）
図版17－1　1号建物跡（西から）
図版17－2　1号建物跡（南から）
図版18　1号建物跡礎石・根石(1)
図版19－1　1号建物跡礎石・根石(2)
図版19－2　1号建物跡P.7遺物出土状況（南から）
図版19－3　1号建物跡P.8礎石（北東から）
図版19－4　1号建物跡P.13土層（西から）
図版20－1　2号建物跡（南から）
図版20－2　2号建物跡柱穴(1)
図版21　2号建物跡柱穴(2)
図版22－1　3号建物跡（東から）
図版22－2　3号建物跡（南から）
図版23　3号建物跡柱穴(1)
図版24　3号建物跡柱穴(2)
図版25－1　3号建物跡遺物出土状況
図版25－2　5号・6号建物跡（南から）
図版26－1　5号建物跡柱根
図版26－2　6号建物跡柱根
図版27－1　4号建物跡（東から）
図版27－2　4号建物跡柱根・根石(1)
図版28　4号建物跡柱根・根石(2)
図版29　4号建物跡柱根・根石(3)
図版30－1　7号・8号建物跡（北から）
図版30－2　7号建物跡柱穴
図版31－1　8号建物跡柱穴
図版31－2　柱根のある柱穴
図版32－1　3号溝・4号溝（北から）
図版32－2　4号溝遺物出土状況
図版33－1　4号溝調査区北壁土層（南から）
図版33－2　4号溝調査区南壁土層（北から）
図版33－3　4号溝南端部遺物出土状況（北から）
図版34－1　4号溝中央部遺物出土状況（西から）
図版34－2　4号溝埋土と4号建物跡掘P.13・P.14検出状況（東から）
図版34－3　4号溝中央部下層遺物出土状況（北から）
図版35－1　5号溝（南から）
図版35－2　5号溝遺物出土状況（南から）
図版35－3　5号溝遺物出土状況（西から）
図版36－1　8号溝遺物出土状況（東から）
図版36－2　8号溝土層（西から）
図版36－3　4号土坑遺物出土状況（南東から）
図版37－1　5号土坑上面遺物検出状況（東から）
図版37－2　5号土坑上面土師器甕検出状況（南から）
図版37－3　5号土坑検出状況（南から）
図版38－1　5号土坑上面南北土層（東から）
図版38－2　5号土坑上面東西土層（南から）
図版38－3　5号土坑下層南北土層南半部（東から）
図版39－1　5号土坑下層東西土層（南から）
図版39－2　5号土坑上層遺物出土状況（南から）
図版39－3　5号土坑上層北東部遺物出土状況（東から）
図版40－1　5号土坑上層北西部遺物出土状況（西から）
図版40－2　5号土坑下層粘質土上面木簡出土状況（北西から）
図版40－3　5号土坑下層粘質土墨書木製品出土状況（南から）
図版41－1　5号土坑下層祭祀遺構（南から）
図版41－2　5号土坑下層祭祀遺構（東から）
図版42－1　5号土坑下層祭祀遺構（東から）
図版42－2　5号土坑底面礫東西断面（南から）
図版42－3　5号土坑下層祭祀遺構須恵器出土状況(南東から)
図版43－1　5号土坑下層祭祀遺構遺物出土状況（東から）
図版43－2　5号土坑下層祭祀遺構曲物出土状況（南東から）
図版43－3　5号土坑下層祭祀遺構かご出土状況（南から）
図版44－1　6号土坑（南から）
図版44－2　6号土坑南辺柱根（北から）
図版44－3　6号土坑土層（南から）
図版45－1　7号・8号土坑検出状況（南から）
図版45－2　7号・8号土坑（南から）
図版45－3　7号・8号土坑遺物出土状況（南から）
図版46－1　8号土坑土層（南から）
図版46－2　8号土坑遺物出土状況（西から）
図版46－3　8号土坑遺物出土状況（西から）
図版47－1　9号土坑（北東から）
図版47－2　14号土坑（北西から）
図版47－3　14号土坑（北東から）
図版48－1　15号土坑（南から）
図版48－2　16号土坑検出状況（南から）
図版48－3　16号土坑（南から）
図版49－1　16号土坑土層（東から）
図版49－2　16号土坑遺物出土状況（南から）
図版49－3　16号土坑遺物出土状況（南から）

図版50－1　1号井戸跡検出状況（北から）
図版50－2　1号井戸跡土層（南から）
図版50－3　1号井戸跡（南から）
図版51－1　1号井戸跡遺物出土状況（南から）
図版51－2　1号井戸跡裏込め土層（南から）
図版51－3　1区漆紙文書出土状況
図版52　第2トレンチ1号溝出土遺物（1）
図版53－1　第2トレンチ1号溝出土遺物（2）
図版53－2　第7・第8トレンチ4号溝出土遺物（1）
図版54　第7・第8トレンチ4号溝出土遺物（2）
図版55－1　第7・第8トレンチ4号溝出土遺物（3）
図版55－2　第6・第15トレンチ出土遺物
図版56－1　第1・第5・第6トレンチ出土遺物
図版56－2　第1・第5・第13・第18・第20トレンチ出土遺物
図版57－1　第6・第19・第20トレンチ出土遺物
図版57－2　第21～第25トレンチ出土遺物
図版58　7号溝・2号土坑・11号土坑出土遺物
図版59－1　6号溝・7号溝・2号土坑出土遺物
図版59－2　2号土坑出土遺物
図版60－1　2号・3号・11号・12号土坑出土遺物
図版60－2　1号建物跡出土遺物
図版61－1　1号～4号建物跡出土遺物
図版61－2　2号建物跡出土遺物
図版62－1　3号～5号建物跡出土遺物
図版62－2　4号・7号・8号建物跡出土遺物
図版63　3号建物跡出土遺物
図版64　柱根・礎板他
図版65　4号溝上面・上層出土遺物(1)
図版66　4号溝上面・上層出土遺物(2)
図版67　4号溝上面・上層出土遺物(3)
図版68　4号溝上面・上層出土遺物(4)
図版69－1　4号溝上面・上層出土遺物(5)
図版69－2　4号溝下層出土遺物(1)
図版70－1　4号溝下層出土遺物(2)
図版70－2　4号溝下層出土遺物(3)
図版71－1　4号溝下層出土遺物(4)
図版71－2　4号溝出土遺物(1)
図版72　4号溝出土遺物(2)
図版73　4号溝出土遺物(3)
図版74　4号溝出土木製品(1)
図版75　4号溝出土木製品(2)
図版76　4号溝出土木製品(3)
図版77－1　5号溝・8号溝・4号土坑出土遺物
図版77－2　5号土坑上面出土遺物(1)
図版78－1　5号土坑上面出土遺物(2)
図版78－2　5号土坑上層出土遺物(1)
図版79　5号土坑上層出土遺物(2)
図版80　5号土坑上層出土遺物(3)
図版81　5号土坑上層出土遺物(4)
図版82　5号土坑下層出土遺物
図版83－1　5号土坑出土遺物
図版83－2　5号土坑出土木製品(1)
図版84　5号土坑出土木製品(2)
図版85　5号土坑出土木製品(3)
図版86　5号土坑出土木簡
図版87　6号・7号・8号土坑出土遺物
図版88－1　7号・8号土坑出土遺物
図版88－2　9号土坑出土遺物
図版89－1　9号・10号・13号土坑出土遺物
図版89－2　10号・13号土坑出土遺物
図版90　14号土坑出土遺物(1)
図版91　14号土坑出土遺物(2)
図版92　14号土坑出土遺物(3)
図版93　15号・16号土坑出土遺物(1)
図版94　15号・16号土坑出土遺物(2)
図版95　16号土坑出土遺物
図版96－1　15号・16号土坑出土遺物(3)
図版96－2　1号井戸跡出土下駄
図版97　1号井戸跡出土遺物
図版98－1　金属器生産関係遺物（分析試料を除く）
図版98－2　玉作関係遺物(1)
図版99　玉作関係遺物(2)
図版100　玉作関係遺物(3)
図版101　玉作関係遺物(4)
図版102　玉作関係遺物(5)
図版103　遺構に伴わない遺物(1)
図版104　遺構に伴わない遺物(2)
図版105　墨書土器赤外線写真(1)
図版106－1　墨書土器赤外線写真(2)
図版106－2　ヘラ書き文字
図版106－3　漆紙文書赤外線写真

第１章　調査に至る経緯と経過

出雲国府跡は島根県松江市大草町・山代町地内に所在する遺跡である。その所在地については江戸時代から諸説があったが、松江市教育委員会が昭和43（1968）～45（1970）年にかけて３年間にわたって行った発掘調査で計画的に配置された奈良時代の建物跡群が検出されたことにより、初めて明らかになった。昭和46（1971）年12月13日には史跡出雲国府跡として約410,000㎡が国指定史跡となり、島根県教育委員会がその中心区域である六所脇・宮の後地区で昭和47（1972）年度から３ヶ年で環境整備事業を行って、八雲立つ風土記の丘の中核となる史跡公園として活用が図られた。

その後、平成３（1991）年には「八雲立つ風土記の丘整備構想」、平成９（1997）年には「古代文化の郷“出雲”整備構想」が策定された。いずれも八雲立つ風土記の丘を中核とした遺跡整備の必要性が唱えられ、これに基づいて史跡の土地買い上げや整備が進められてきた。また一方で、現在準備が進められている古代文化研究センターも八雲立つ風土記の丘に建設されることとなっており、風土記の丘地内遺跡の再整備を行うことも必要な課題となった。

こうした状況を受けて、島根県教育委員会では昭和43～45年の調査以来、現状変更に伴う小規模な調査を除いて本格的な調査が中断していた史跡出雲国府跡を継続的に発掘調査することとした。調査は、昭和48（1973）年から継続して実施している風土記の丘地内遺跡調査の一環として、平成11（1999）年度より行っており、今年度で４年目である。

出雲国府跡は、昭和40年代の調査では政庁後殿と後方官衙が明らかになっている。しかし、国庁を含め他の諸施設の構造や時期変遷など、まだ具体的に解明しなければならない課題も多い。したがって、調査は史跡地内におけるトレンチ調査による遺構の範囲確認と、確認された遺構のうち中心となる施設群の構造・性格を明らかにするための発掘を実施した。また、併せて地下レーダー探査を行い、発掘調査前に地下遺構の情報を極力得ることとした。

平成11（1999）年度　第１～15トレンチを設定し、範囲確認調査を行った。第６・７・８トレンチでは奈良・平安時代の溝が確認された。

平成12（2000）年度　第９・10トレンチを拡張し、史跡公園北側を本調査区とし、廂付きの大形建物跡である１号建物跡が検出された。範囲確認調査は、史跡公園西側の第16～18トレンチで行い、また、地下レーダー探査を史跡公園の北及び東側で実施した。

平成13（2001）年度　前年度の本調査区を拡張し、１号建物跡と東西に並び立つ位置にある４号建物跡を確認した。５号土坑では奈良時代の祭祀遺構が検出された。範囲確認調査は第19～25トレンチで行った。地下レーダー探査は史跡公園の西側と日岸出地区で実施している。また、併せて史跡指定地内で分布調査を行い、遺物の散布状況を確認した。

第１図　出雲国府跡の位置

第２章　遺跡の位置と環境

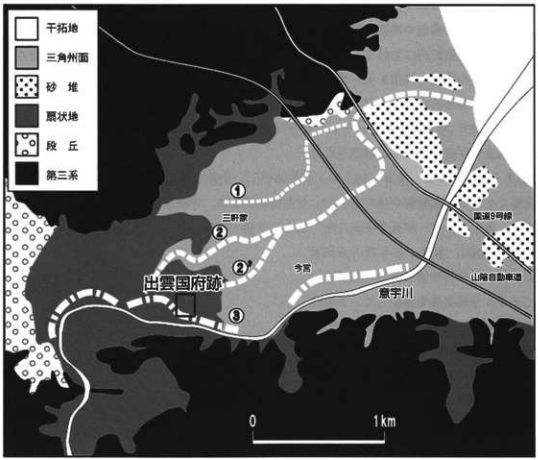
第１節　地理的環境

（１）地形概要

出雲国府跡は、意宇川の下流に発達する小規模な沖積平野である意宇平野に位置する（第２図）。意宇川は平野の南端を西から東に流れて、中海に注いでいる。およそ平野の西側半分は意宇川扇状地の緩斜面で、中海岸には沿岸砂州として形成された砂堆が微高地をなしている。扇状地と砂堆に挟まれて、平坦な低地面（三角州面）が広がる。平野の西には、標高25m前後の段丘面（乃木段丘）が分布している。平野の南北の丘陵は、新第三系の火山岩類からなる。

平野の地下地質をボーリング資料[1]から検討すると、第３図のような層序が推定できる。沖積平野の地形を構成している完新統（最終氷期が終った１万年前以降の堆積物）についてみると、中海湖岸部に沿岸砂州として発達した砂堆がみられる。その下位に、中海湖底から連続する泥層が分布し、湖岸付近では貝化石を含むが、砂堆の内側（西側）では植物質の泥に移行している。扇状地部には、これを構成する砂礫層が分布している。完新統の下位には、更新統の礫層および泥層が分布していて、これは最終間氷期の扇状地および三角州堆積層とみられる。

平野面には、旧河道にともなう小崖や自然堤防列がみとめられ、自然堤防の微高地に中島・春日・今宮の集落が形成されている。国府跡は中島の微高地にある。



第２図　出雲国府跡の周辺地形

（2）地形発達の概要

意宇平野のような沖積平野は、最終氷期が終った1万年前以降の環境変化にともなって形成された新しい地形であり、律令時代以降にも変化を続けている。約1万年前、日本列島付近の海面は-40m付近にあり、意宇川は中海湖底に谷を刻んで流れ、境港付近で海に注いでいた。その後急速に海面が上昇し、海面の高さが現在とほぼ同じレベルに達した6000年前頃には、中海の水域は現在よりも広く、意宇平野の一部にも水域が広がっていた。この時、意宇平野の東端には中海岸に平行する沿岸砂州があり、その内側にはごく小規模な入り江状の水域が存在した。5000年前頃には、海面が+1m前後まで上昇した時期があり、平野東部の鹹貫遺跡では、その時期に形成されたとみられる瀬間帯の堆積層が+1.4mを上限として分布している[2]。その後、意宇川三角州の前進によって水域は湿地に変化し、やがて消滅したと考えられる。この水域が消滅した時期は不明である。

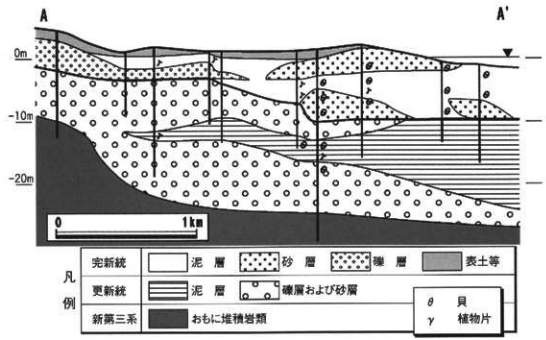
（3）旧河道について

意宇平野には3つの旧河道が認められる[3]（写真図版1）。

①とした旧河道は、空中写真による判読で三角州面上には認められるが、扇状地部への連続がはっきりしない。水田の区割りにも影響しておらず、北側の丘陵地から流れ出る小河川の流路であろう。ただし、ずっと古い時期には意宇川の旧河道だったかもしれない。

②の旧河道は、攻撃斜面にあたるとみられる小崖が現地形に残り、水田の区割りにはっきりと影響を与えている。中島付近から北東へ伸びる様子が明瞭で、比較的新しい時期に、意宇川がこの河道を流れていたといえる。

③の旧河道は、現河道にほぼ沿っている。これを河川改修によって直線的流路したものが現河道とみられ、もっとも新しい時期の旧河道といえる。この河道は、国府と南側の丘陵地との間の狭い部分を流れ、国府域の南西端を削っている。



第3図 意宇平野の層序想定図

第２節　歴史的環境

天平５（733）年に編纂された『出雲国風土記』は古代出雲の姿を克明に描写している。これまでに風土記の丘地内遺跡調査として発掘調査を行った山代郷正倉跡[4]、四王寺跡（山代郷南新造院跡）[5]、来美廃寺（山代郷北新造院跡）[6]は、いずれも『風土記』に登場する遺跡であり、出雲は古代史を遺跡と文献から復原・検討できる全国的にも数少ない地域ということができる。

今回発掘調査を行った出雲国府跡についても、『風土記』には次のような一節がある[7]。

国の東の堺より西に去くこと二十里百八十歩にして野城橋に至る。…（中略）…又西二十一里にして国庁、意宇郡家の北なる十字街に至り、即ち分かれて二つの道となる。（一つは正西道、一つは枉北道なり。）

これによれば、国庁と意宇郡家は同所にあり、その北側に正西道（山陰道）と枉北道（隠岐への官道）が交わる十字街があったことも分かる。また、『風土記』には黒田駅家・意宇軍団も郡家と同所にあったと記されており、出雲国府が国・郡の行政・交通・軍事を一手に担う重要な役割を果たしていたことが窺われる。

意宇平野に出雲国府が置かれるようになった背景としては、古墳時代の政治状況が大きな関わりをもっているものと見られる。古墳時代前期から中期にかけては傑出した規模をもつ大形古墳はないが、意宇平野の北側、大橋川・中海沿岸を中心に寺床１号墳（方墳30m）、廻田１号墳（前方後円墳57m）、石屋古墳（方墳40m）、竹矢岩舟古墳（前方後方墳50m）などが営まれている。また、意宇平野の南側丘陵から八雲村にかけては、東百塚山古墳群（64基以上）・西百塚山古墳群（42基以上）・増福寺古墳群（26基）など中期から後期前半の小方墳からなる群集墳が分布している。

この時期の集落跡は明確になっているものは少ないが、夫敷遺跡、神田遺跡などが知られている。夫敷遺跡は平野の東側、中海汀線近くの意宇川河口付近に位置するもので、第Ⅳ調査区中層では甑・甕など渡来系の陶質または軟質土器が出土している[8]。

古墳時代後期になると、こうした状況が大きな変化があり、茶臼山の北西麓に大形の首長墳が出現する。大庭鶏塚古墳（方墳42m）、山代二子塚古墳（前方後方墳92m）、山代方墳（方墳45m）、永久宅後古墳がそれで、６世紀から７世紀前半にかけて営まれた出雲東部における最高首長の世代墓と考えられる[9]。また、意宇平野の周辺では「各田部臣」の銘文入り大刀が出土した岡田山１号墳（前方後方墳24m）、御崎山古墳（前方後方墳40m）、岩屋後古墳、古天神古墳（前方後方墳27m）など最高首長を支えた勢力が残したと見られる古墳も確認されており、この地域が出雲を代表する政治勢力に成長したことが窺える。出雲国府が置かれた意宇平野は、まさに出雲東部における後期古墳文化の中心地であり、どのような意図であれ、その選地にあたっては地域勢力が意識されているものと思われる。

出雲国府が設置された奈良時代の遺跡としては、前述した山代郷正倉跡、四王寺跡、来美廃寺が茶臼山の北西から南西麓にかけて営まれており、四王寺の瓦窯である小無田Ⅱ遺跡も明らかになっている[10]。意宇郡家、駅家、軍団については、その所在は明らかになっていないが、黒田畦遺跡のように出雲国内の郡名である「云右（飯石）」という墨書土器が検出された遺跡もあり[11]、官衙または関連施設が広がっていることが窺われる。また、『風土記』に「陶器造れり」と記された大

井古窯跡群（池ノ奥窯跡・山津窯跡・ババタケ窯跡・岩汐窯跡など）は出雲国府からは大橋川を挟んで対岸にあり、大量消費地に容易に供給できる地点に位置している。

出雲国分寺跡、国分尼寺跡は、意宇平野北東側の丘陵裾部に所在している。このうち、国分寺跡は金堂・僧坊・講堂・塔などの伽藍配置が明らかになっており[12]、国分尼寺跡との中間地点にある中竹矢遺跡付近ではこれらに伴う瓦窯が3基以上存在することも判明している[13]。

平安時代の遺跡としては、出雲国府の東側で神田遺跡、大屋敷遺跡、天満谷遺跡などが確認されている。このうち、天満谷遺跡は掘立柱建物跡が6棟検出された他、白磁・越州窯系青磁・同安窯系青磁などがまとまって出土しており、国府との関わりが考えられる[14]。

1．大坪遺跡　2．出雲国分寺跡　3．出雲国分尼寺跡　4．中竹矢遺跡　5．山代郷南新造院跡　6．小熊田遺跡
7．山代郷正倉跡　8．黒田畦遺跡　9．来美廃寺　10．岡田山古墳群　11．岩屋後古墳　12．御崎山古墳　13．古天神古墳
14．西百塚山古墳群　15．東百塚山古墳群　16．安部谷横穴墓群　17．大庭鶏塚古墳　18．山代二子塚古墳　19．山代方墳
20．永久宅後古墳　21．向山1号墳　22．東淵寺古墳　23．雨乞山古墳　24．増福寺吉墳群　25．前田遺跡　26．青木遺跡
27．寺床古墳群　28．大木権現山古墳群　29．夫敷遺跡　30．廻田古墳群　31．オノ峠遺跡　32．平所遺跡　33．間内越墳墓
34．来美墳墓　35．竹矢岩舟古墳　36．手間古墳　37．石屋古墳　38．池ノ奥窯跡群　39．山津窯跡群　40．寺尾窯跡
41．ババタケ窯跡　42．岩汐窯跡群　43．魚見塚古墳　44．朝酌岩屋古墳　45．廻原1号墳

第4図　出雲国府跡と周辺の遺跡

第３節　出雲国府跡をめぐるこれまでの調査

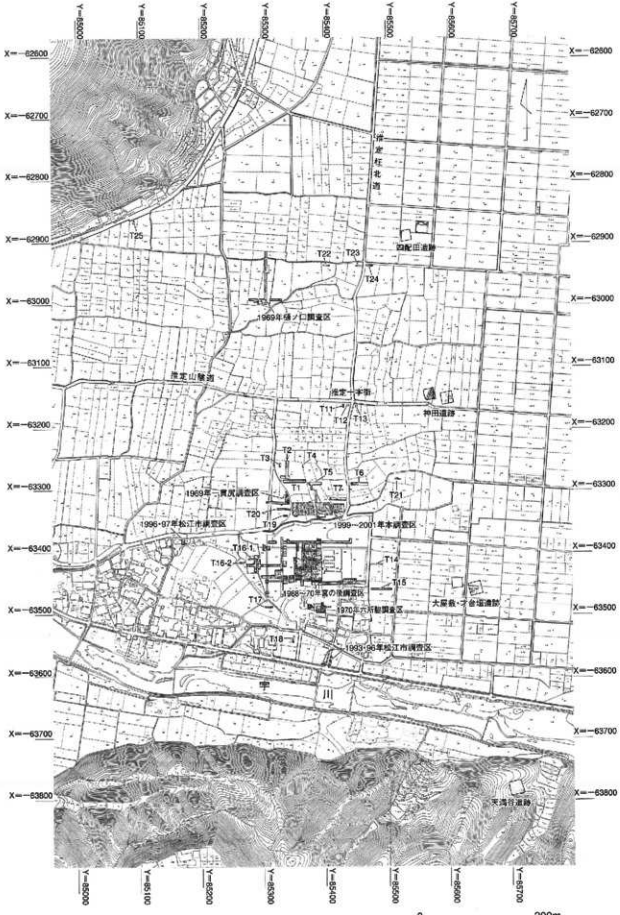
出雲国庁跡は、天平５（733）年に編纂された『出雲国風土記』に記述があることから江戸時代より関心が持たれており、その所在地については東出雲町上夫敷説、松江市竹矢町三軒屋説、大草町西端説、大草町竹ノ後説などの諸説があった[15]。このうち、朝山皓が『風土記』の里程から唱えた大草町西端説と、恩田清が元禄４（1691）年の『大草村検地帳』に残る「こくてう」という小字を根拠に提唱した大草町竹ノ後説は当時より有力で、大草町六所神社後方付近では出雲国分寺跡と同型の軒丸瓦や「春」の印文が入った銅印が出土していたことから[16]、松江市教育委員会が昭和43（1968）～45（1970）年の３ヶ年にわたって発掘調査を行った[17]。

この調査は、奈良国立文化財研究所の指導を受け、考古学だけでなく歴史地理・文献史学の研究者も参加した総合的な学術調査であった。調査地点は国庁の所在を確認するために六所神社付近に設定された六所脇地区・宮の後地区と、国庁域を検討するための水垣地区・樋ノ口地区・一貫尻地区である。その結果、六所脇・宮の後地区では政庁後殿と見られる四面廂大形建物跡や整然と並んだ掘立柱建物跡、これらを区画する大溝などが検出された他、文書行政が行われたことを示す硯・墨書土器・木簡などが出土し、古代官衙の存在が明らかとなった。樋ノ口地区では国庁域を示す遺構は見られなかったが、金属器生産関係の工房とも考えられる遺構も確認された。また、一貫尻地区では南北に延びる石敷とその西側で窯地が検出されており、東側に広がる官衙区画の西端に当たる可能性が既に指摘されている。

昭和49（1974）年には、島根県教育委員会が史跡整備を行うための発掘調査を宮の後地区で行った。部分的な調査ではあったが調査区の東側で南北方向に延びる溝が検出された他、黒書土器・ヘラ書き土器も出土しており、特に、国司の官名である「少目」と書かれた墨書土器が含まれていた点が注目された[18]。

第１表　史跡出雲国府跡の発掘調査

	年　度	調査主体	調査原因	文　献
1	昭和43(1968)	松江市教育委員会	学術調査	註(３)
2	昭和44(1969)	松江市教育委員会	学術調査	
3	昭和45(1970)	松江市教育委員会	学術調査	
4	昭和49(1974)	島根県教育委員会	史跡整備	註(18)
5	昭和60(1985)	島根県教育委員会	土地改良総合整備事業	註(19)
6	昭和61(1986)	島根県教育委員会	土地改良総合整備事業	
7	昭和62(1987)	島根県教育委員会	土地改良総合整備事業	
8	平成５(1993)	松江市教育委員会	道路拡幅	註(20)
9	平成８(1996)	松江市教育委員会	個人住宅建設・道路拡幅	本報告
10	平成９(1997)	松江市教育委員会	個人住宅建設	
11	平成11(1999)	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	
12	平成12(2000)	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	
13	平成13(2001)	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	
14	平成14(2002)	島根県教育委員会	風土記の丘地内遺跡調査	



第５図　出雲国府跡発掘調査区配置図（１）

その後は、平成11（1999）年に風土記の丘地内遺跡調査の一環として出雲国府跡の発掘が再開されるまで本格的な調査はなかったが、史跡の現状変更に伴う小規模な調査は何度か行われている。

昭和60（1985）～62（1987）年に行われた土地改良総合整備事業に伴う調査は、農業機械化に伴い営農に支障をきたしていた狭い道路と水路を改良するために実施したものである。調査対象地域は史跡内の広範囲に及んだが、工事により掘削される深さが浅かったこともあって、遺構はほとんど検出されておらず、遺物の採集程度に留まった[19]。

平成5（1993）年には、市道拡幅に伴って六所神社南東側で調査が行われた。調査の結果、道路東側のトレンチで南北2間以上・東西1間以上で柱間に横木を渡して補強した掘立柱が検出されているが、その性格は明らかになっていない[20]。

平成8（1996）年には、平成5年の調査で遺構の存在が明らかになったため、遺構が検出されなかった道路西側を拡張して調査が行われたが、同様に遺構は見られなかった。また、平成8年と平成9（1997）にわたって、史跡公園西側で個人住宅建設に伴って調査が行われているが、遺構は確認されていない。

註

（1）建設省計画局・島根県・鳥取県「中海臨海地帯の地盤」『都市地盤調査報告書』15　1967

（2）島根県教育委員会「島田池遺跡・鷲貫遺跡」『一般国道9号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区』Ⅷ　1997

（3）松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』1970

（4）島根県教育委員会『史跡出雲国山代郷正倉跡』1981

（5）a,島根県教育委員会「四王寺跡」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅴ　1988
　　b,島根県教育委員会「四王寺跡」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』Ⅹ　1994

（6）a,島根県教育委員会「来美廃寺」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』12　1998
　　b,島根県教育委員会「来美廃寺」『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告』13　2002

（7）加藤義成『修訂出雲国風土記参究』松江今井書店　1981

（8）島根県教育委員会「夫敷遺跡」『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅵ　1989

（9）渡辺貞幸「山代・大庭古墳群と5・6世紀の出雲」『山本清先生喜寿記念論集　山陰考古学の諸問題』1986

（10）松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団『小無田Ⅱ遺跡発掘調査概報』　1997

（11）松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団『黒田畦遺跡発掘調査報告書』　1995

（12）石田茂作・山本清『出雲国分寺の発掘』『出雲・隠岐』地方史研究所　1963

（13）島根県教育委員会「中竹矢遺跡」『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅹ　1992

（14）島根県教育委員会『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』　1987

（15）鍋田・「出雲国庁址について」『出雲・隠岐』地方史研究所　1963

（16）近藤正「出土品・寺跡」『島根県文化財調査報告書』第5集　島根県教育委員会　1968

（17）前掲註（3）に同じ。

（18）島根県教育委員会『史跡出雲国府跡環境整備報告書』　1975

（19）島根県教育委員会『土地総合改良整備事業に伴う史跡出雲国府跡発掘調査報告書』　1988

（20）松江市教育文化振興事業団『松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課年報』Ⅰ　1997

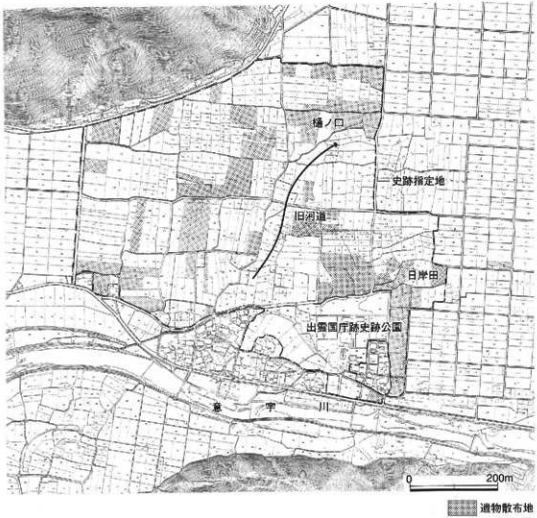
第３章　範囲確認調査

第１節　分布調査

史跡出雲国府跡における遺物散布状況を把握するため、指定地内の分布調査を行った。調査は、平成14（2002）年３月18日～３月20日までの３日間、島根県埋蔵文化財調査センター職員が３名ずつ２班に分かれて実施し、水田・畑を一枚ごとに踏査して、遺物の散布状況を確認した。

遺物の散布状況は第６図に網掛けして示したとおりで、猫ノ口地区から南西方向に延びる微高地と、現在の史跡公園周辺から日岸田地区にかけての微高地に遺物が散布しているのが特徴である。意宇平野の南西から北東に延びる旧河道と見られる低地では、遺物はあまり採集されておらず、微高地を中心に遺跡が展開していることが窺われる。

採集された遺物は土師器・須恵器・白磁・青磁・土師質土器の他、水晶・碧玉などがある。小片が多いこともあって遺物分布の時期的な変化は捉えにくいが、古墳時代・奈良～平安時代・鎌倉時代以降に分けて見ても、微高地を中心とする遺物散布の傾向には大きな違いは見られない。ただし、鎌倉時代以降の遺物は史跡公園周辺では比較的見られるが、平野中央部では少ないようである。



第６図　出雲国府跡地内遺物散布状況

第２節　範囲確認調査

（１）平成11（1999）年の調査

史跡出雲国府跡地内の遺構分布状況は、昭和43（1968）～45（1970）年の調査の際に、樋ノ口地区・一貫尻地区・水垣地区でトレンチ調査が行われている。しかし、これ以外の地区では遺構の有無等が明らかになっていないため、まずトレンチ調査を行うこととなった。

調査用の区割りは、国土座標Ｘ＝－64000・Ｙ＝85400を原点として、10ｍ間隔に北へＮ10・Ｎ20・Ｎ30……、東へＥ10・Ｅ20・Ｅ30……、西へＷ10・Ｗ20・Ｗ30……と表すこととした。調査区の配置は、現在の史跡公園北側に第１トレンチ～第10トレンチの計10本、山陰道と枢北道が交差する推定十字街の南側に第11トレンチ～第13トレンチの計３本、史跡公園の東側に第14トレンチ・第15トレンチの計２本を設定した。

ａ，トレンチ調査の概要

第１トレンチ　４ｍ×35ｍで東西方向に設定したトレンチである。規則的な配置を持たない小さなピットが多数検出された。調査区の西端部は自然河道など落ち込みになる可能性がある。出土遺物には、金属製品・木製品がある。

第２トレンチ　南北４ｍ×25ｍ、東西４ｍ×14ｍでＬ字形に設定したトレンチである。小さなピット群があり、その中には２間×４間の小規模な掘立柱建物跡になると想定できるものもある。調査区の北部では、東西方向に延びる１号溝が確認されている。溝は幅2.4～2.6ｍ・深さ0.3ｍほどのもので、土師器甕・高坏・坏、須恵器蓋坏・高坏・壺・器台など古墳時代中期後半の遺物が多量に検出されている。

第３トレンチ　２ｍ×６ｍで南北方向に設定したトレンチである。小ピットが確認されている。

第４トレンチ　２ｍ×６ｍで南北方向に設定したトレンチである。遺構は見られなかったが、古墳時代の遺物包含層が確認されている。

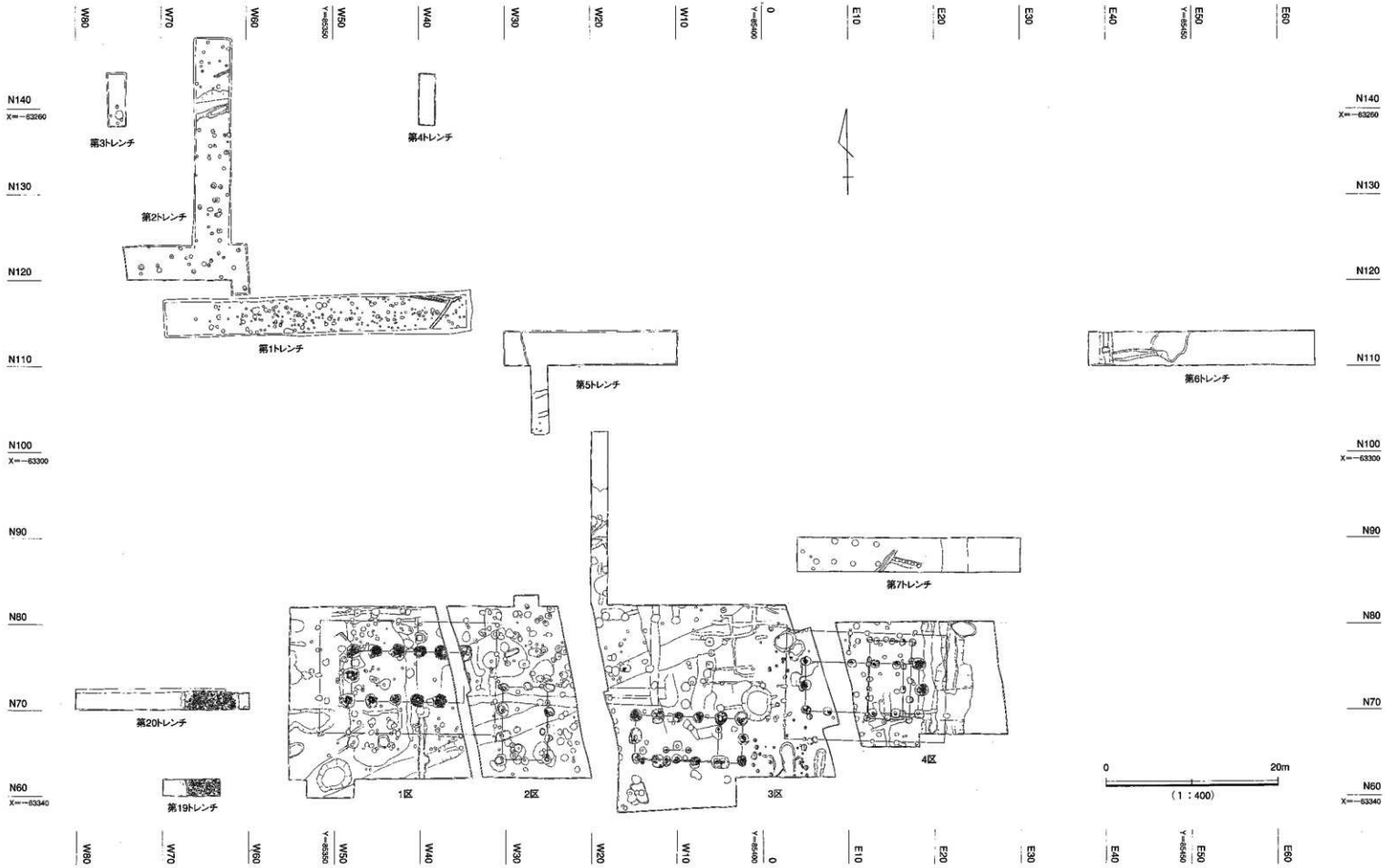
第５トレンチ　４ｍ×20ｍで東西方向に設定したトレンチで、平成13（2001）年にその南側に２ｍ×６ｍのトレンチを設けて拡張している。中央がやや窪む谷地形となっており、砂利が溜まっていた。柱根が３つ確認されており、うち一つは径30cm程度のものであった。

出土遺物としては、白磁皿、金属製品、木製品がある。

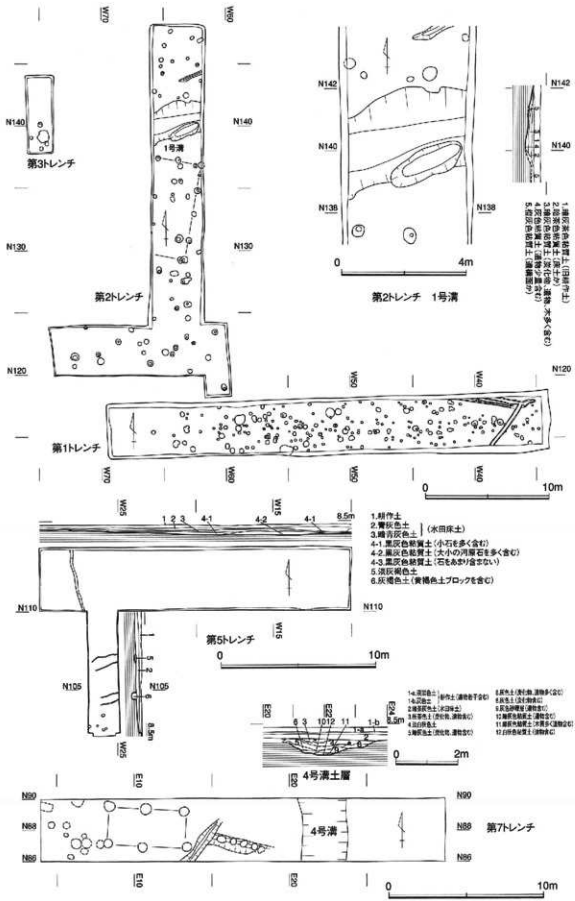
第６トレンチ　４ｍ×26ｍで東西方向に設定したトレンチである。東側が１段高くなっていることから、第５トレンチとの間はやや谷状になっているものと思われる。調査区西側に南北方向に延びる２号溝、東側に１号土坑があり、両者の間にも浅い溝状の落ち込みがある。

２号溝は幅1.4～1.6ｍ・深さ0.4ｍで、埋土は淡灰色または暗灰色粘質土である。溝の内部からは白磁椀・皿・水注、中国陶器黒釉椀・黄釉盤・黒釉茶入・壺、土師質土器坏・柱状高台付皿など平安時代後期の遺物が多量に検出されている。１号土坑は径４ｍほどの不整形な土坑で、埋土は灰色粘質土である。内部より平安時代前期の須恵器坏、土師質土器坏が出土している。

第７トレンチ　４ｍ×26ｍで東西方向に設定したトレンチである。調査区の西側にピット群があり、２間×１間以上の掘立柱建物跡を想定できるものもある。東側には南北に延びる４号溝が検出されており、幅2.8ｍ・深さ0.5ｍである。溝の内部からは、須恵器蓋坏・高坏・甕・硯などが多量に出土しており、「浄」・「法」などと墨書されたものも確認されている。また、羽口、坩場、炉壁、鍛冶滓などの金属器生産関係遺物、水晶・碧玉・瑪瑙などの玉生産関係遺物が検出された。



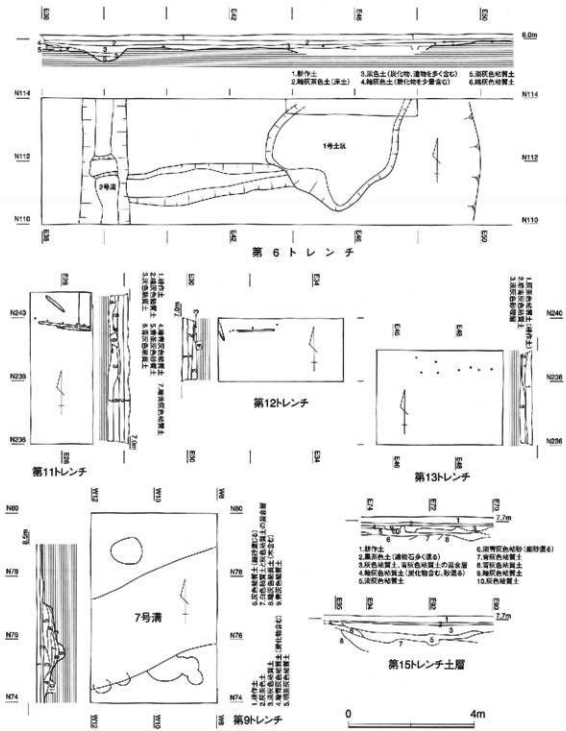
第7図　出雲国府跡調査区配置図（2）



第８図　第１～第３・第５・第７トレンチ遺構実測図

第８トレンチ　南北方向に４ｍ×８ｍ、東西方向に２ｍ×９ｍのＴ字形に設定したトレンチで、本調査の４区として拡張している。第７トレンチから南に続く４号溝の延長を確認している。溝の中からは須恵器蓋坏・皿・壺などが出土しており、「出厨」と書かれた墨書土器も含まれている。

第９トレンチ　４ｍ×６ｍで南北方向に設定したトレンチで、本調査の３区として拡張している。北東から南西方向に延びる７号溝が検出されており、幅2.4～2.5m・深さ0.45mである。内部より古墳時代中期の土師器が出土している。



第９図　第６・第９・第11～第13・第15トレンチ遺構実測図

第10トレンチ　4ｍ×6ｍで南北方向に設定したトレンチで、本調査の2区として拡張している。古墳時代中期の土坑の他、古代の大形ピットが検出された。

第11・12・13トレンチ　第11トレンチから順に2.5m×5ｍ、2ｍ×4ｍ、3ｍ×4ｍで設定したトレンチである。推定山陰道と平行するように東西方向に延びる杭列が検出されており、第11・12トレンチでは杭に横木がわたされている。

第14・15トレンチ　第14トレンチが2ｍ×20m、第15トレンチが2ｍ×30mで、東西方向に設定したトレンチである。ピット・土坑の他、ともに調査区西端部で溝状の落ち込みがあることが確認されている。

b，第2トレンチ　1号溝出土遺物

第10図1～10は土師器甕である。このうち、1～5は退化した鈍い稜のある複合口縁をもっており、調整は2・4・5の外面胴部がハケメ、内面はヘラケズリである。6～10は「く」字形に屈曲した単純な口縁をもつもので、6は丸い底部が遺存している。調整は7・9・10の外面胴部にハケメ、6・7・8・10は口縁内面にハケメ、胴部内面はヘラケズリである。

12は土師器坏である。丸みのある体部をもっており、調整は外面底部にはケズリ、内面にナデが見られる。

第10図13、第11図14～19は土師器高坏である。13・14は丸みのある坏部、15～19は外面に稜のある坏部をもっている。19は坏部内面に斜格子の暗文をもっているが、他のものには見られない。調整は13・15・18の外面にハケメ、15は坏部内面底部にミガキ、17・19は坏部内面にハケメ、15・16・19の脚部内面にはケズリが見られる。18は内外面に赤色顔料が塗布されている。

20～22は須恵器蓋坏である。20・21は坏蓋で、口縁はまっすぐ立ち上がり、外面に稜をもっている。口唇はともに鋸歯状に面をなしており、20の頂部外面には回転ヘラケズリが見られる。22は坏身で、口縁にかなり内傾したかえりを有する。外面底部は回転ヘラケズリ、内面には同心円状の当て具痕が残っている。

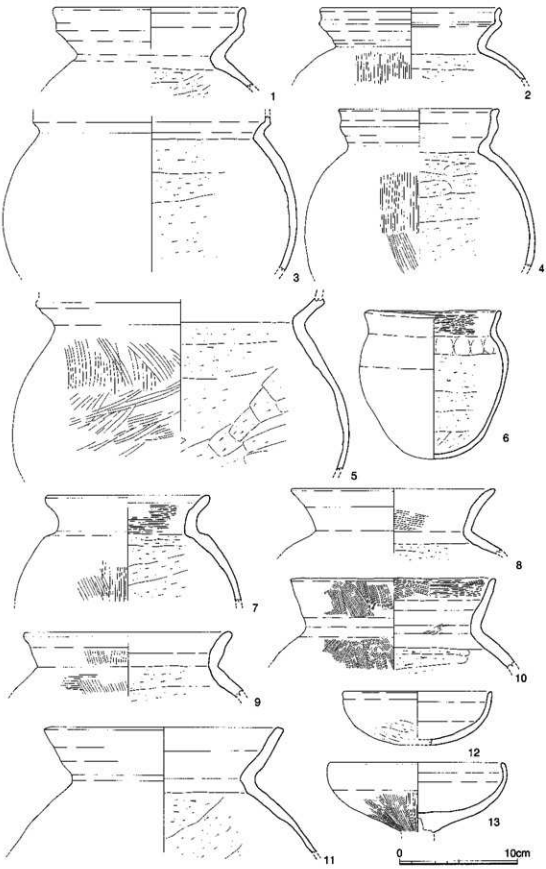
23・24は須恵器高坏である。23は丸みのある脚端部の小片で、一部に透孔があることが分かる。24は鉢状をなす坏部の小片で、外面に1条の沈線と飾りつまみが付いていた痕跡が残る。調整は外面下半に回転ヘラケズリが見られる。

25は体部の孔は欠われているが、須恵器甑と見られる。外面には斜行刺突文と沈線が施されている。底部は丸く、内面に粘土充填痕が明瞭に残っている。

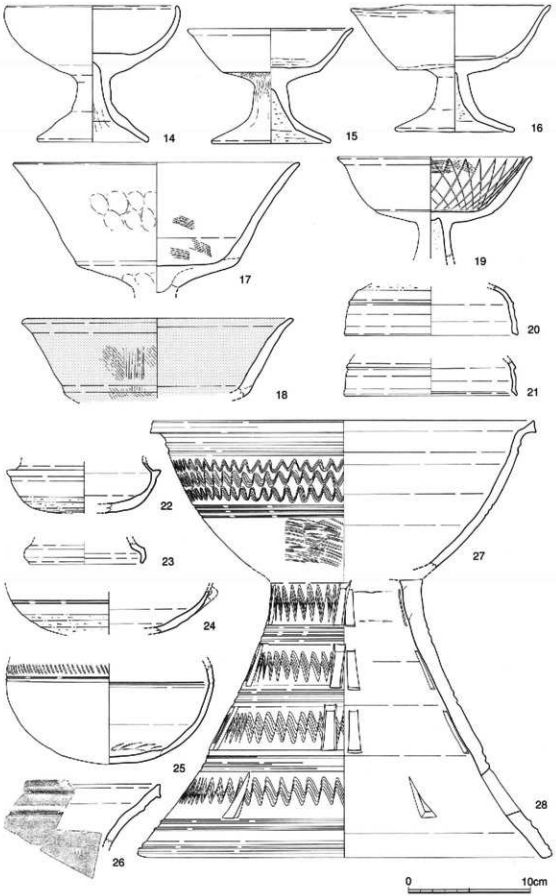
26は須恵器壺の口縁部である。口縁は縁状に面をなしており、外面に稜線が1条めぐっている。外面の一部には平行タタキ痕があるが、回転ナデにより消されている。

27・28は須恵器器台である。鉢状の受け部と「ハ」字形に広がる脚部をもっている。受け部は口縁が短く屈曲しており、外面には上から順に2条の稜、3条の波状文、3条の沈線が施されている。受け部外面下半には平行タタキ痕が見られる。脚部は2条1単位の稜線により5段に分けられている。このうち、上から4段には波状文が入っており、3段目までは長方形の透孔が5方向に付けられている。4段目の透孔は三角形で、上段の長方形透孔とは交互になるように配されており、5または6方向に設けられているものと見られる。5段目は脚端部との間隔が狭く、特に文様や透孔は施されていない。

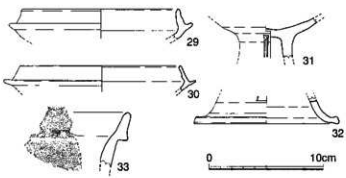
第12図29・30は須恵器坏身で、内傾するかえりをもつ。



第10図　第２トレンチ１号溝出土遺物実測図（１）



第11図　第２トレンチ１号溝出土遺物実測図（２）



第12図　第２トレンチ　１号溝出土遺物実測図（３）

31・32は須恵器高坏である。

ともに脚部の破片で、透孔をもっている。

33は須恵器壺の口縁部で、頸部外面に波状文がある。

第12図の須恵器は、いずれも小片であり、混入遺物である可能性が高い。

c、第７・第８トレンチ　４号溝出土遺物

第13図１～９は須恵器坏蓋である。１は口縁にかえりをもつものである。４・５は屈曲して直立する口縁をもつもので、輪状つまみが付いており、頂部には静止糸切り痕がある。ともに内面に墨痕があり、転用硯として使用されたものと見られる。２・３・６～８は口縁端部が短く屈曲し、断面が三角形状をなすものである。６・７には宝珠つまみが付いている。３は口径が9.2cmと小さく、坏以外の蓋である可能性もある。

10～18は須恵器坏身、19～21は須恵器皿で、無高台のものである。坏の底部切り離しはすべて回転糸切りである。10は内面に漆が付着している。14～18には底部外面に墨書があり、14は「奇？」、15は「浄」、16は「法」、17は「出厨」、18は「光？」と判読できる。20は器壁がやや厚く、外面に回転ヘラケズリが見られる。21は口縁が大きく屈曲し開くもので、灯明皿である可能性がある。

22～30は須恵器坏身、31～35は須恵器皿で、高台が付くものである。底部の切り離しは31はヘラ切りの可能性があるが、その他は回転糸切りである。37・38は皿または坏の底部破片で墨書があり、38は「出」と読める。

39は土師器皿で、高台が付くものである。内外面に赤色顔料が塗られている。

40は須恵器皿である。底部は低く高台状に縁があり、口唇は内面を強くナデている。

41・42は須恵器鉢である。41は鉄鉢形の底部とも考えられるが、回転糸切り痕が残っている。42はやや肩が張るもので、口縁部は短く外反している。

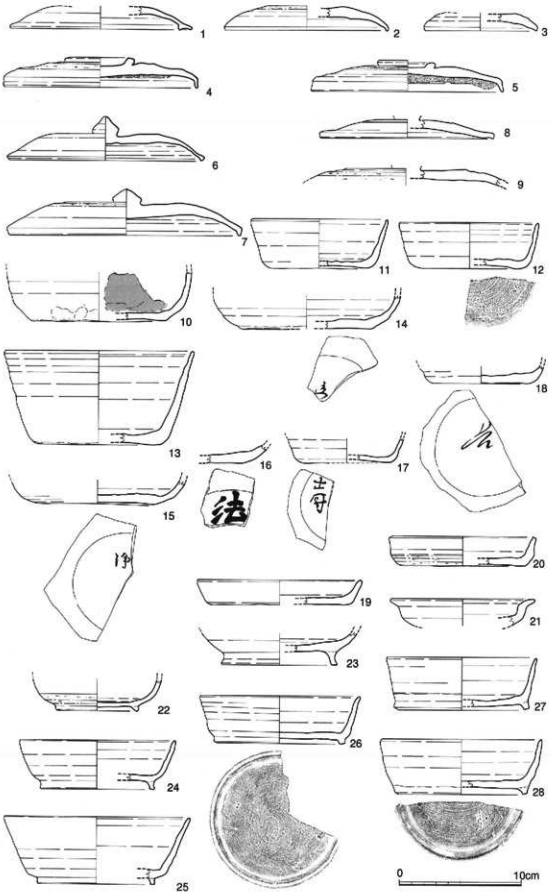
43～45は須恵器高坏である。43は口縁部で内面の端部は上方にやや突出する。44・45は比較的太い脚部がついており、坏部外面下方には回転ヘラケズリが見られる。

36・46・47・第15図49・50は須恵器壺である。46は長頸壺で外面に２条の沈線がある。47は内外面に漆が付着していることから漆壺と見られるが、破面にも漆が付いていることから破損後パレットとして使われた可能性がある。36・49は高台が付く壺、50は無高台の壺である。48は宝珠ツマミが付く蓋であるが、形態から見て短頸壺の蓋になるものと考えられる。

51～53は須恵器甕である。51・52は「く」字形に屈曲する口縁部をもっており、51は外面に稜がある。53は底部で高台が付いている。

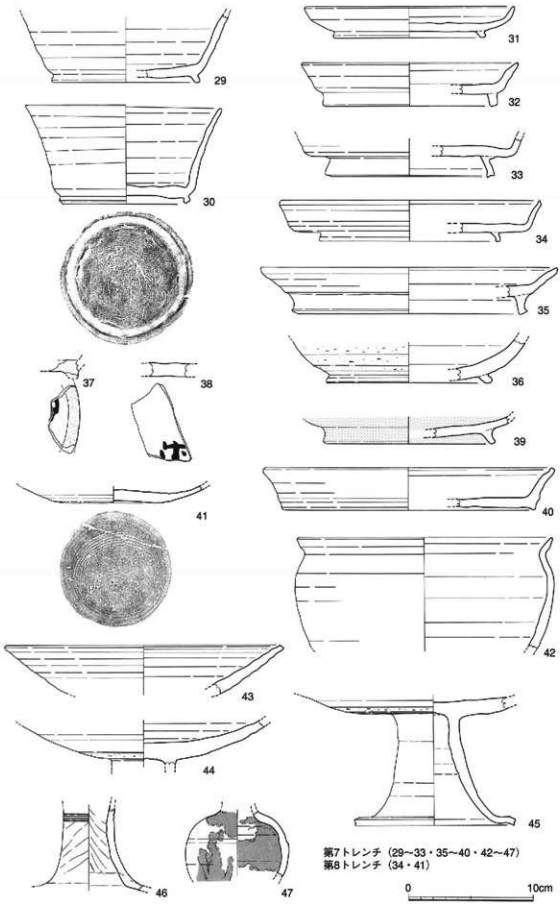
54は須恵器硯である。口縁部の小片であるが、陸部の周辺と、海部が残っている。

55・56は須恵器托である。ともに口縁部を欠損しているが、中央に凹状になった立ち上がりが付いている。

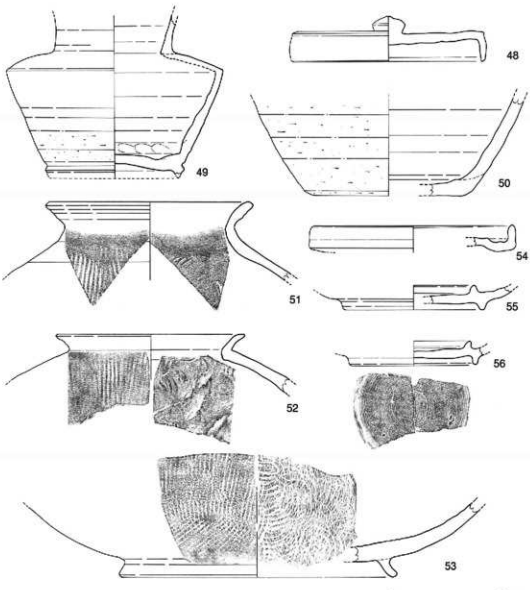


第7トレンチ（1・3・5～6・18・19・21～28），第8トレンチ（2・4・17・20）

第13図　第７・第８トレンチ４号溝出土遺物実測図（１）



第14図　第７・第８トレンチ４号溝出土遺物実測図（２）



第7トレンチ（48・49・51～59）,第8トレンチ（50）

第15図　第７・第８トレンチ４号溝出土遺物実測図（３）

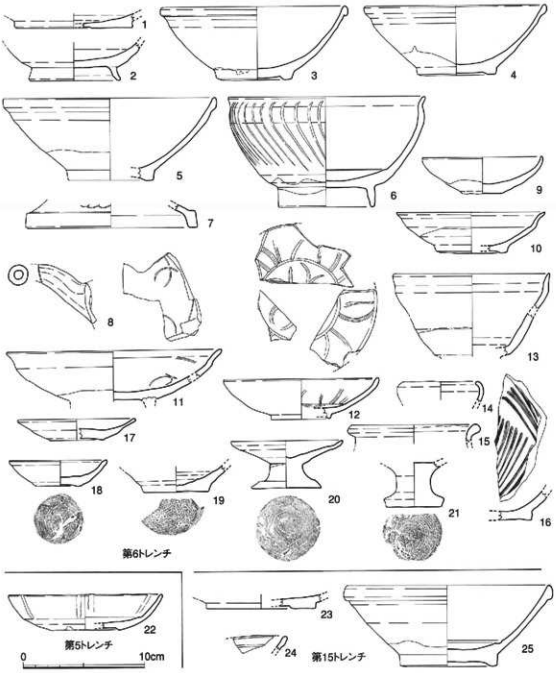
d，第５・第６・１５トレンチ出土遺物

第16図１・23は緑釉陶器である。１は軟質の大碗で、蛇の目高台を持ち、内外面に淡黄緑色の釉薬が施されている。９世紀中頃。23は蛇の目高台の緑釉陶器である。９世紀中頃の京都洛北産と思われる(1)。２は灰釉碗である。高い付け高台である。10世紀後半。

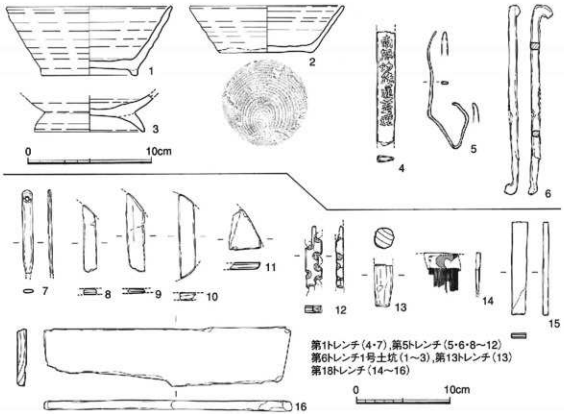
３～12・22・24・25は中国製白磁である。３～５は碗Ⅳ類である(2)。３は外面高台付近まで、４・５は外面体部中程まで施釉される。６は全形が分かる碗ⅩⅡ－１ｂ類である。内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。内面には段がある。高台は高く、畳付は平らである。外面にはヘラにより施文される。高台と体部の境には一部施釉されない場所がある。７は広東系合子壷である。外面は施釉され、ヘラによる文様がある。８は広東系水注の注口である。９は皿Ⅵ－１類である。体部下半は施釉されない。10は高台が低く厚い、皿Ⅱ－１ａ類。口縁部は外反し、体部内面には段が

ある。11は碗XⅢ－（2）b類で、口縁部は外反し、体部外面下半まで施釉される。内面にはヘラ描き文を施す。12はⅢⅦ－2bで、口縁部は外面上方に伸びる。内面には櫛刀の花弁文を施す。22はⅢXI－5類と思われ、口縁部は輪花がある。底部は碁笥底風で、施釉されない。24は碗XI－1類と思われる精良な破片である。口縁部はあまり厚みのない玉縁で、青白色を帯びた白色である。25は碗Ⅳ－1a類で、底部内面に沈線がある。

13は中国製黒釉碗で、口唇部は先細る。外面体部下半は施釉されない。14は中国製黒釉茶入れである。厚さ3mmほどと薄く、破片全面に施釉される。15は中国製陶器C群の耳壺Ⅲ（或いはⅣ）類と思われる。口縁部はやや肥厚し、褐釉が施される。16は中国製陶器C群の黄釉盤である。内面は施釉され、鉄絵がある。



第16図　第5・第6・第15トレンチ出土遺物実測図



第17図　第１・第５・第６・第13・第18トレンチ出土遺物実測図

第16図17～21は土師質土器である。17・18は小形の皿、19は坏、20・21は柱状高台付皿で、いずれも切り離しは回転糸切りである。

e、第６トレンチ　１号土坑出土遺物

第17図１・２は須恵器の坏である。１は底部外縁に高台があるもの、２は高台がないもので、ともに切り離しは回転糸切りである。３は土師質土器で足高高台が付くものである。

f、第１・第５・第13トレンチ出土金属製品・木製品

第17図４・５は銅製品である。４は薄い銅板が巻かれたもので、現存長9.2cm・幅1.4cm・厚さ0.5cmである。断面形は刀子状を呈しており、内部には木質が僅かに残る。表面には「南無妙法蓮華経」という文字が見える。５は現状では大きく変形しており、幅0.4cm・厚さ0.2cmである。両端は丸く窄まっている。

６は鉄製品である。両端が鉤形に曲がるもので、先端は約90°に近い角度で互い違いの方向を向いている。長さ15.2cm・幅0.5～0.7cmである。

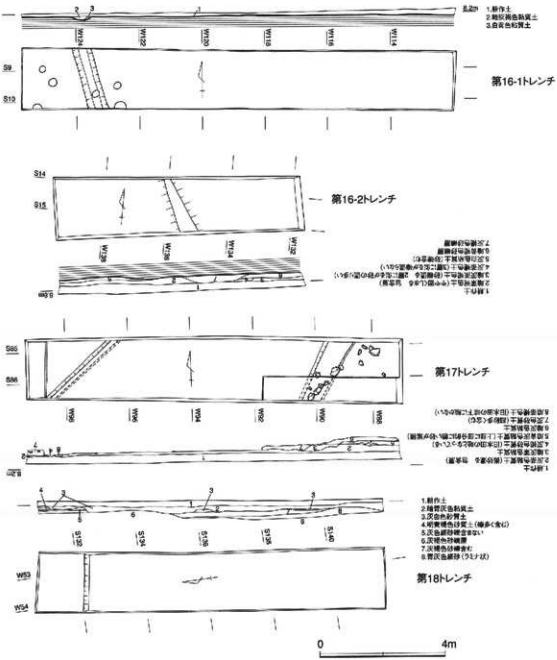
７～13は木製品である。７は現存長8.9cm・幅1.1cm・厚さ0.4cmで、先端が欠損しているが、全体に丁寧な面取りがなされており、端部に円孔が穿たれている。８～11は曲物底板の破片で、厚さは0.5～0.8cmである。このうち10は側縁の両端が遺存しており、復原すれば径10cm程度になるものと思われる。木取りはいずれも板目取りである。12は火鑽板である。両端は欠損しているが、幅1.7cm・厚さ0.7cmで、両側に間隔を置いて切欠きを入れ、火鑽杵を回転させた火鑽臼を上面に残している。火鑽臼の断面は半球形で、内面が黒く炭化している。13は径2.1cmの棒状のものである。一方を欠損するが、先端はやや窄まっており、全体に丁寧な面取りが見られる。

（2）平成12（2000）年の調査

史跡公園西側に第16トレンチ、南西側の旧河道とみられる低地に第17・第18トレンチを設定した。第16トレンチは地形の都合上、2本としたので計4個所について調査を行った。

第16－1トレンチ　2m×14mで東西方向に設定したトレンチである。耕作土を除去すると、すぐに地山が検出された。調査区の西側で径20cmほどの小さなピットと溝状の遺構が確認された。遺物から古代末または中世の遺構と見られる。

第16－2トレンチ　2m×8mで東西方向に設定したトレンチである。西に向かって傾斜しており、西半部では地山は検出できなかった。調査区中程に灰褐色砂礫による畦状の高まりがあり、西側には暗黄褐色砂礫層が見られる。この層の上部で白磁・土師質土器が出土している。河川流路



第18図　第16～第18トレンチ遺構実測図

の肩部にあたるものと見られる。

第17トレンチ　2m×12mで東西方向に設定したトレンチである。灰茶色粘質土の下面で水田跡が検出されているが、近世・近代陶磁器が出土しており、現水田の前のものと考えられる。

第18トレンチ　2m×10mで南北方向に設定したトレンチである。遺構は見られなかったが、灰褐色砂礫層の中から須恵器、白磁、柱状高台付皿、木製品が出土している。このうち、第17図14は櫛の破片で、赤漆の文様が両面にある。15・16は板材で、15は短冊形を呈しており、長さ9.8cm・幅1.5cm・厚さ0.5cmである。

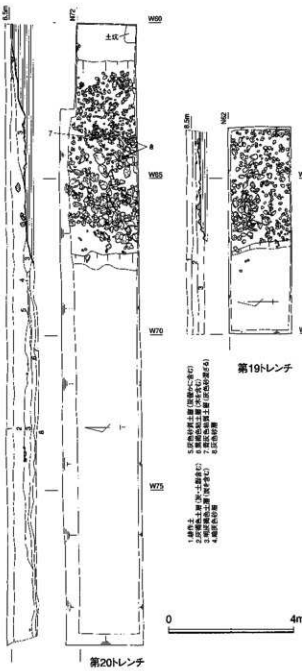
（3）平成13（2001）年の調査

本調査区の西側の広がりを確認するために、第19・20トレンチを設定した。また、日岸田地区や樋ノ口地区など遺物が採集されている地点や、推定枉北道の遺構を確認するために第21～25トレンチを設けて調査を行った。

第19トレンチ　2m×6.2mで東西方向に設定したトレンチである。表土下0.4mのところで石敷が検出されている。石敷は調査区西端から4mの範囲で確認され、西側に緩く傾斜している。

出土遺物には須恵器坏・壺・鉢がある。第20図5は坏で、高台はついておらず、回転糸切り痕が残る。6は高台のある坏である。10は短頸壺で、内面に漆が付着している。11は把手付の鉢で、横方向に把手が付いている。

第20トレンチ　2m×20mで東西方向に設定したトレンチである。表土下0.4m～0.6mのところで石敷が検出されている。石敷は6mの幅があり、西側に向かって傾斜している。石材は西側の深い部分では人頭大の大きめな石が使われているのに対し東側は比較的小さい石が目立った。石敷の西端は第19トレンチで確認されている石敷の西端から真北に当たる位置にある。調査区東側は黄褐色粘質土の地山が見られ、土坑状の遺構が掘り込まれている。これに対し、調査区の西側は灰色系砂層と、黒褐色



第19図　第19・第20トレンチ遺構実測図

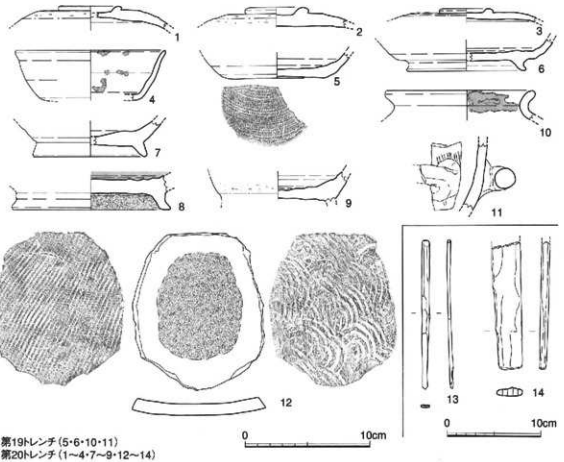
または青灰色粘質土が互層状に堆積しており、旧河道または池であった可能性が高い。したがって、石敷は護岸施設であることが考えられる。

昭和44（1969）年の一貫尻調査区は、第19・20トレンチの北側に設定されており、同様に南北に延びる石敷とその西側で窪地が確認されていることから、その延長線状にあたる遺構と考えられる。

出土遺物としては、須恵器蓋坏・壺・転用硯、白磁椀・皿、瓦、木製品がある。

第20図１～３は坏蓋で、いずれも輪状つまみが付くものである。１・２は頂部に回転ヘラケズリが入るが、３はカキメである。４は坏身で、外傾する体部をもっており、内面に僅かに漆が付着している。７・８・９は壺底部である。７の底部は回転ヘラケズリ、８は指頭圧痕が残っており、９は回転ナデ調整されている。また、８は内面には漆、外面底部の高台内側には墨が付着している。これは本来漆壺として使用されていたが、破損後底部を転用硯にしたものと考えられる。12は甕片であるが、周囲を楕円形状に丁寧に打ち欠いており、現状で長径12.5cm・短径10.5cmである。内面の同心円状当て具痕は表面がよく磨滅しており、転用硯とされていたものと思われる。

13・14は木製品である。13は欠損のない完形品で、長さ15.8cm・幅0.5～0.8cm・厚さ0.3cmである。狭い側の端部は尖り、広い側の端部は面取りがある。表面には削った痕が残り、中ほどには利器の刃が入った痕跡がある。14は一方が欠損しているが、現状で長さ13.2cm・幅2.5～3.0cm・厚さ0.7～0.9cmである。全面に丁寧な加工痕が残っている。



第19トレンチ（5・6・10・11）
第20トレンチ（1～4・7～9・12～14）

第20図　第19・第20トレンチ出土遺物実測図

第21トレンチ　日岸田地区で、東西方向に２ｍ×５ｍで設けたトレンチである。耕作土を除去するとすぐに遺構面が現れ、北西から南東方向に伸びる幅0.8mほどの溝と、その北東側で幅0.2mほどの細い溝が確認された。遺構の埋土は、土器片と炭が多く含まれる暗茶褐色土である。こうした状況から見て、付近の遺構の遺存状態は非常に良いものと思われる。

出土遺物としては、須恵器蓋坏・皿・甕蓋・硯、土師器皿、白磁椀、土師質土器柱状高台付皿などがある。第22図１は須恵器坏蓋で、宝珠つまみが付いている。２は須恵器短頸壺などの蓋と見られる。３は須恵器皿、５は須恵器坏で、底面に回転糸切り痕が残っている。４は土師器皿で底部の周囲に回転ヘラケズりがあり、内外面に赤褐色顔料が塗布されている。６・７は須恵器皿で高台が付いており、７の底面には回転糸切り痕がある。８は須恵器円面硯の脚部で、透孔が見られる。９・10は土師質土器柱状高台付皿で底面に回転糸切り痕がある。

第22トレンチ　樋ノ口地区で、東西方向に２×10mで設けたトレンチである。耕作土を除去するとすぐに遺構面があり、比較的大きいピット（土坑?）や溝状の遺構が確認されている。

出土遺物としては、須恵器坏・皿・壺・平瓶・硯・土錘などがある。第22図11～13は須恵器坏で、11・12が無高台、13は高台が付くもので、いずれも回転糸切り痕が残る。14は須恵器短頸壺である。15は須恵器平瓶の把手で、丁寧な面取りがある。16・17は須恵器硯の脚部片と見られる。18は土錘で、現状で長さ5.5cm・径1.8cmである。

第23トレンチ　苗代田地区で、東西方向に２×10mで設けたトレンチである。枉北道を確認するために、第24トレンチとともに推定枉北道の東西に設定した調査区である。調査した時点では湧水があり、十分な調査ができなかったが、耕作土下0.4mほどのところで、杭列と灰色砂礫層が確認された。杭列はほぼ磁北方向を向いており、砂礫層にはよく締まり固い部分もあったが、調査範囲内では道とは断定できなかった。

出土遺物としては、須恵器坏・壺があり、第22図19が坏、20が高台の付く壺底部である。

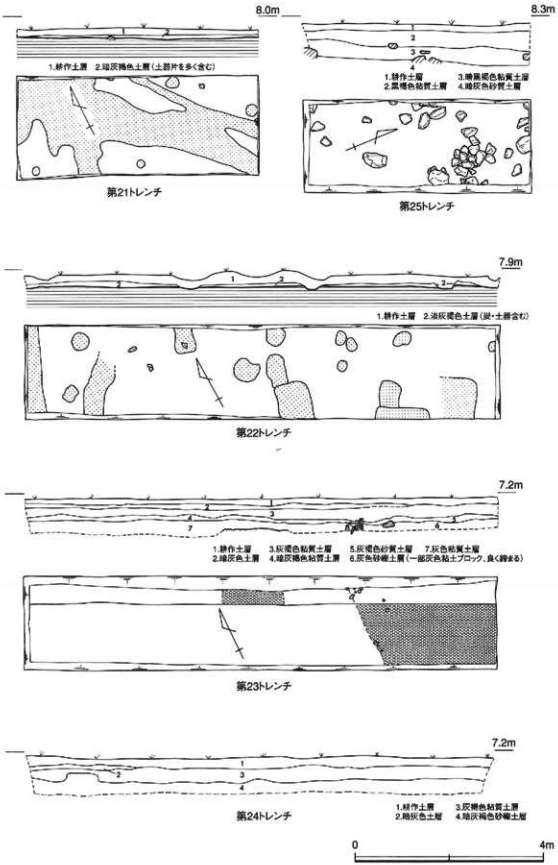
なお、調査中に地主である松浦俊雄氏より、苗代田で採集された玉筋砥石（第22図28）の提供を受けた。長さ33cm・幅10～17cm・厚さ11cmで、一面のみ剥離し欠損しているが、残る三面には研磨作業の痕跡がある。溝は一面に３～４条あり、石材は流紋岩である。

第24トレンチ　領抒地区で、東西方向に２×10mで設けたトレンチである。調査時点で湧水があり十分な調査ができなかったが、耕作土下0.5mほどのところで暗灰褐色砂礫層が確認され、調査区西側では幅0.6m・高さ0.2mほどの畦状の高まりが見られた。

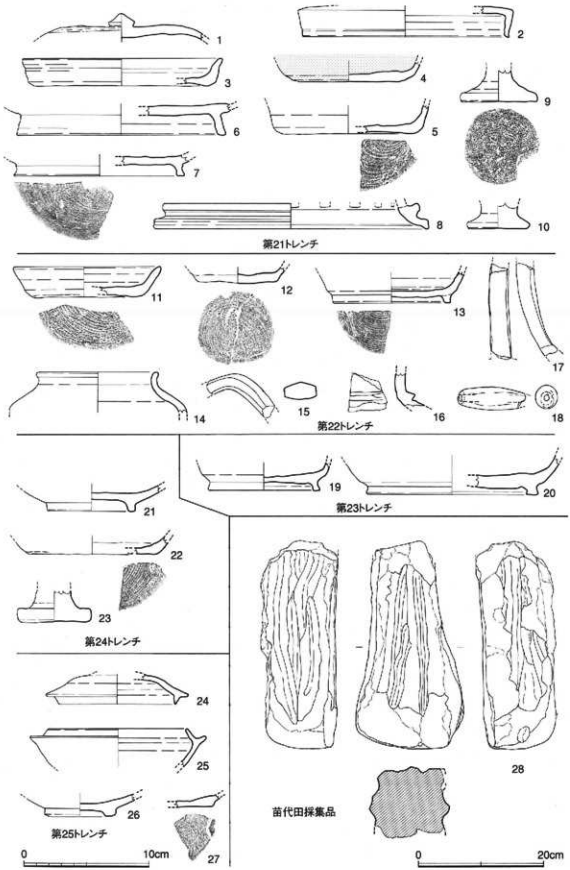
出土遺物としては、須恵器坏・土師質土器柱状高台付皿がある。第22図21・22は須恵器坏で、21は高台があるもの、22は無高台で底部に回転糸切り痕がある。23は土師質土器柱状高台付皿で、底部切り離しは風化のため不明である。

第25トレンチ　犬間出地区で、南北方向に２×５mで設けたトレンチである。耕作土下0.6～0.8mのところで暗灰色砂質土層に達する。その上では比較的大きい石がまとまって検出されているが、調査範囲の中では遺構と断定することはできない。

出土遺物には、黒曜石剥片、須恵器蓋坏、白磁、土師質土器などがある。第22図24は須恵器坏蓋で、口縁にかえりが付く。25は須恵器坏身で口縁にかえりが付く。焼き歪みが見られる。26は白磁椀Ⅱ類である。内面は施釉されているが、外面には釉が及んでおらず、化粧土が見られる。27は土師質土器坏の底部で回転糸切り痕がある。



第21図　第21～第25トレンチ遺構実測図



第22図　第21～第25トレンチ出土遺物実測図

第4章　本調査

第1節　調査の概要

本調査は、範囲確認調査の結果、古代の大形ピットや南北方向に延びる溝が確認された第8・9・10トレンチがある史跡公園北側で実施した。調査区は3つの畦畔で区切られているため、便宜的に西から1区・2区・3区・4区と呼称することし、遺構の実測や遺物の取り上げにあたっては範囲確認調査の際に設定した区割りを使用した。

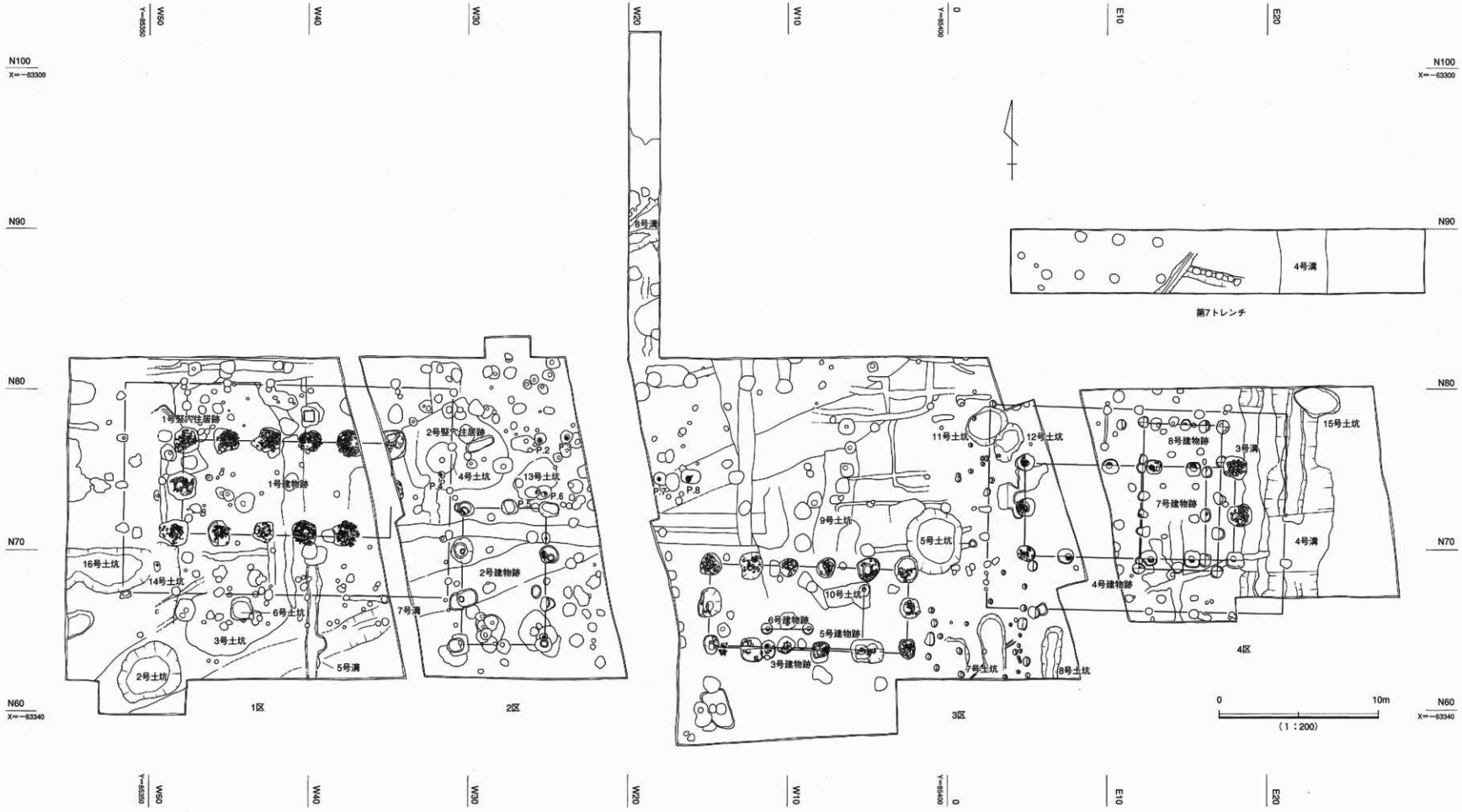
検出された遺構は、古墳時代中期、奈良時代～平安時代前期、平安時代後期に大きく分けられる。

古墳時代中期の遺構は、奈良・平安時代の遺構と重複するため充分な調査が行えなかったが、竪穴住居跡2棟、溝2条、土坑4基などが確認されており、集落の一部にあたっているものと考えられる。6・7号溝は南西から北東方向に延びるもので、6号溝が中期前半、7号溝が中期後半のものである。竪穴住居跡は時期は明確ではないが、平面形が方形を呈しており、辺の方向を6・7号溝と同様に南西から北東方向に揃えて配置している。土坑はいずれも中期前半のもので、このうち大形の2・3号土坑は長軸をやはり南西から北東方向に置いている。土坑の出土遺物には、土師器甕・高坏の他に軟質土器甕・甑、円筒形土器、陶質土器系統の高坏・器台・椀・盤が含まれているのが特徴で、軟質土器炊飯具を伴う点から見ると、集落内には渡来系住民がいたことも想定できる。

奈良時代～平安時代前期の遺構は、前半と後半に大きく2つに分けることができる。前半は南北に主軸をもつ掘立柱建物跡の段階で、2・7・8号建物跡、3・4号溝、5号土坑などがある。掘立柱建物跡のうち、7・8号建物跡は重複しており、これらと2号建物跡の関係をみても主軸以外には規格的な配置は認められない。溝は7・8号建物跡の東側で2条が確認されており、3号溝が先行し4号溝に代わるものと見られる。また、5号土坑は大形の土坑で、底面に円礫が敷き詰められており、その上で鹿頭骨・刀形代・曲物・かご・斎串・須恵器などがまとまって出土したことから、祭祀遺構と考えられる。

後半は東西に主軸をもった大形建物の段階で、1・3・4号建物跡、4号溝、7・8・15・16号土坑などがある。建物跡のうち、1号と4号建物跡は辺を揃えて東西に並び立つ位置にある。当初は掘立柱建物として建設され、後に礎石建物として同じ場所に建て替えられており、4号建物跡では礎石根石の下にクリ材の太い柱根がそのまま残されていた。また、1・4号建物跡は、建て替えに際して四面廂付き建物とされたようで、4号建物跡の廂は4号溝の埋土を掘り込んで造られている。3号建物跡は北辺が1・4号建物跡の南辺と揃う位置に配置されており、切り合い関係から5号土坑の後に造られたものであることが明らかである。7・8・15・16土坑は1・4号建物跡の周囲に位置するもので、多量の土師質土器の他、須恵器、緑釉陶器が出土しており、両建物が廃棄された際に営まれたものと見られる。

平安時代後期の遺構は、1号井戸跡、8号溝がある。1号井戸跡は正方形の井戸枠が残っており、内部より土師質土器、白磁の他、下駄が出土している。8号溝はトレンチで部分的にしか確認していないが、東西方向に延びる浅い溝である。この段階の遺構は、明確なものは少ないが、井戸や溝が存在することから何らかの施設群があったことも想定され、今回の調査では明確にできなかったが、比較的径が小さいピット、柱根のいくつかが当該期の建物跡になる可能性がある。



第23図　出雲国府跡本調査区遺構実測図

第２節　古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の遺構は、１区で１号竪穴住居跡・６号溝・２号土坑・３号土坑、２区で２号竪穴住居跡、３区で11号土坑・12号土坑、１～３区にわたって７号溝が確認されている。調査区のほぼ全域で遺構が検出されている点や、北側の第２トレンチなど少し離れた地点にも見られることから、古墳時代中期の集落が周囲に広がっているものと考えられる。

調査にあたっては、奈良・平安時代の遺構と重複があるため、トレンチ調査を主体とし遺構の規模や時期を把握する程度に留めたが、３基の土坑（２・11・12号土坑）については、内部を完掘することとした。

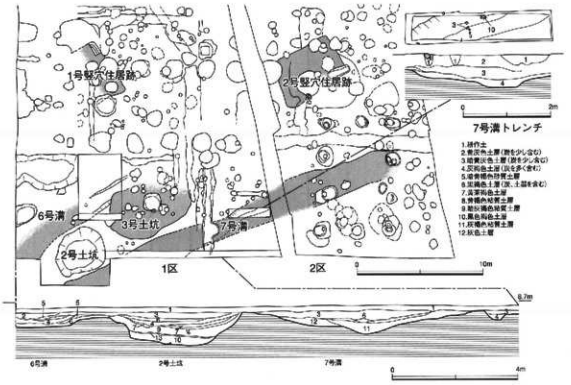
（１）１号竪穴住居跡

１区の北西側に位置する竪穴住居跡である。同時期の遺構との関係は２号竪穴住居跡が東に12m、６号溝・３号土坑が南東に７mの地点にある。

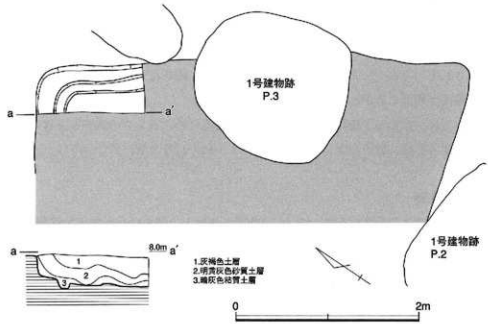
平面形は方形をなすものと思われ、確認された北東辺は長さ4.7mである。住居の壁は北西から南東方向を向いており、６・７号溝と方向を揃えて営まれている。北側隅に設けたトレンチでは、深さ20cmほどが残存しており、床面には壁に沿って幅14～18cm・深さ６cmの溝が回っていることが確認されている。埋土は上層より灰褐色土層・明黄灰色砂質土層・暗灰色粘質土層の３層である。

（２）２号竪穴住居跡

２区の北西側に位置する竪穴住居跡である。平面形は方形をなすものと見られ、一辺４～4.5mである。住居の北辺は北東から南西方向を向いており、１号竪穴住居跡と同様に６・７号溝と方向を揃えたものと思われる。内部の調査は行っていない。



第24図　調査区西半部の古墳時代遺構実測図



第25図　1号竪穴住居跡遺構実測図

（3）6号溝

遺　構　1区の南西側のトレンチで確認された溝である。同時期の遺構との関係は3号土坑とは切り合っており、2号土坑とは南側でほぼ接し、7号溝は南側4mでほぼ平行に並ぶ位置にある。

6号溝は南西から北東方向に延びており、隣接する7号溝が北東方向に続くことからすると、同様にさらに延びる可能性も考えられる。規模は、幅1.4m・深さは現状で0.3～0.4mである。

3号土坑との切り合い関係を見ると（第27図）、6号溝の埋土である灰褐色粘質土層・黄灰色砂質土層・暗灰褐色粘質土層を、3号土坑の埋土が切っていることから、6号溝→3号土坑の順に営まれていることが明らかである。

出土遺物　土師器甕がある。第26図11は器壁が厚く、外面に鈍い稜をもつ複合口縁を有している。12は「く」の字形に屈曲した口縁をもつもので、口縁端部がやや肥厚している。調整は前者の胴部内面にヘラケズリ、後者の胴部外面にハケメが僅かに残っている。

（4）7号溝

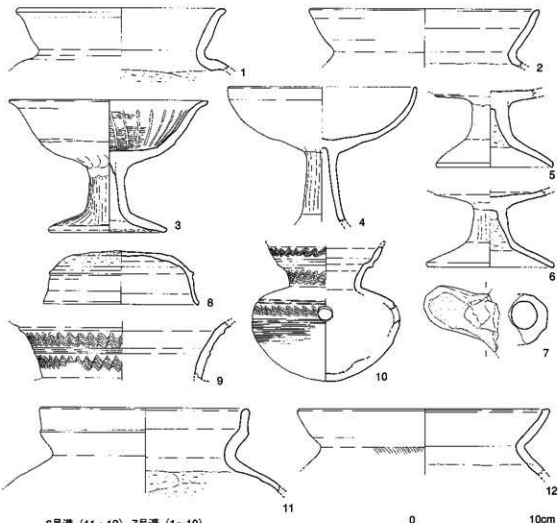
遺　構　1区の南西部から3区北東部へ直線的に延びる溝である。周囲の遺構との関係は、1区の2・3号土坑が北側に主軸を揃えて接しており、3区の11・12号土坑は南東2mのところにある。

7号溝は現在確認されている長さが54m・幅1.8～2.8mで、深さは1区に設定したトレンチによれば0.5～0.7mほどが残っている。

埋土は1区東側のトレンチでは、上層から暗黄灰色土層（炭を少し含む）・灰褐色土層（炭を多く含む）の2層、1区調査区南壁沿いのトレンチでは上層から暗黄灰色土層（炭を少し含む）・黒褐色土層（炭・土器を含む）・灰褐色粘質土層の3層である。

出土遺物　土師器甕・高坏・甑、須恵器蓋坏・壺・甕がある。

第26図1・2は土師器甕で、ともに「く」の字形に屈曲した口縁をもつものである。1は口縁端



第26図　6号溝・7号溝出土遺物実測図

部が外反しているのに対し、2は口縁が内湾している点に違いがある。3～6は土師器高坏である。このうち、3は坏部外面に弱い段がつくもの、4は坏部が椀状に丸みを帯びたものである。3の坏部内面にはハケメ調整ののち、放射状に暗文が施されている。5・6は脚部の破片であるが、坏部外面に僅かに段が認められる。調整は3・4・6の脚部外面にヘラミガキ、5・6の脚部内面にはヘラケズリが施されており、3の坏脚接合部と脚端部内面には指押さえの痕跡が残っている。7は土師器甑の把手で、棒状の突起を巻き込むようにして成形されていることが分かる。調整は裏面にハケメが認められる。

8は須恵器坏蓋である。口縁端部が外反するが、頂部との境には明瞭な稜をもっている。頂部外面には丁寧な回転ヘラケズリ調整が認められる。9は須恵器壺または甕の頸部と見られるものである。外面には1条の沈線と上端に段が残っており、波状文が2段にわたって施されている。10は須恵器甕である。口縁端部を欠くがほぼ完形品で、頸部は短く、円孔の穿たれた胴部は肩がよく張っており、丸底を有している。文様は口縁と頸部にそれぞれ波状文、肩部に2条の沈線とその間に波状文が入っている。調整は胴部下半にカキメ、底部は指押さえののちナデられている。

（5）2号土坑

遺　構　1区南西部に位置する土坑である。周囲の遺構との関係は、6・7号溝がそれぞれ南北に近接しており、3号土坑は北東1mの位置にある。

平面形は不整な隅丸方形または楕円形を呈しており、主軸を北東から南西方向に置いている。規模は長さ4m・幅3m前後で、深さは約1mである。埋土は下半に黒色～灰色系粘質土（暗灰褐色粘質土層・黒色有機質土層・黒色粘質土層）が堆積しており、その上に炭・土器片を含む黒褐色土層・灰褐色土層・黄茶褐色砂層・黄褐色粘質土層が見られる。埋土中に含まれる遺物は上層は小片が多いが、下層の粘質土中では破片が大きなものが検出されている。

出土遺物　土師器甕・小形丸底壺・高坏・土錘、軟質土器甕・甑、円筒形土製品がある。

第28図1～5は土師器甕で、1～3のように口縁外面に鈍い稜や屈曲をもち複合口縁の名残りを留めるものと、4・5のように「く」の字形に屈曲した口縁をもつものがある。調整は胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリで、口縁内外面にハケメを残すものも認められる。6は小形丸底壺で外面にハケメ、胴部内面はヘラケズリである。7は脚がつく小さい胴部をもつものである。

8～第29図27は土師器高坏である。8～10のように坏部外面に明瞭な稜をもつものと、11～19のようにもたないものがあり、後者の中でも11・17・18のように全体に丸みを帯びるものと、12～16のように口縁が外反するものもある。坏部には、8・11・12・13・16のように放射状の暗文をもつもの、9・14のように内外面に斜格子状に暗文をもつものがあり、18は内外面に赤色顔料が塗布されている。脚部は21に4方向の円形透孔と坏部に向けて穿孔が見られる。また、26は脚端部に指頭圧痕が残る他、放射状に皺が見られることから、下半を型作り成形したものと見られ、端部のヘラケズリはこうした成形手法に対応したものと考えられる。調整は坏部内外面にハケメ、脚部は外面にヘラミガキ、内面にヘラケズリとハケメが認められる。

28は土錘である。長さ10.7cm・径5.2cm・重さ306.6gとやや大形で、径0.7cmの円孔がある。

29～31は軟質土器である。29は甑で、小片ながら底面に円孔5つが残っており、平底多孔タイプのものと見られる。調整は外面上部に格子タタキ、下半にヘラケズリがある。30・31は長胴甕の体部と見られ、外面は格子タタキ、内面は無文当て具痕である可能性がある。

32は円筒形土製品である。上部は欠損しているが、底部にかけて大きく開く器形をもっており、底径45cmと推定される大形品である。調整は外面はハケメ、底部付近はヘラケズリで、内面には粗いナデが見られる。内面下半には煤が付着している。

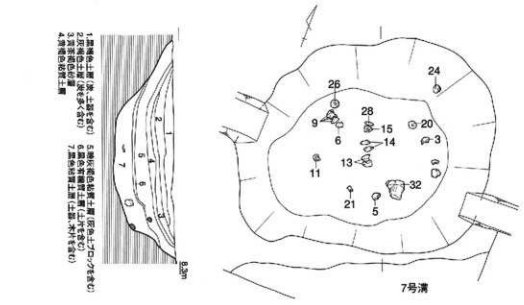
（6）3号土坑

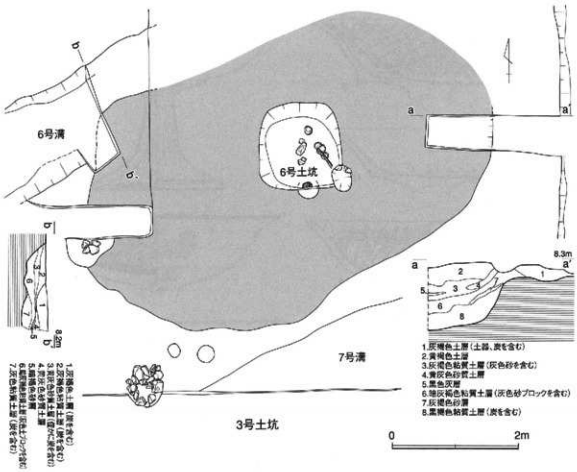
遺　構　1区中央南側に位置する土坑である。周囲の遺構との関係は、6号溝と切り合い関係があり、7号溝は南側にほぼ接する位置にある。2号土坑は南西1mの位置にある。

奈良時代の遺構と重複しているため土坑の内部は調査していないが、平面形は不整な楕円形を呈しており、主軸を北東から南西方向に置いている。規模は長さ7m・幅4m前後で、深さは東側のトレンチでは約1mである。堆土は大きく見ると上層から灰褐色土層・黄褐色土層・暗灰褐色粘質土層・黒褐色粘質土層の順に堆積している。

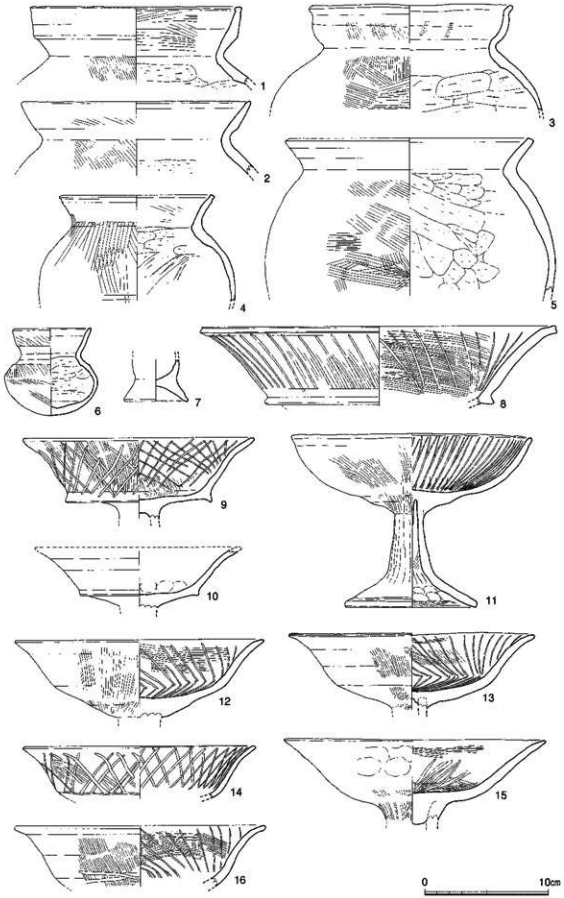
出土遺物　土師器甕・高坏、陶質土器系の高坏がある。

第29図33～35は土師器である。33は外面に鈍い稜をもつ複合口縁の甕で、端部は内側に肥厚して

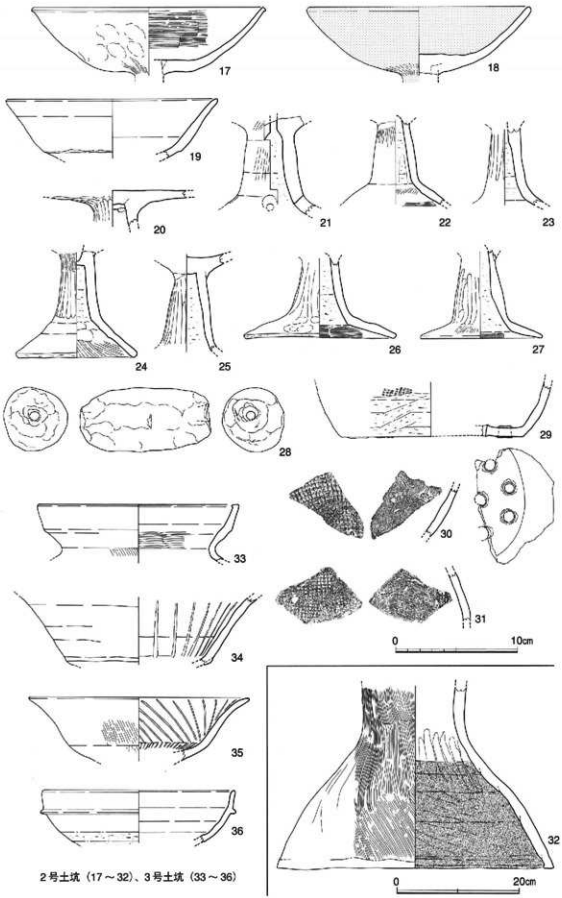




第27図　2号・3号土坑遺構実測図



第28図　2号土坑出土遺物実測図



2号土坑（17～32）、3号土坑（33～36）

第29図　2号・3号土坑出土遺物実測図

いる。調整は頸部内外面にハケメが見られる。34・35は高坏で、ともに外面に鈍い稜をもっている。内面はともに放射状の暗文が施されており、35の外面にはハケメ調整が見られる。

36は陶質土器系の高坏口縁部と見られるものである。外面には1条の細い突帯が付いており、外面には回転ヘラケズリが施されている。

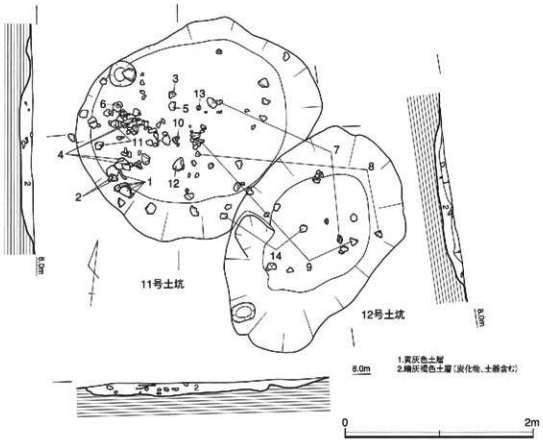
（7）11・12号土坑

遺　構　1区北東側に位置する土坑である。2つの土坑が重複して営まれているが、出土遺物に接合関係が見られ一連の遺構と考えられる。1区から延びる7号溝は、北西2mのところにある。

平面形はともに不整な円形または楕円形を呈しており、11号土坑は長径2.6m・短径2.2m、12号土坑は長径2.4m・短径1.5mで、深さは浅く10~12cm程度である。埋土は暗灰褐色土層である。

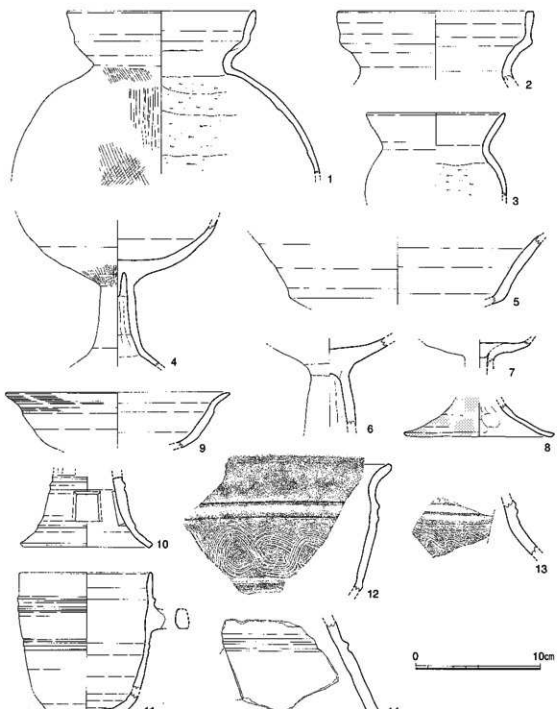
出土遺物　土師器甕・壺・高坏、陶質土器または初期須恵器の高坏・盤・器台がある。

第31図1～8は土師器である。1・3は甕、2は壺で、1・2は外面に鈍い稜のある複合口縁をもっているが、3は「く」字形に屈曲した単純な口縁をもつ。調整は1の胴部外面にハケメ、1・3の胴部内面にヘラケズリが見られる。4～8は高坏で、坏部は4のように丸みをもつものと、5のように外面に稜をもつものがある。4は坏部と脚部の接合部に棒状工具による刺突痕があり、7は坏部から脚部に向かって粘土充填痕が認められる。8の外面には暗赤褐色顔料が塗られている。調整は4の坏部外面にハケメ、6の内面にケズリ、8の内面には指押さえが見られる。



第30図　11号・12号土坑遺構実測図

9～14は陶質土器または初期須恵器である。9は緩く外反する高坏口縁部で、口縁外面は浅いカキメ、下半は浅いケズリである。10は高坏脚部で、外面に2条の稜線を巡らせ、その間に長方形3方透孔2段が交互に施されている。11は盌で、把手は欠損しているが、やや外傾しながら立ち上がる体部と平底をもつ。外面には上段に2条、下段に1条の突線が付いている。12～14は器台である。12は口縁部で、外面に突線と6条1単位の櫛描きで組紋文が施されている。13・14は脚部で、13は2条突線の下に波状文が施されるが、14は突線1条の他は無文で、両者とも三角形透孔を有する。



第31図　11号・12号土坑出土遺物実測図

第３節　奈良・平安時代の遺構・遺物

奈良・平安時代の遺構は、１～２区にかけて１号建物跡、３～４区にかけて４号建物跡、１区で５号溝、６・14・16号土坑、１号井戸、２区で２号建物跡、４・13号土坑、３区で３・５・６号建物跡、５・７・８・９・10号土坑、４区で７・８号建物跡、３・４号溝、15号土坑が確認されている。また、本調査区北側への遺構の広がりを検討するために３区の北側を拡張して設けたトレンチ内では８号溝が検出された。

発掘調査にあたっては、保存を前提としているため遺構の平面確認または半裁に留めたものもあるが、遺構の時期・性格などを検討する上で必要と考えられたものについては完掘している。

（１）１号建物跡

遺　構　１区から２区の北西側にかけて検出された建物跡である。同時期の遺構との関係は、東西方向の軸をほぼ揃えている４号建物跡が東40m、３号建物跡が東20m、第20トレンチで確認されている石敷護岸施設は西13mの位置にある。

建物は南北２間・東西５間の身舎四周に廂が付くもので、南北軸は座標方位北より１度ほど東を指している。規模は身舎が南北5.6m・東西13.2m・面積は73.9㎡で、廂部分を含めると南北13.2m・東西20.4m・面積269㎡となる。身舎の柱間は梁行が2.8m・桁行は2.6m、身舎と廂の柱間はやや長く3.6mである。

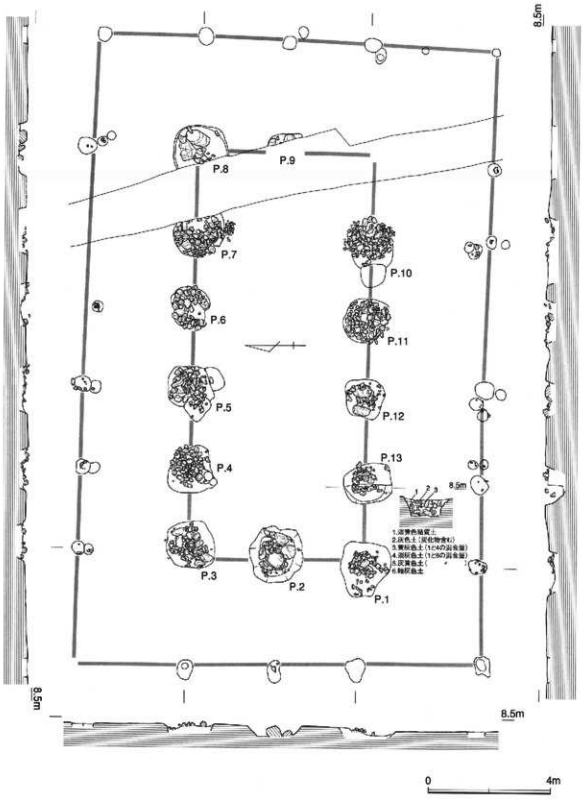
身舎の柱は南東隅の１つを除いてP.1～P.13が検出されている。柱にはそれぞれ礎石根石が残っていたが、礎石はほとんど抜き取られており、僅かに北東隅のP.8で円形の柱座を設けた礎石が、原位置から動かされ一部割られた状態で確認されている。根石の下には、隅丸方形または不整な楕円形で、長さ1.4～1.8mと大きめの掘り方がある。P.13で断ち割り調査を行ったところ0.6mほどの深さで、底面まで人頭大の石が入っていることが確認された。これは後述する３号建物跡の掘立柱抜き取り痕や、４号建物跡の掘立柱根巻き石の検出状況と類似しており、１号建物跡は本来掘立柱建物であったが、後に柱が抜き取られ礎石建物として同じ場所に建て替えられたことを窺わせる。廂の柱穴は、一部うまく確認できなかったところがあるが、径0.5mほどの円形または楕円形で掘立柱であったものと思われる。

遺物出土状況　遺物は柱穴で検出されたもの（第33図１～10）と、P.7の南側にまとめて置かれていたもの（11～17）がある。前者はP.2より出土したものが８、P.3が１、P.6が６、P.7が５、P.10が２・７、P.11が９・10、P.12が３・４である。後者はP.7の南側に接する位置にあった小さな礫敷の上で検出されたものである。（写真図版19-３）礫敷の北側がP.7の根石により切られている点からすると、掘立柱建物の段階にまとめて置かれていたものである可能性が高く、１号建物跡の創建期を示すものと考えられる。

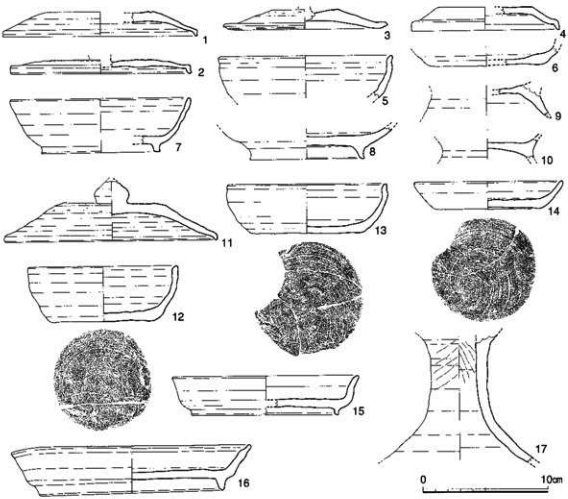
出土遺物　須恵器蓋坏・皿・高坏、土師質土器坏がある。

第33図１～４・11は坏蓋である。１・２・４・11は口縁端部が僅かに屈曲するもの、３は端部がやや反り上がるもので、頂部の高さは２のように低いもの、11のように高いものがある。つまみは11のみ遺存しており、宝珠つまみである。調整は１を除き頂部に回転ヘラケズリが見られる。

５・６・12・13は無高台の坏身である。５・12・13は丸みを帯びた体部と、口縁端部が僅かに屈曲する特徴をもっており、底部の残るものはいずれも回転糸切りである。７・８は高台付の坏身である。やや丸みのある体部を有しており、８は高台内に回転糸切り痕を残す。



第32図　1号建物跡遺構実測図



第33図　1号建物跡出土遺物実測図

14～16は皿で、14は無高台、15・16は高台が付くものである。14は外傾する口縁をもつが、15・16はやや外反しており、16の内面には僅かに段が付く。底部はいずれも回転糸切りである。17は高坏脚部と見られ、内外面にしぼり目を残す。

9・10は土師質土器坏で、底部に足高高台が付いている。

（2）2号建物跡

遺　構　2区の中央やや南寄りで確認された建物跡である。同時期の遺構との関係は、5号土坑が東23m、7・8号建物跡が東37m、4号溝が東45m、第20トレンチで確認されている石敷護岸施設は西31mの位置にある。

南北3間・東西2間の掘立柱建物で、南北軸は座標方位の北を指している。規模は南北8.6m・東西5.4m・面積は46.4m²で、柱間は2.6mである。柱穴はP.1～P.10までの計10個すべてが検出されている。柱穴は不整な円形または楕円形を呈し、径0.8～1.4m前後、深さは0.4～0.6mと比較的浅い。P.8・P.9・P.10には柱の基部を固定するために入れられた根巻き石が残っている。埋土はP.1・P.2、P.4～P.7の柱穴中央に炭・焼土を多く含んだ黒灰褐色粘質土が入っており、柱の抜き取り痕と思われる。

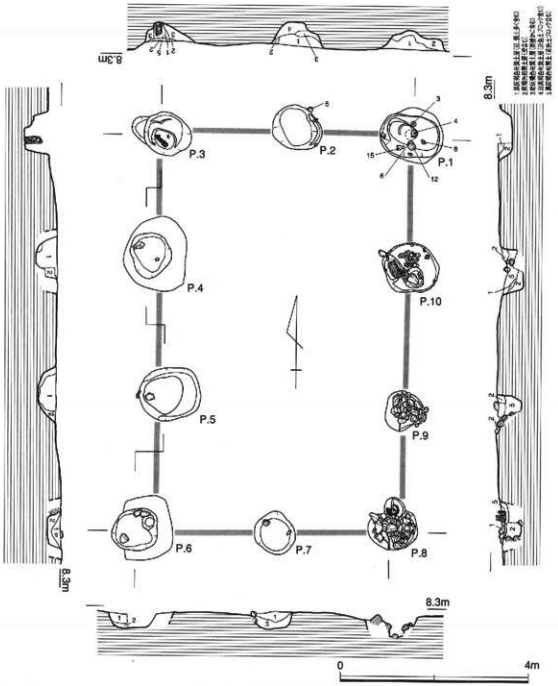
なお、P.3とP.10（第47図4）では北西方向を向く長方形状に加工された柱根が検出されている

が、主軸が2号建物跡とは異なるので、これに伴うものとは考えがたい。2号建物跡の北西側では、やはり北西方向を向く長方形柱根が2区P.4（第46図・第48図5）が確認されており、性格は不明であるが、一連の遺構であることが想定できる。柱材はP.10・2区P.4ともヒノキ属であった。

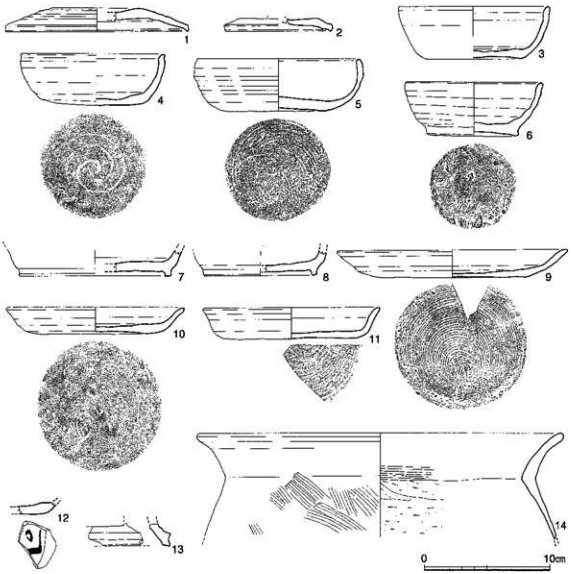
遺物出土状況　遺物はすべて柱穴で検出されたもので、P.1より出土したものが第35図1～6・7・9～11・13・14、P.5が12、P.10が8である。建物の北東隅にあたるP.1より須恵器が比較的まとまって出土している点が注意される。

出土遺物　須恵器蓋坏・皿・硯、土師器甕がある。

第35図1・2は須恵器蓋である。ともに口縁端部が僅かに屈曲するもので、2は復原口径が8.4



第34図　2号建物跡遺構実測図



第35図　2号建物跡出土遺物実測図

cmと小さいことから坏以外の器種の蓋とも考えられる。つまみは欠損しているが、1の頂部には回転ヘラケズリが見られる。

3～6は無高台の坏身である。いずれも丸みのある体部をもつが、4は口縁端部が僅かに屈曲している。底部の切り離しは3・5・6が回転糸切り、4がヘラ切りである。7・8は高台付きの坏身底部で、7は回転糸切りが残る。

9～11は皿である。9・10は口縁が大きく外傾し浅いのに対し、11はやや口縁の外傾度が弱い。底部の切り離しは、いずれも回転糸切りである。12は坏または皿の小片で、外面底部に「寸」分の墨書がある。「司」のようにも読めるが、断定することはできなかった。底部の切り離しは回転糸切りである。

13は硯脚部と考えられる小片である。外面には稜をもっており、その上に透孔の一部が僅かに残っている。透孔の周囲は面取りされている。

14は土師器甕である。「く」の字形に屈曲した単純な口縁部をもつもので、外面肩部と口縁内面にハケメ、胴部内面はヘラケズリである。

（3）3・5・6号建物跡

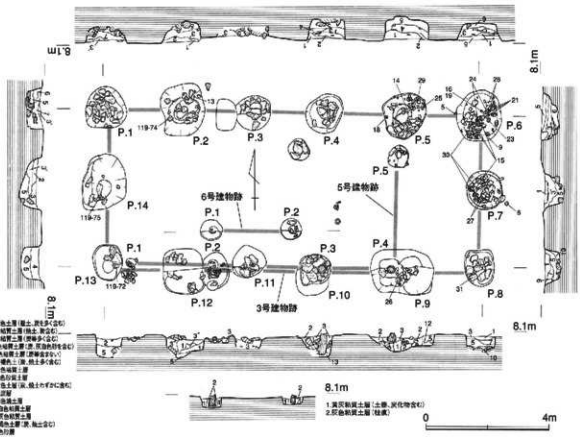
3号建物跡　3区の南西部で確認された建物跡である。同時期の遺構との関係は、1号建物跡が西20m、4号建物跡が東7m、4号溝が東24m、第20トレンチで確認されている石敷護岸施設は西46mの位置にある。また、3号建物跡のP.6は5号土坑の埋土を切っており、5号土坑→3号建物跡の順に営まれていることが明らかである。

南北2間・東西5間の掘立柱建物で、南北軸は座標方位の北より1度東を指している。規模は南北5.2m・東西12.0m・面積は62.4㎡で、柱間は2.4mである。柱穴はP.1～P.14までの計14個すべてが検出されている。柱穴は不整な円形または楕円形を呈しており、径1.0～1.8m前後、深さは0.5～0.8mである。柱穴には柱の基部を固定するために入れられた根巻き石が残っているものが多く、柱の抜き取り痕と見られる礫土・炭を多く含んだ灰色系粘質土が埋土となっている。また、P.4では礎板状の板石とその上に端部が斜めに加工された木材（第48図8）が柱穴底面で検出されたほか、P.3・P.11では柱穴埋土の上面に礎石根石が残されていた。こうした点から、3号建物跡は本来、掘立柱建物であったが、柱を抜き取って礎石建物に建て替えられたものと考えられる。

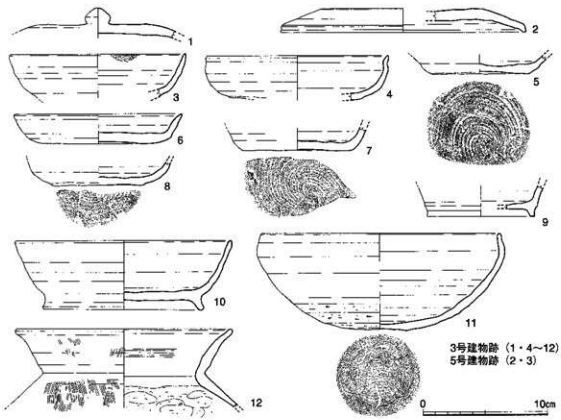
なお、掘立柱の根巻き石などとして、P.11・P.13・P.14では玉生産用の筋砥石が使われていた。

5・6号建物跡　3号建物跡に重複して確認されたもので、いずれも掘立柱柱根が遺存していた。

5号建物跡は南北1間・東西3間分が確認されている。南北軸は座標方位の北より1度東を指しており、規模は南北3.6m・東西8.4mである。P.2・P.3・P.4は3号建物跡P.12・P.10・P.9と切り合



第36図　3号・5号・6号建物跡遺構実測図



第37図　3号・5号建物跡出土遺物実測図

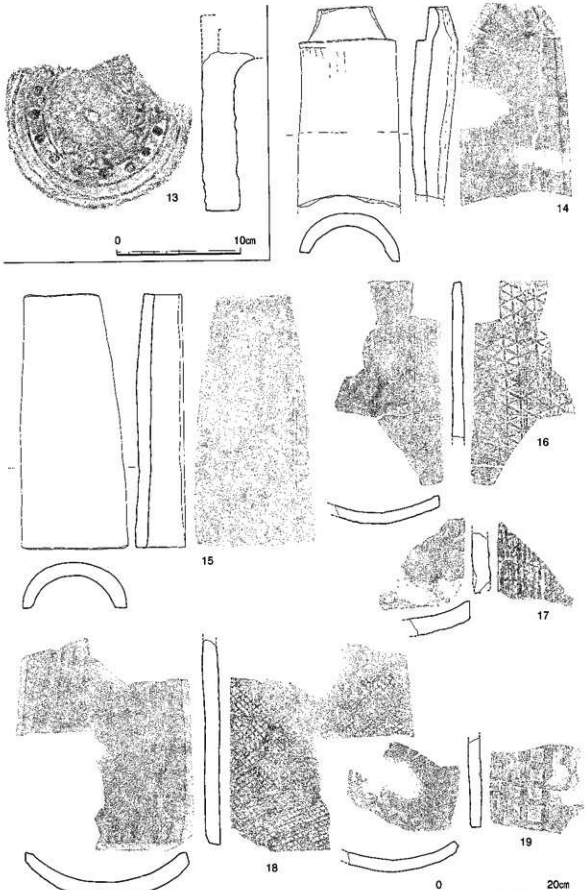
い関係にあり、3号建物跡→5号建物跡の順に営まれたことが明らかである。柱間はP.1・P.2間とP.3・P.4間が2.4mであるのに対し、P.2・P.3間とP.4・P.5間が3.6mで、東西方向では中央の間隔が広いことから、門であった可能性も想定される。柱穴は0.6～0.8mほどの楕円形で、深さはP.3が0.7mと深く柱根もよく残っていたが、その他は現状で0.2mと浅く、柱根基部が僅かに残っていた。P.2・P.3・P.5には掘立柱の根巻き石が見られ、P.3・P.4の柱材はともにカヤ属である。

6号建物跡は3号建物跡の内側で確認されており、切り合い関係がないことから、営まれた時期は不明である。柱穴はP.1・P.2の2つがあり、周囲に支柱があったとすれば、四脚門の可能性も考えられる。柱穴は0.7mほどの円形で、現状は深さ0.3～0.4mと浅く、P.1の柱材はスギである。

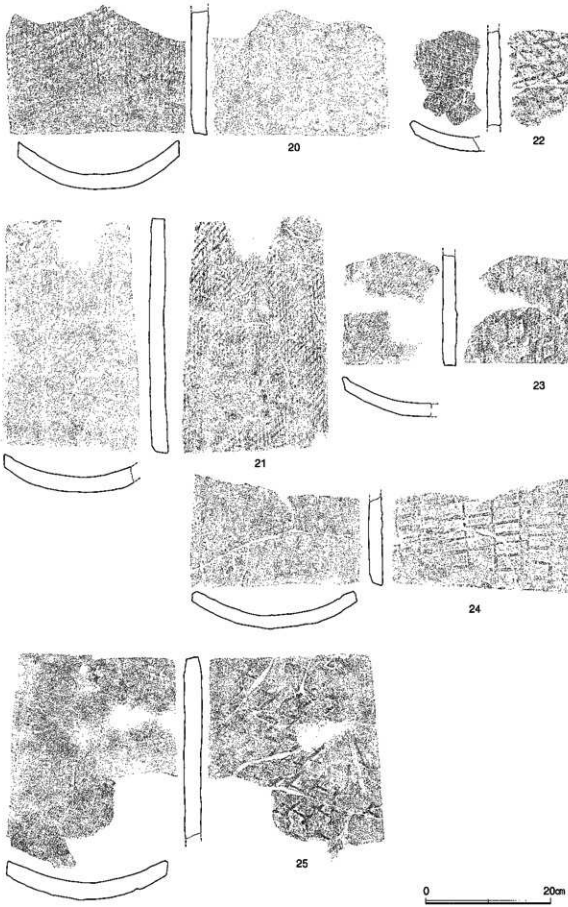
出土遺物　遺物はいずれも柱穴より検出されたもので、第37図2・3が5号建物跡、その他は3号建物跡で検出されたものである。遺物には須恵器蓋坏・皿・鉢、土師器甕、瓦がある。

1・2は須恵器蓋である。1は擬宝珠つまみをもち、2は口縁端部が僅かに屈曲している。3～7は無高台の坏または皿である。底部の切り離しが分かるものはすべて回転糸切りで、3の口縁には煤が付いており、灯明皿であったことが分かる。9・10は高台付きの坏身で、9は体部が直線的に立ち上がるのに対し、10はやや丸みを帯びている。10の底部は回転糸切りの後、粗い回転ナデである。11は鉄鉢形のもので、底部は回転糸切りの後、回転ヘラケズリである。12は土師器甕で、口縁と肩部外面にハケメ、肩部内面にヘラケズリが見られる。

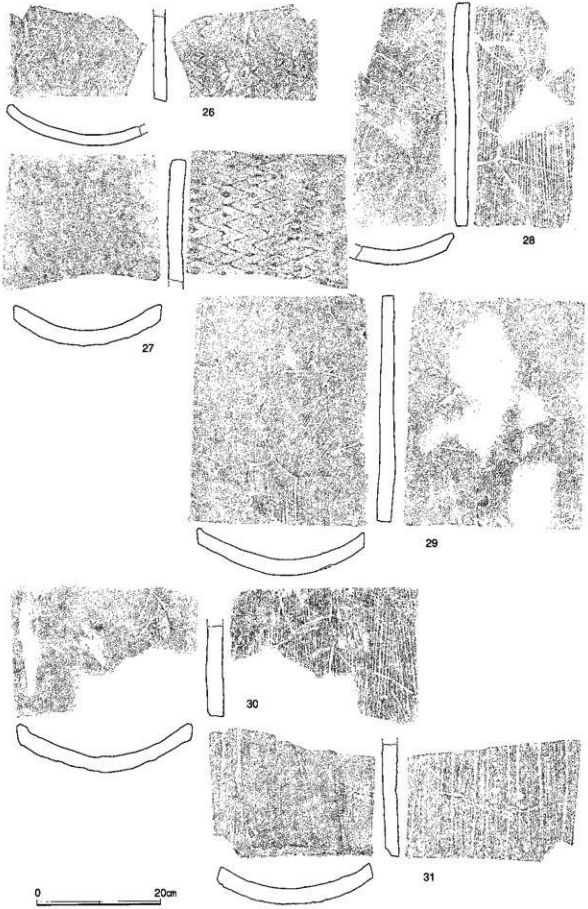
第38図13は軒丸瓦である。中央に花文、その外側に変形唐草文帯・珠文帯をめぐらしたもので、出雲国分寺の第3類[8]に属する。14・15は丸瓦で、前者は玉縁部をもつもの、後者は行基式である。全形が分かる15は長さ41.0cm・幅17.2cmあり、凸面に僅かに縄目タタキが残る。



第38図　3号建物跡出土瓦実測図（1）



第39図　3号建物跡出土瓦実測図（2）



第40図　3号建物跡出土瓦実測図（3）

第38図16～第40図31は平瓦である。長さは21が37.4cm・28が36.0cm、幅は最も狭い27が24.0cm、広い30が28.2cmで、26cm前後のものが多い。全形が分かる29は長さ36.2cm・幅27.0cmである。下面のタタキは格子タタキ（16～27）と縄目タタキ（28～31）がある。前者には格子・斜格子に多くの種類があり、出雲国分寺平瓦分類[4]のKA（20・21）・KB1（22・25・26）・KB2（27）・KC（18）・KD（19）・KG（17）・KH（16）、国分寺瓦窯である中竹矢遺跡平瓦分類のKA（24）、KD（23）が見られる。破片数では縄目タタキが格子タタキのものより多い。焼成は良好で須恵質のもの（17・18・20）がある一方で、その他は焼成が不良で土師質のものである。

（4）4号建物跡

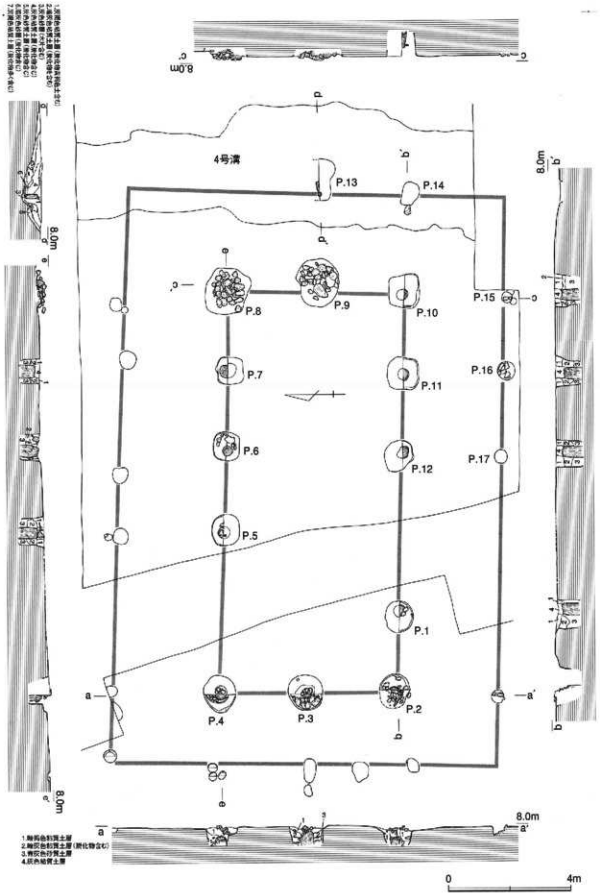
遺　構　3区東端から4区にかけて検出された建物跡である。同時期の遺構との関係は、東西方向の軸をほぼ揃えている1号建物跡が西40m、3号建物跡が西7m、第20トレンチで確認されている石敷護岸施設は西66m位置する。また、4号溝は身舎から西2mにあるが、廂の柱穴は4号溝埋土を掘り込んで設けられており、廂が付く段階には既に埋まっていたことが分かる。

建物は南北2間・東西5間の身舎四周に廂が付くもので、南北軸は座標方位北より1度ほど東を指している。規模は身舎が南北5.8m・東西13.0m・面積は75.4㎡で、廂部分を含めると南北12.4m・東西18.4m・面積228.2㎡となる。身舎の柱間は梁行が2.8m・桁行は2.5m、身舎と廂の柱間はやや長く3.2mである。

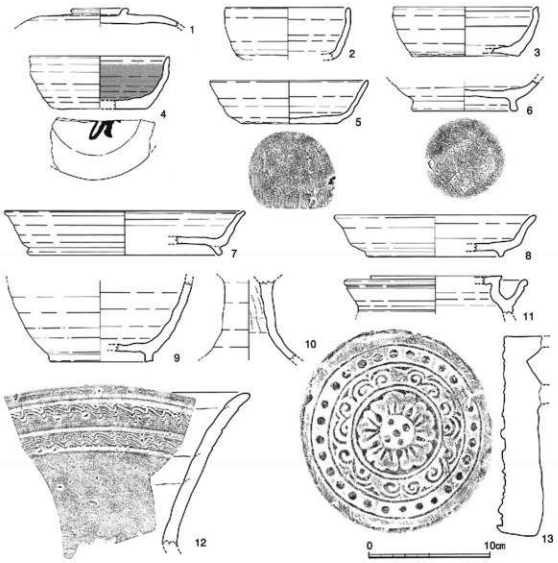
身舎の柱は、駐車があるため一部未確認であるが、P.1～P.12が検出されている。柱にはP.2・P.3・P.4・P.6・P.8・P.9に礎石根石が残っていたが、その他のものは根石すら抜き取られた状態であった。このうち、地山の標高がやや低い北東側のP.8・P.9はよく根石が残っており、人頭大の石が用いられている。根石の下には隅丸方形または楕円形を呈する柱穴があり、掘り方は長さ0.8～1.2m・深さは現状で0.6～1.0mである。柱穴の埋土は、中央で灰色粘質土化した柱の痕跡がよく観察され、断ち割り調査を行ったP.1～P.7・P.10～P.12ではいずれも柱根が残っていることが確認された。柱根は径40cm程もある太いもので、P.5・P.6・P.7・P.10の基部には材の運搬用に設けられた日通穴（えつり穴）があることも明らかになっている。柱材はP.3がサクラ属・P.6がクスノキであるが、その他の8本はクリが用いられている。柱の埋土は基本的には3層で、上層から暗褐色粘質土・暗灰色粘質土、最下層は青灰色砂質土で、西辺のP.2・P.3・P.4では柱と掘り方の間に根巻き石が詰められていた。

以上のことから、身舎は本来掘立柱建物として建てられ、後に同じ場所に礎石建物として建て替えられたものと見られる。また、建て替えにあたっては柱を抜き取らず、接地面で切断していたことが明らかとなった。1号建物跡・3号建物跡と比較して柱穴が小さく、隅丸方形または楕円形と整っているのは、柱を抜き取らず切断していることによるものと思われる。

廂の柱穴は、一部判然としない部分もあるが、南辺と東辺を中心に確認されている。このうち、P.13・P.14は4号溝埋土を掘り込んで設けられており、大きさは前者が長径1.3m、後者が長径0.8mである。これは南辺のP.15～P.17が径0.4～0.5mと比較的小さいのと対照的であるが、断ち割り調査を行ったP.13では径18cm程の柱の下に礎板（第48図7）が敷かれており、溝の埋土を意識した措置が取られたためと思われる。P.13の柱材（第48図6）はヒノキ属で、身舎の柱材が広葉樹で構成されていたのとは異なっている。



第41図　4号建物跡遺構実測図



第42図　4号建物跡出土遺物実測図

遺物出土状況　遺物はいずれも身舎柱穴で検出されており、P.1より出土したものが第42図10、P.2が2・3・7・8、P.6が9・13、P.7が12、P.8が6、P.10が5、P.11が4・11、P.12が1である。このうち、P.6で検出された13は軒丸瓦頭部のみがきれいに外されており、掘立柱の脇に立てた状態で入っていたことから、4号建物跡の創建時に意図的に埋められた可能性が考えられる。

出土遺物　須恵器蓋坏・皿・壺・高坏・円面硯・甕、軒丸瓦がある。

1は須恵器坏蓋である。頂部に輪状つまみが付き、周囲に回転ヘラケズリが入っている。2～5は無高台の坏身である。2～4は体部が内湾し口縁にやや屈曲が見られるものであるが、5は口縁が外傾しやや浅いもので、いずれも底部は回転糸切りである。このうち、4は内面と外面底部の一部に漆が付着しており、外面底部には釈読できないが墨書がある。6は高台の付く坏身で、高台内に静止糸切りが見られる。7・8は皿で、ともに外反する口縁部をもつが、7の口唇には段が付いている。底部は回転糸切りである。

9は壺の底部で、体部外面下半は回転ヘラケズリの後、回転ナデである。10は高坏の脚部で、内

面にしぼり目がある。11は円面硯で、平滑になった陸の一部と海が残っており、外面には沈線が2条入っている。12は大甕の口縁部で、外面上部には3条の沈線とその間に3条1単位の波状文が施されている。

13は軒丸瓦である。中房は陰刻とし蓮子は5個、花弁は5葉で、外区に唐草文と珠文帯がめぐっており、出雲国分寺第二類に属するものである。瓦頭と丸瓦の接合部は周縁に沿ってV字状の溝が鋭利な工具で付けられているが、丸瓦部は現状ではきれいに外されている。

（5）7号建物跡

遺　構　3区のやや西寄りで確認された建物跡である。8号建物跡とほぼ重複する位置にあり、P.4が8号建物跡のP.5、P.6が8号建物跡P.2と切り合い関係にあることから、7号建物跡→8号建物跡の順に営まれている。また、P.3は4号建物跡P.11に切られており、7号建物跡→4号建物跡の順であることも明らかである。

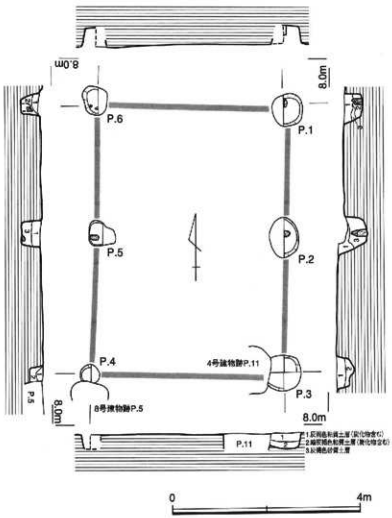
南北2間・東西1間の掘立柱建物で、南北軸はほぼ座標方位の北を指している。規模は南北5.8m・東西4.0m・面積は23.2m²で、柱間は桁行が2.8m、梁行は4.0mと広い。柱穴はP.1～P.6までの計6個すべてが検出されている。

柱穴は不整な円形または楕円形で、径0.4～0.8m前後、深さは0.4～0.6mと浅い。P.1・P.2・P.5・P.6には径20cm足らずと小さな柱根が僅かに残っていた。柱材はP.1・P.2はともにクリであることが判明している。

埋土は基本的には2層で、上層に炭化物を含む灰褐色粘質土、下層には炭化物を含む暗灰褐色粘質土または灰褐色砂質土が見られる。

出土遺物　P.1で須恵器高台付き坏身が検出されているのみである。

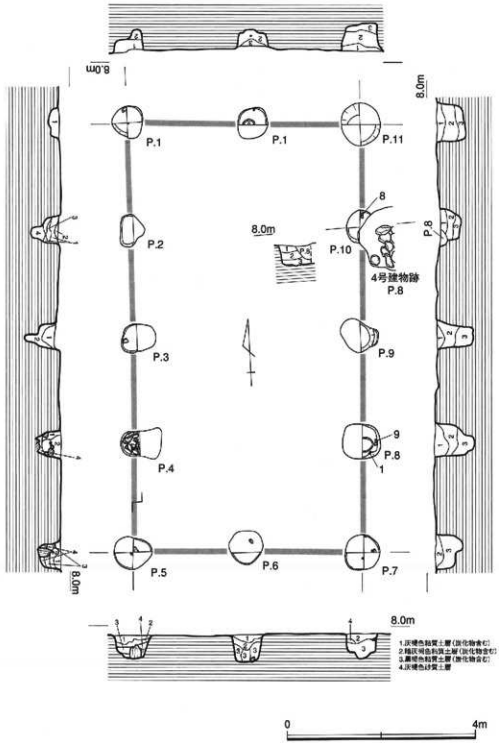
第45図7は坏身底部の破片で、直立する高台とやや丸みを帯びた体部が残っている。調整は外面が高台内を含め回転ナデ、内面底部はナデと回転ナデである。



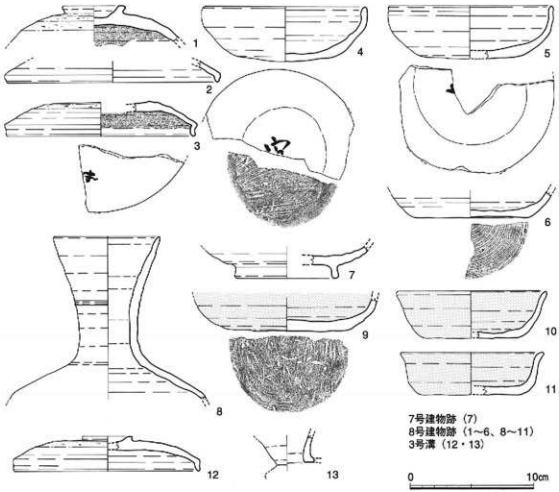
第43図　7号建物跡遺構実測図

（6）8号建物跡

遺　構　3区のやや西寄りで確認された建物跡である。同時期の遺構との関係は、2号建物跡が西37m、3号溝が東1.5m、4号土坑が西43m、14号土坑が西60m、第20トレンチで確認されている石敷護岸施設は西73mの位置にある。8号建物跡は4号建物跡・7号建物跡と重複している。P.2が7号建物跡P.6、P.5が7号建物跡P.4、P.10が4号建物跡P.8と切り合い関係にあり、7号建物跡→8号建物跡→4号建物跡の順に営まれたことが明らかである。



第44図　8号建物跡遺構実測図



第45図　7号・8号建物跡・3号溝出土遺物実測図

南北4間・東西2間の掘立柱建物で、南北軸は座標方位の北を指している。規模は南北9.2m・東西4.9m・面積は45.0㎡で、柱間は桁行2.2m・梁行がやや広く2.4mである。柱穴はP.1～P.12までの計12個すべてが検出されている。柱穴は不整な円形または楕円形を呈し、径0.5～0.8m前後、深さは0.4～0.6mと浅い。P.4には柱の基部を固定するための根巻き石が残っており、P.5では径20cmほどの柱根が僅かに残っていた。

出土遺物　須恵器蓋坏・長頸壺、土師器坏がある。遺物はすべて柱穴で検出されたもので、P.2より出土したものが第45図1、P.3が5、P.4が3、P.7が10、P.8が4・9・11、P.9が6、P.10が2・8である。

第45図1～3は須恵器蓋である。1は輪状つまみがつくもの、2・3は口縁端部が屈曲して直立するものである。1・3の内面には墨が付いていることから転用硯と見られ、3の外面には釈読できないが墨書がある。4～6は無高台の坏身である。底部の切り離しは、4が静止糸切り、5が回転糸切りの後ナデ、6は回転糸切りである。4・5の外面底部には墨書があり、前者は「官」と判読できる。8は長頸壺で、頸部に1条の沈線が入り、外面肩部と口縁内面に灰をかぶる。

9～11は土師器坏である。いずれも内外面に赤褐色顔料が塗られたもので、器形が分かる10・11は口縁がやや外反する。9は底径が大きくやや厚いが、底部はヘラ切りの可能性があり、周囲がナデ調整されている。

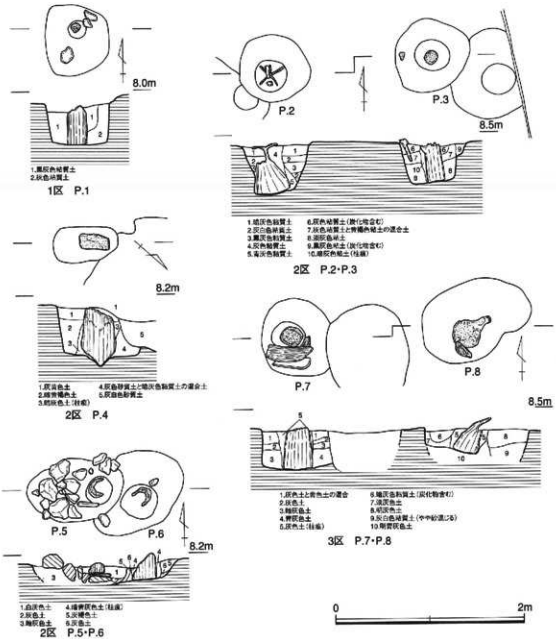
（7）柱根のある柱穴

掘立柱建物跡として復原することはできなかったが、柱根の残った柱穴が1～3区で確認された。

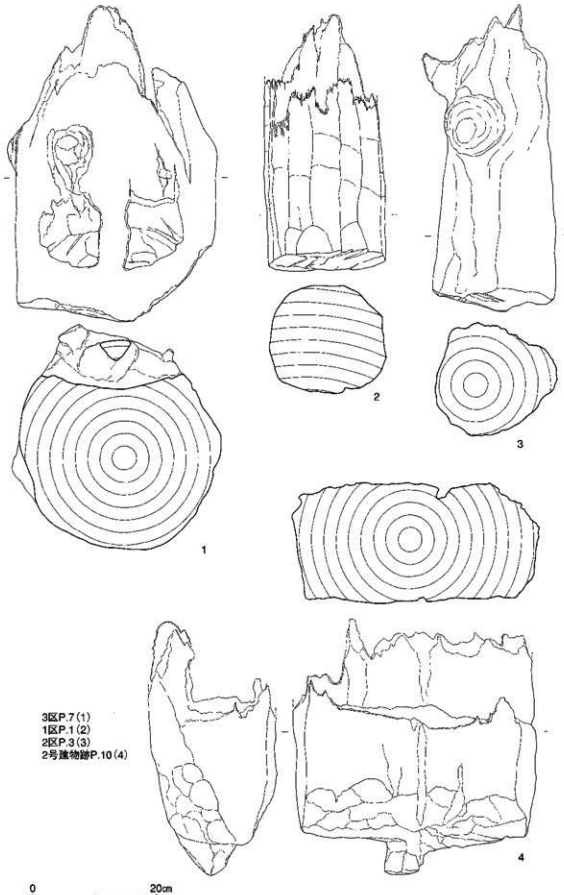
1区P.1　1号建物跡身舎の南西にあり、廂の内側で確認されたものである。長径0.75m・深さ0.5mの柱穴の中に径18cmの柱根（第47図2）があり、底部に切断痕、側面には5～6cm幅の加工痕が全面によく残っている。柱材はスギである。

2区P.2・P.3　2号建物跡の北東4mの地点に1.7mの間隔で東西に並ぶものである。柱穴は径0.7～0.8m・深さ0.4～0.5mで、柱根はP.2が径35cmと太く、P.3（第47図3）は径20cmと細い。柱材はP.2・P.3ともマツ属である。

2区P.4　2号建物跡の北西2.5mの地点にあるもので、北西から南東方向に主軸をとる。柱穴は長さ0.7m・幅0.4m・深さ0.5mで、柱根は（第48図5）は幅39cm・厚さ18cmの長方形である。柱根



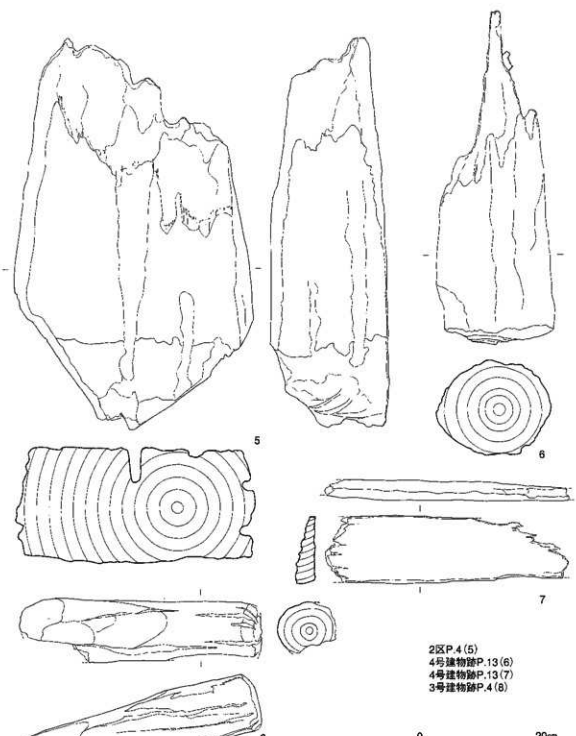
第46図　柱根のある柱穴実測図



第47図　柱根実測図

の下端は三角形状に加工されている。その主軸方向や形態から既に述べたように２号建物跡P.3・P.10で検出されている柱根（第47図４）と関わりがあるものと思われるが、その性格は不明である。柱材は２区P.4、２号建物跡P.10ともヒノキ属である。

２区P.5・P.6　２号建物跡の北東１mの地点にあるもので、P.6の後にP.5が掘り込まれている。柱穴は長径1.0m・短径0.6～0.8m・深さは現状で0.2mで、柱根の基部が僅かに残っている。P.5は



第48図　柱根・礎板他実測図

柱根の西側に根巻石があり、柱材はニレ属である。

3区P.7・P.8　3号建物跡の北西5mの地点に1.8mの間隔で東西に並ぶものである。柱穴は径0.8～1.2m・深さ0.4mである。柱根はP.7（第47図1）が径32cm、P.8は径25cmで、前者には基部に材の運搬用に設けられた目途穴が見られる。柱材はP.7・P.8ともマツ属である。なお、P.7の埋土上面には平瓦1枚が置かれていた。

（8）3号溝

遺　構　4区のほぼ中央にある南北溝で、4号溝の西0.6～1.0mを平行に延びている。同時期の遺構との関係は、2号建物跡が西43m、8号建物跡が西1.5m、4号土坑が西50m、14号土坑が西66m、第20トレンチで確認されている石敷護岸施設は西80mの位置にある。また、4号建物跡P.8～P.10とは切り合い関係があり、3号溝→4号建物跡の順に営まれている。

3号溝は現在検出されている長さが13mで、北側の第7トレンチでは未確認である。4号建物跡の柱穴と重複しているため、充分な調査はできなかったが、調査区の北壁と南壁沿いにトレンチを設けて掘り下げたところ、幅1.0～1.4m・深さは0.2mと浅かった。埋土は1層または2層で、灰褐色または暗灰褐色粘質土が堆積している。

出土遺物　須恵器坏蓋・平瓶が出土している。

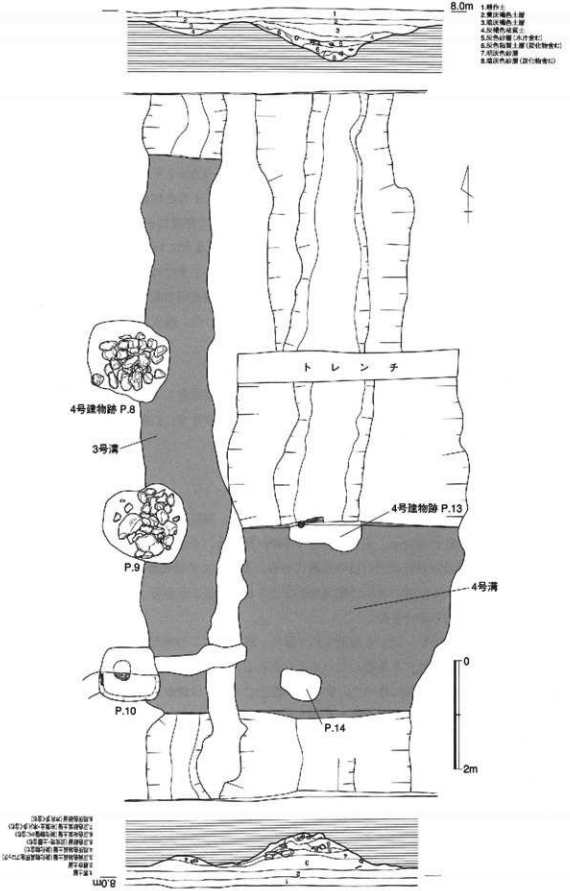
第45図12は坏蓋で、頂部に輪状つまみが付いており、口縁は屈曲して直立するものである。頂部外面には回転ヘラケズリが見られる。13は小形の平瓶頸部の破片で、口縁内面と肩部に灰をかぶっている。

（9）4号溝

遺　構　4区の東寄りにある南北方向に延びる溝である。同時期の遺構との関係は、1号建物跡が西55m、3号建物跡が西24m、4号建物跡の身舎が西2m、5号土坑が西19m、第20トレンチで確認されている石敷護岸施設は西81mの位置にある。また、4号建物跡の廂であるP.13・P.14とは切り合い関係があり、4号溝の埋土に柱穴が掘り込まれていることから、4号溝→4号建物跡廂柱穴の順であることが明らかである。

4号溝は北側の第7トレンチでも検出されており、現在のところ南北23mの範囲にわたって延びている。4号建物跡の廂柱穴と重複している部分があるため完掘はしていないが、その他の部分については掘り下げて内容把握に努めた。また、溝埋土については調査区南壁部分で花粉分析を行って、古環境を検討するための資料を得ることとした。

溝の方向は、ほぼ座標方位北を指している。幅は南側で3.6m・中央で4.0m・北側で2.6mで、深さは現状で0.7mである。溝底面の高さは南側で7.2m・北側で7.0mで徐々に南側が低くなっているものと思われる。溝の埋土は5～6層で、上層から順に灰褐色粘質土または暗灰色粘質土・暗灰色粘質土または灰褐色粘質土・灰色砂層・灰色粘質土層・灰色砂層または明灰色砂層、最下層は暗灰色砂層である。砂層と粘質土層が交互に見られることからすると、本来ある程度水が流れていたものと思われる。なお、中央のトレンチより北側部分に、遺構が掘り込まれている黄褐色粘質土が堆積する以前に生えていたと見られる自然木（写真図版32-2）が埋まっていることが確認された。樹種はアカガシ亜属である。



第49図　3号溝・4号溝遺構実測図

第50図　4号溝遺物出土状況実測図

溝埋土の花粉分析は付論5で詳述されているが、この中で注目される点はイネ科が高率で検出されている点である。水田雑草と見られるオモダカ属・サジオモダカ属なども確認されており、4号溝には水田から水が引かれていたか、4号溝に近接して水田が存在した可能性が考えられるという結果を得ることができた。

出土遺物の特徴と出土状況　4号溝の埋土からは須恵器蓋坏・皿・高坏・鉢・壺・平瓶・硯、土師器甕・甑、竈、焼塩壺、土製支脚、土錘など、多量の土器類が出土している。また、土器以外では木箱蓋・挽物・曲物・糸巻・木簡などの木製品、羽口・坩堝・椀形滓などの金属器生産関係遺物、筋砥石・水晶・碧玉などの玉生産関係遺物もある。(生産関係遺物については、他の地点より出土したものと併せ、第4章第4節でまとめて記載した。)

土器類には坏・皿・高坏といった供膳具、甕・甑・土製支脚・焼塩壺などの炊飯・調理に関わるもの、漆が付着した長頸壺・坏・鉢など漆器生産に関わると見られるものもある。木製品では木箱蓋・木簡のように文書行政に関わるもの、挽物・曲物などの容器、糸巻のような紡織具があり、未使用の樺皮(写真図版76)も検出されていることから曲物生産が行われていた可能性もある。こうした多様な出土遺物の内容を見ると、4号溝の周辺には行政や居住機能をもった施設の他に、木器・金属器・玉などの生産に関わる施設があったことも想定することができる。

遺物の出土位置は、木製品が下層を中心に検出されていること以外に大きな特徴はない。ただ、4号溝埋土の上面・上層では下層に比べ石が多く出土しており、溝を埋める際に意図的に投入されたことも考えられる。

上面・上層の出土遺物　須恵器蓋坏・皿・高坏・鉢・壺・甕・硯、土師器甕・甑、焼塩壺、土製支脚、土錘が出土している。

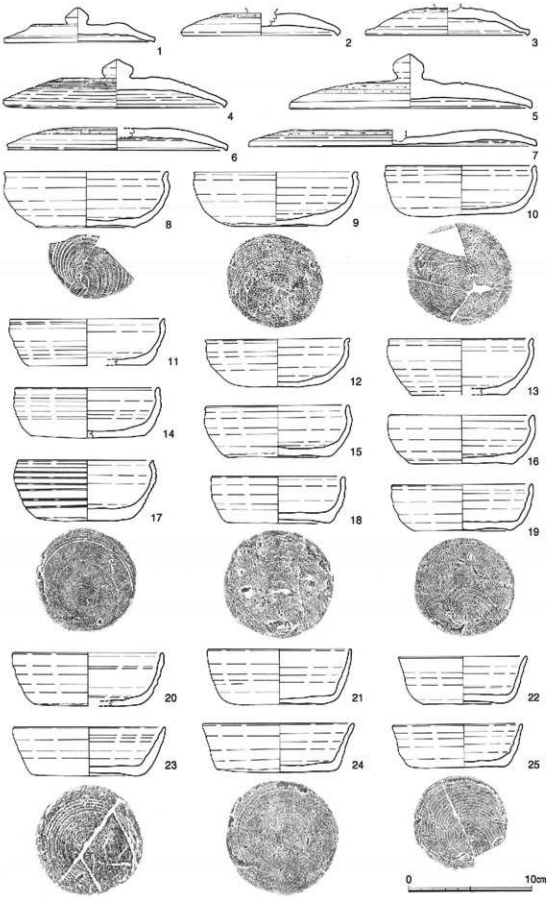
第51図1～7は須恵器坏蓋である。口径は12.3～13.0cmと小さい1～3と、17.7～23.2cmと大きい4～7がある。口縁部はいずれも僅かに屈曲するもので、1・4・5には宝珠つまみが残っている。調整は頂部に回転ヘラケズリが施されている。

8～第52図27は坏身で、無高台のものである。8～19は口縁部が僅かに屈曲し体部が丸みを帯びるもので、22～27は口縁部が直線的で、外傾するものである。このうち、17は外面に8条以上の沈線が入っている。底部の切り離しは、27がヘラ切りであるが、その他は回転糸切りである。また、27の内面には漆が僅かに付着している。

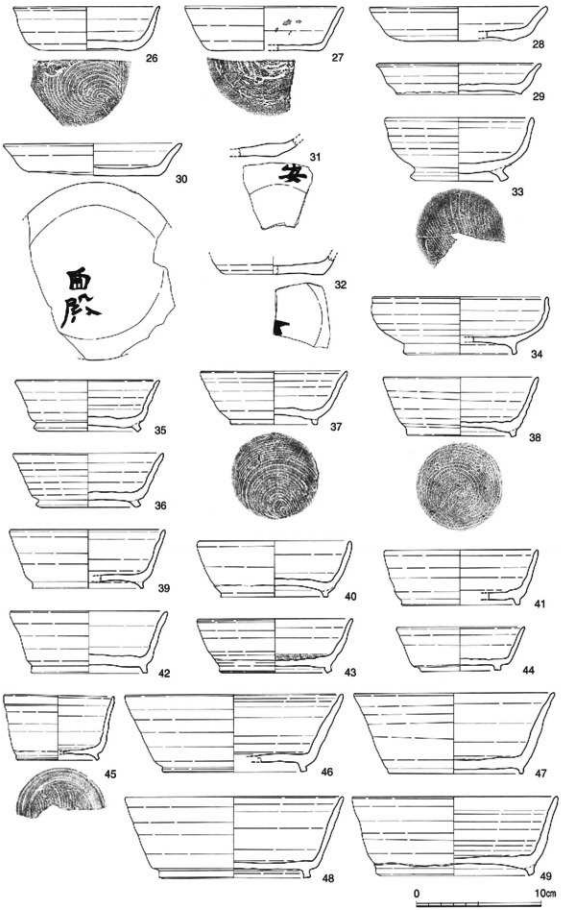
28～30は皿で、無高台のものである。口縁部はいずれも外反し、底部の切り離しは回転糸切りである。30の底面にはやや薄くなっているが墨書が残っており、「西殿」と釈読できる。

31・32は坏または皿の底部である。ともに底部は回転糸切りで、31は外面体部下方に「安」、32は外面底部に1字分の線書がある。

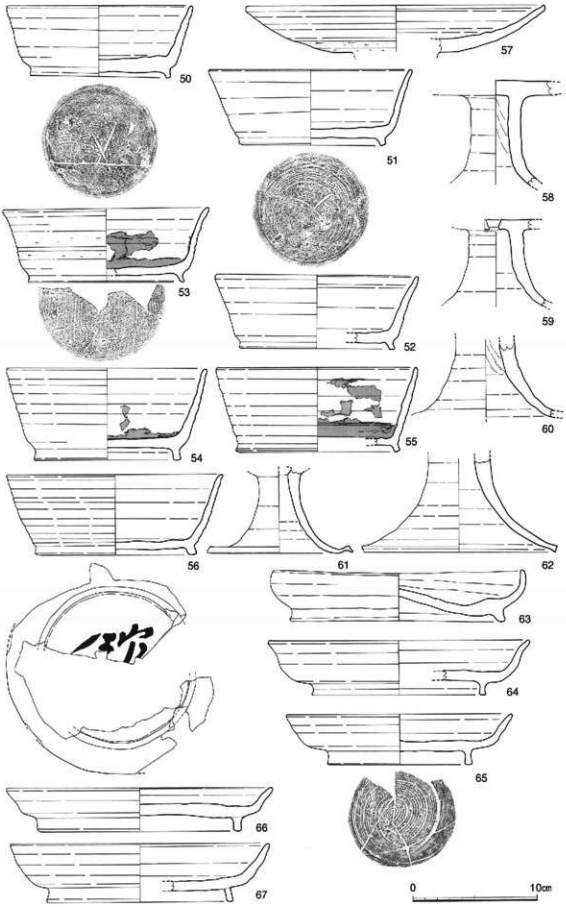
33～第53図56は坏身で、高台の付くものである。33～45は口径8.9～12.6cm、器高5.2cmまでの小形品、46～56は口径16.1～17.4cm、器高5.8～7.4cmの大形品である。小形品のち、33・34は体部に丸みをもち、高台が底部のやや内側に付くもので、その他は体部が外傾して直線的に立ち上がり、底部の周縁に高台が付くものが多い。底部の切り離しは、33・41・45が静止糸切り、34～40・42・43が回転糸切りで、44は不整方向の擦痕がある。大形品はいずれも体部が外傾して直線的に立ち上がり、底部の周縁に高台が付くものである。底部の切り離しまたは調整は46～49・52・54・56が回転糸切り、53が静止糸切り、48がヘラ切り、47には回転ヘラケズリ調整が見られる。また、50・51は



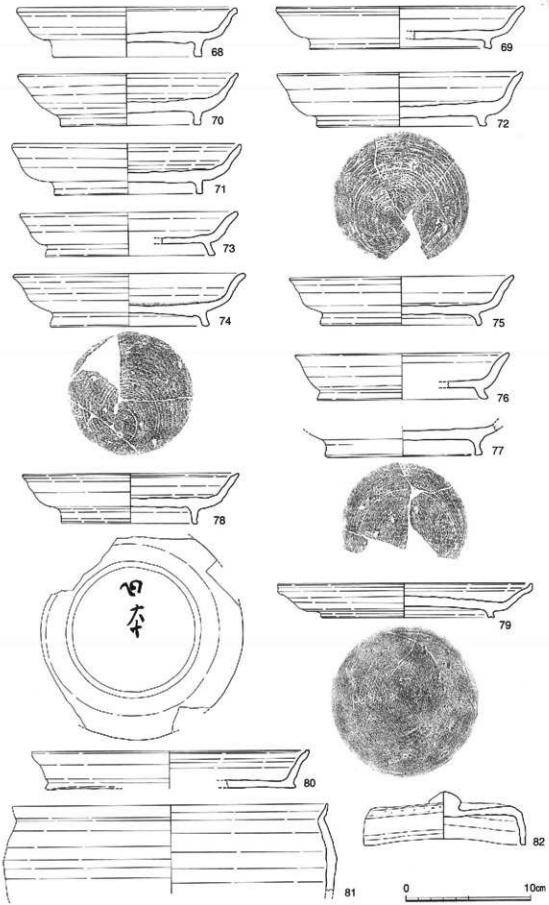
第51図　4号溝上面・上層出土遺物実測図（1）



第52図　4号溝上面・上層出土遺物実測図（2）



第53図　4号溝上面・上層出土遺物実測図（3）



第54図　4号溝上面・上層出土遺物実測図（4）

外面底部に「×」のヘラ記号、56は大きく「館」という墨書がある他、43の内面には墨痕、53～55の内面には漆が残っている。

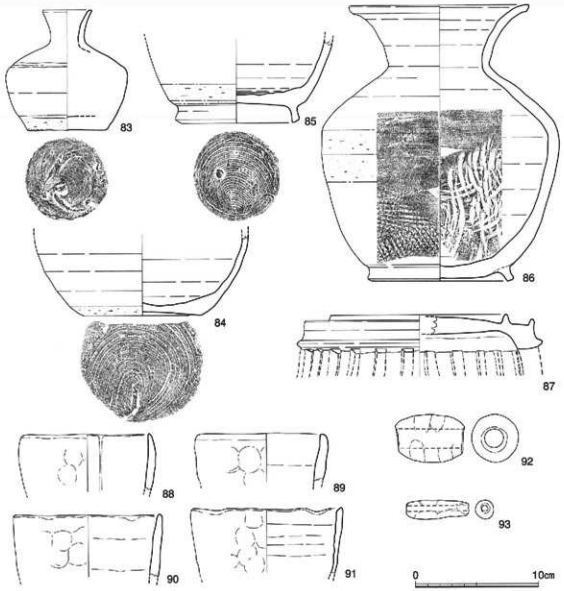
57～62は高坏である。57は坏部で、口縁端部に僅かに段があり、外面下半には回転ヘラケズリが見られる。58～62は脚部で、59は坏部底面が焼成前に穿孔されており、58・60は内面にしぼり目が残っている。

63～第54図79は皿で高台が付くものである。63は焼き歪みが著しく口縁が丸みを帯びているが、その他は口縁が外傾または外反しており、68～72・78・79の口唇には段が見られる。底部の切り離しは、いずれも回転糸切りである。また、70は底部外面に「｜」状のヘラ記号、79には「有」とヘラ書き文字があり、78には「○（記号）本」と墨書がある。

80は底部の平らな皿状のもので、外反する口縁の口唇には段がある。

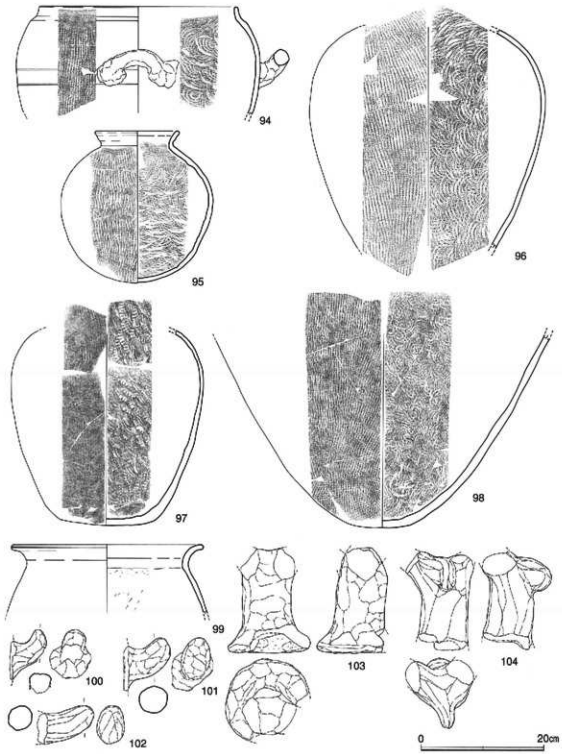
81は鉢で、短く屈曲した口縁をもっており、肩がやや張っている。

82は短頸壺の蓋である。口縁は直立し、口唇端部は平坦で、大きめの宝珠つまみをもつ。



第55図　4号溝上面・上層出土遺物実測図（5）

第55図83～86は壺である。83・84は無高台のもので、外面底部に回転糸切り、外面下半に回転ヘラケズリが入っている。85・86は高台が付くもので、85は外面底部に回転糸切り痕を残し、外面下半に回転ヘラケズリが見られる。86は口縁が大きく開いた広口壺で、胴部外面下半には平行タタキ、内面下半には同心円状の当て具痕があり、外面肩部下には平行タタキののち、浅い回転ヘラケズリが入っている。



第56図　4号溝上面・上層出土遺物実測図（6）

87は円面硯で、陸と海を突帯で区分し、陸の内側には顕著な使用痕がある。脚部は長方形透孔が並んでおり、最大で28孔が想定できる。

第56図94は把手付き鉢である。把手は横方向に付けられており、現状では1個のみ遺存している。外面は沈線2条と平行タタキ、内面には同心円状の当て具痕が残る。

95～98は甕で、95は器高24.5cmの小形品、その他は大型品である。95・96・98は外面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具痕をもち、95・98は丸底である。これに対し、97の外面は平行タタキの後、回転ナデ調整、内面には放射状当て具痕が残っており、底面は平底である。

99は土師器甕である。外反する口縁部をもち、内面はヘラケズリである。100～102は甑把手で、外面に粗いナデによる成形痕、内面の残るものはヘラケズリが見られる。

103・104は土製支脚である。103は三又になるものであるが、腕または小突起を欠損しており、基部は内刳りがある。二次的に被熱し赤褐色を呈している。104は2本の腕と小突起が上端に付くもので、基部に内刳りがある。

第55図88～91は焼塩壺である。いずれも口縁部の破片で、外面には指頭圧痕が残っている。88の内面には縦方向に圧痕があり、91の内面には強いナデが見られる。

92・93は土錘である。92は長さ5.6cm・外径3.9cm・内径1.5cmで、重さは72.2gである。93は長さ5.2cm・外径1.5cm・内径0.5cmで、重さは11.4gである。

下層の出土遺物　須恵器蓋坏・皿・高坏・鉢・硯・壺・甕、土師器甑、土錘等が出土している。

第57図105～112は須恵器坏蓋である。105は頂部に平坦面をもつが、その他は丸みを帯びている。口縁部はいずれも僅かに屈曲するもので、105～110には宝珠つまみが残っている。調整は頂部に回転ヘラケズリが施されている。107の内面には「○」が2つ押印されている。また、106・111・112の内面には墨が付いていることから転用硯にされたものと見られる。

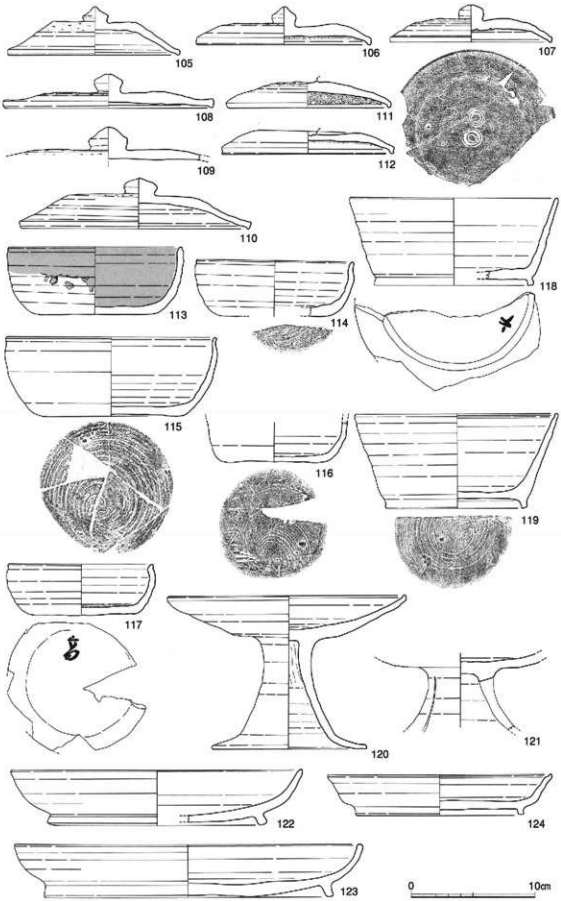
113～117は坏身で、無高台のものである。口縁部が僅かに屈曲し、体部が丸みを帯びるもので、底部の切り離しは、いずれも回転糸切りである。113は外面の一部と内面に漆が僅かに付着しており、117は外面底部に「高」と墨書されている他、内面にも墨が付着している。

118・119は坏身で、高台の付くものである。118が口径16.2cm・器高7.6cm、119が口径16.6cm・器高7.0cmと大形品で、ともに口縁は外傾して直線的に立ち上がり、高台が底部の周縁に付く。119は口唇に段をもっている。底部切り離しはともに回転糸切りで、118は回転ナデが加えられている。また、118の底部外面には「少」と墨書されている。

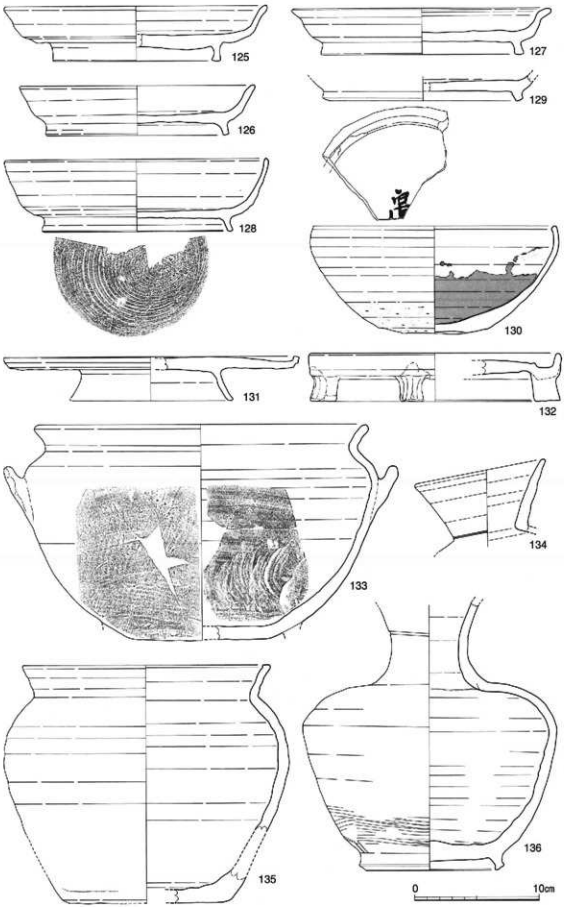
120・121は高坏である。120は大きく開く坏部の口縁端部が肥厚するもので、脚部内面にはしぼり目がある。121は脚部がやや太く、線状の透孔をもっている。

122～第58図129は皿で、高台をもつものである。122・123は口径がそれぞれ23.2cm・28.0cmと大きく丸みを帯びた体部を有するもの、124～127は外反する口縁部をもつもの、128はやや器高が高く深いものである。124は口唇に段をもっている。底部は122・123は回転糸切り後回転ヘラケズリ調整されているが、その他は回転糸切り後未調整である。129の外面底部には「官」と「高」が重複したような墨書文字が見られる。

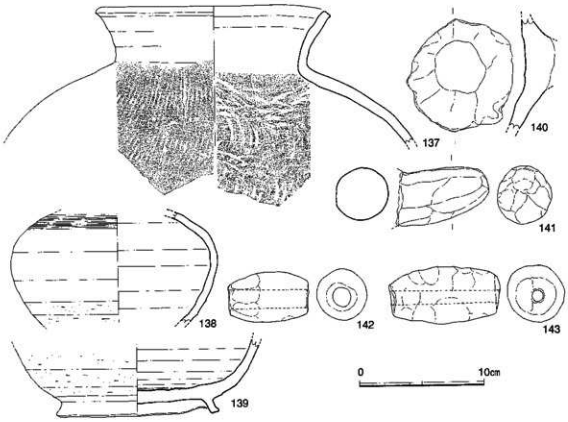
130・133は鉢である。130は鉄鉢形で、外面底部は回転ヘラケズリが見られ、内面には漆が付着している。133は把手付き鉢で、「く」字形に屈曲した口縁部をもち、外面下半は平行タタキの後粗いナデ、内面には同心円状当て具が見られる。外面底部には高台の剥離痕跡がある。



第57図　4号溝下層出土遺物実測図（1）



第58図　4号溝下層出土遺物実測図（2）



第59図　4号溝下層出土遺物実測図（3）

131・132は円面硯である。131は陸と海部の明確な区別はないが、やや平滑になった中央部が周囲より高くなっており、高い脚部が付く。132は最大で6本の脚を有するもので、陸が海より明瞭な段をもって高くなっている。陸部には重ね焼きの痕跡が見られることから、蓋が付いていた可能性もあり、脚部には面取りがある。

134は平瓶の口縁部で、頸部と体部の接合部に2条の沈線が入っている。頸部は片面にのみ灰をかぶっている。

135・136・第59図138・139は甕である。135は広口壺で「く」字形に屈曲した口縁部と平底をもつ。外面胴部の調整は平行タタキの後、回転ナデ、外面底部の周囲にはケズリが見られる。胎土分析では他地域からの搬入品とされている。136は長頸壺で、底部には高台をもっている。頸部には沈線が1条めぐり、調整は胴部下半にカキメが施されている。138は肩部で、外面上端に細かいカキメ、下半にはヘラケズリが見られる。139は高台が付く底部で、外面に回転ヘラケズリが入る。内面は中央がやや平滑になり、薄い墨痕があることから、破損後、転用硯とされたものと見られる。

137は甕である。「く」字形に開く口縁部をもっており、肩部は外面が平行タタキの後カキメ、内面には同心円状の当て具痕が残っている。胎土分析では他地域からの搬入品とされている。

140・141は土師器甑である。140は把手の接合部で、内面にケズリが見られる。141は把手で外面に成形痕が残っており、一部に煤が付着している。

142・143は土錘である。142は長さ6.4cm・外径4.0cm・内径1.4cm・重さ95.6gで、143は長さ8.9cm・外径4.6cm・内径1.0cm・重さ192.3gと、やや大きい。外面には成形時の指ナデ痕が残っている。

出土層位不明の遺物　須恵器蓋坏・皿・高坏・平瓶・鉢・壺・硯・甕、土師器坏蓋・甕・甑、竈、

焼塩壺、砥石、土錘が出土している。

第60図144～151・153・154は須恵器坏蓋である。144・145は輪状つまみをもつ小片で、ともに頂部に回転ヘラケズリが入る。145は内面が磨滅しており、転用硯とされた可能性がある。146～151・153・154は口縁部がいずれも僅かに屈曲するもので、146～149・151には宝珠または擬宝珠つまみ、150は頂部が窪んだつまみが付いている。146・151には頂部に回転糸切り痕が残っており、147～149・151・153・154には回転ヘラケズリ調整が施されている。また、146・154の内面には墨書があり、前者は「大」と書かれている。

152は土師器坏蓋である。宝珠つまみが残る小片で、内外面に赤色顔料が塗布されている。

155～167・169～171は須恵器坏身で、無高台のものである。155～161は体部が丸みを帯びるもので、156～160は口縁部が僅かに屈曲する。162～164は体部が直線的に立ち上がり、口縁が外傾するものである。底部の切り離しは、いずれも回転糸切りである。

このうち、155・164の内面には漆が付着している。前者の中央には径6㎝ほどの範囲で厚く盛り上がった漆が剥離した部分があり、漆を塗るための工具が置かれたまま乾燥し、それが取れた痕跡を留めるものと考えられる。また、156・165～167・169～171には外面底部に墨書がある。156は3文字分の墨書があり「高上□」、169は「介」と読める。167は偏は氵、170は偏は糸で、165・171は1字と見られるが、釈読できない。

168は土師器坏である。外面底部にケズリが見られ、内外面に赤色顔料が塗布されている。

172～第176は須恵器皿である。やや外反する口縁部をもつもので、173の口唇には段が見られる。底部の切り離しはいずれも回転糸切りである。

177～179は高台の付く須恵器坏身である。177は口径12.0㎝の小形品、178・179はそれぞれ口径19.0㎝・17.2㎝の大形品である。口縁が外傾し底部周縁に高台が付くもので、底部切り離しは177・179は回転糸切りで、178は体部下半に回転ヘラケズリが入る。

180は土師器皿である。やや高い高台を有するもので、内外面に赤褐色顔料が塗布されている。

181～183は高台の付く須恵器である。181・182は口縁が外反するもので、口唇に段が付いている。底部切り離しはいずれも回転糸切りである。また、183の外面底部には墨書があり、判然としないが「館」と読める可能性がある。

184～192は須恵器皿の底部と見られるもので、いずれも外面底部に墨書がある。184は「館」、185・186は「高」、189は「得」と釈読できる。その他は判然としないが、187は「司」、188は「館」、190は「升」と読める可能性があり、192の偏は氵と見られる。

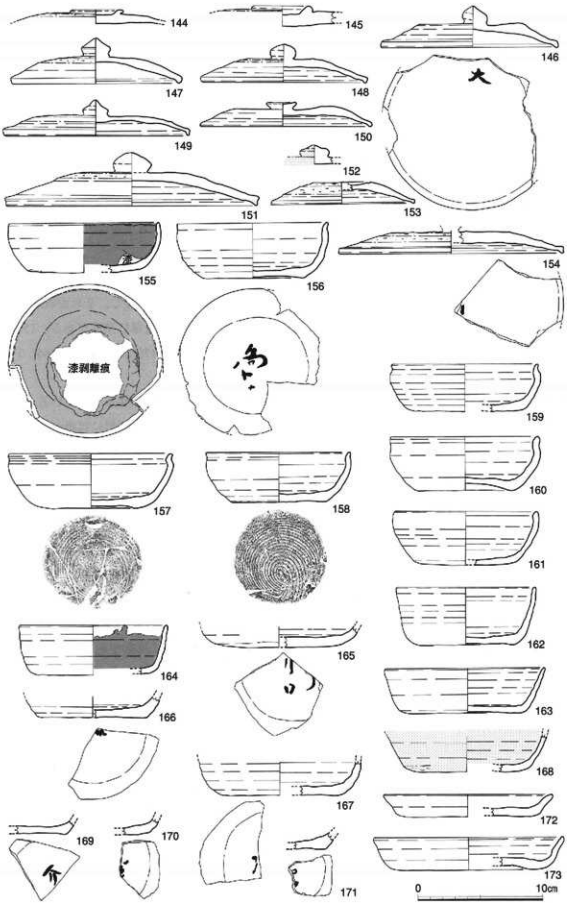
193は須恵器平瓶である。口縁がやや肥厚するもので、口縁内面と頸部の片側に灰をかぶる。

194は須恵器高坏である。坏部は大きく開き口縁端部が肥厚するものである。

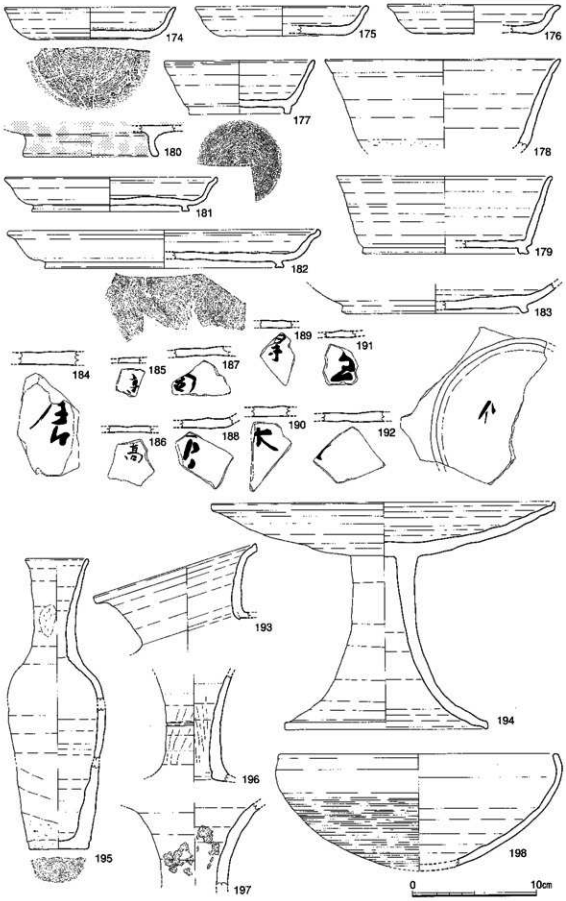
195～197は須恵器長頸壺である。195は細身で胴部下半に強いナデとケズリ、底部に回転糸切り痕を残すものである。胎土分析の結果、他地域からの搬入品とされている。196は頸部外面に1条の沈線を有するもので、内外面にしぼり目が残る。197は内外面に漆が付着しており、漆を入れる漆壺として使用されたものと見られる。

198は須恵器鉢形鉢である。外面下半はカキメの後ナデで、底部付近には僅かにケズリが見られる。内面には灰をかぶっており、外面には重ね焼きの痕跡がある。

第62図199・200は須恵器短頸壺である。199は小形品、200はやや肥厚した短い口縁をもっている。



第60図　4号溝出土遺物実測図（1）

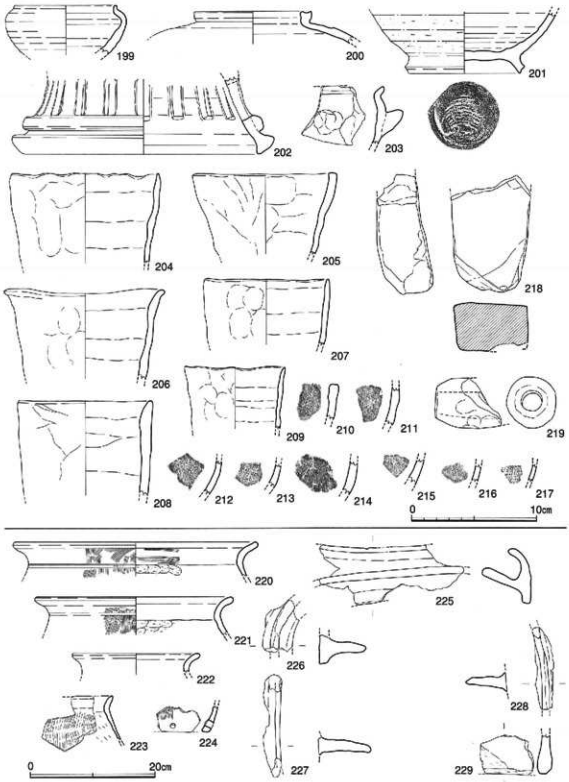


第61図　4号溝出土遺物実測図（2）

201は壺の底部で、高台を有している。底部には回転糸切り痕が残っており、胴部下半には回転ヘラケズリが見られる。

202は須恵器円面硯の脚部である。長方形の透孔が16個付くことが想定されるものである。

203は把手付鉢である。小形品で、口縁が短く屈曲し、把手には成形痕が残っている。



第62図　4号溝出土遺物実測図（3）

204～217は焼塩壺である。いずれも砲弾形の器形をとるものと見られる。外面には指押さえ痕、内面には粗いナデを残すものが多い。また、210～217の内面には布目圧痕が残っており、布目は1㎝当たり7本～12本と粗い。

218は砥石である。凝灰岩製で表裏両面が使われており、幅5.8㎝・厚さ3.8㎝である。

219は土錘である。一部欠損しており、外径4.0㎝・内径2.0㎝・重さ63.2gである。

221～223は土師器甕である。「く」字形に開く口縁部をもっており、外面と口縁内面の一部にはハケメ、胴部内面はケズリである。

224は土師器甑の底部で、端部付近に穿孔があり、外面はハケメ、内面に指押えとケズリがある。

225～229は移動式竈の破片である。225は口縁部、226～228は廂、229は基部の破片で、2次的に被熱し、黒褐色に変色している。

木製品　木箱蓋・挽物・曲物・糸巻・木簡の他、用途不明品がある。

第63図230は木箱蓋である。外面は端部より中央が厚くなる甲盛、内面は凸状に削り出され合わせ蓋となるもので、樹種はヒノキ属である。大きさは外法で長さ33.6㎝・幅5.8㎝、凸部の長さ29.6㎝・幅3.8㎝、厚さは2.0㎝である。形状・大きさから見て、文書箱蓋と考えられる[5]。

231は挽物で、高台付き皿である[6]。底面に低い高台が付いており、樹種はトチノキである。

233～238は曲物の蓋板または底板である。樹種はやや不明確なものもあるが、同定を行った233・234・236・238はヒノキ属である。いずれも小片であるが、233は径12.8㎝であることが分かり、238は結合孔が僅かに残ることから蓋板と見られる。また、236には方形刳り込みが僅かに残る。

239は糸巻の横木である。樹種はヒノキ属で、長さ10.8㎝・厚さ0.7㎝である。中央には相欠き仕口のかみ合わせ部があり、径0.8㎝の軸孔がある。

第64図264は木簡である。表に2行・5文字分の墨書があるものと見られるが、「埼」の可能性があるものの他は、ハギトリ状の削りにより充分に文字が判読できない。右側面以外は欠損しており、大きさは現状で、長さ13.7㎝・幅2.6㎝・厚さ0.5㎝である。樹種はスギと見られる[7]。

258・259は墨書はないが、下端が窄まる形をしていることから題籤軸である可能性がある。樹種はともにヒノキ属である。

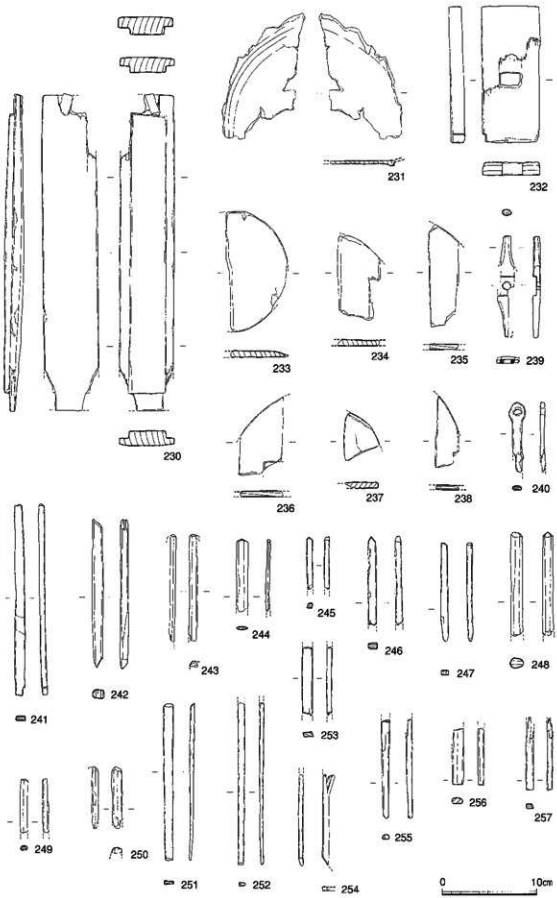
232・240～257・260～263・265～272は用途不明のものである。

232は長さ14.6㎝・幅5.9㎝・厚さ1.4㎝である。中央に長さ2.0㎝・幅1.2㎝の長方形孔があり、一方の端部には段が付いている。240は膨らんだ端部に孔があるもので、樹種はスギである。

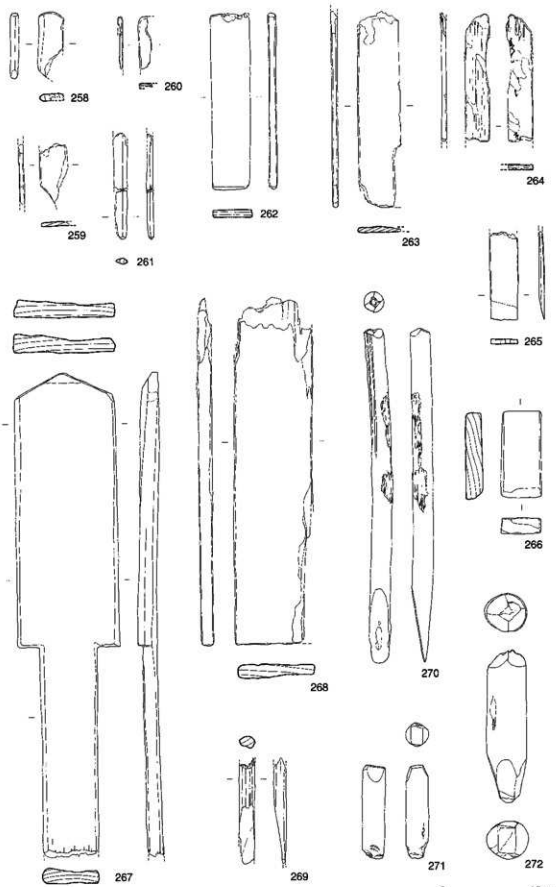
241～257・260・261は細い棒状の木製品で、243～257のうち一部は箸である可能性がある。241は一方の端部に段をもつもの、242・244～246・248・250・254・255などは端部を尖らせたもので、242には一方の端部に溝が付く。また、244・248～250・256・261は全体を丁寧に面取りしており、261は鏑状に稜が残る。

262・263・265・266～268は板状のものである。263は隅部を丸く加工しており、265は端部を鑿刃状に削っている。樹種は263がヒノキ属である。267は羽子板状に加工されたものである。基部が欠損しているが、現状で長さ51.2㎝・先端で幅11.㎝・基部で6.0㎝・厚さ1.4～2.0㎝である。

269～272は棒状のものである。269は丁寧に面取りされたもので、端部を尖らせている。270は一方を尖らせた杭状のもので、長さ35.3㎝・径2.1㎝である。一部に樹皮が残っている。271・272はそれぞれ長さ9.8㎝・径2.4㎝、長さ16.2㎝・径4.1㎝と短いもので、両端に加工が見られる。



第63図　4号溝出土木製品実測図（1）



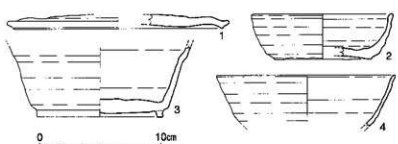
第64図　4号溝出土木製品実測図（2）

(10) 5号溝

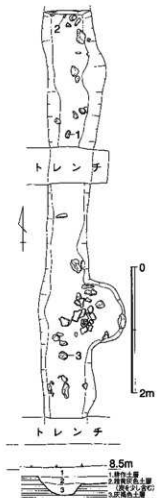
遺　構　1区の東南部にある南北溝で、1号建物跡と重複している。周辺の遺構との関係は、2号建物跡が東9m、8号建物跡が東51m、3号溝が東58mである。

5号溝は現在検出されている長さが7mである。1号建物跡より南側を掘り下げており、幅は0.6～0.8m・深さは0.2mと浅い。南側では一部広がり、瓦が入っていた部分があるが、別の土坑と重複している可能性がある。埋土は1層で、炭を多く含む灰褐色土が堆積している。

出土遺物　須恵器蓋坏が出土している。第65図1は坏蓋で、扁平な器形をもち、口縁が外反している。頂部は磨滅しており、赤色顔料が付着している。2は無高台の坏身、3は高台が付く坏身である。底部の切り離しは2が回転糸切り、3はヘラ切りである。4は坏身の口縁部で、比較的薄手であり、体部はやや丸みを帯びている。



第65図　5号溝出土遺物実測図



第66図　5号溝遺構実測図

(11) 8号溝

遺　構　遺構を確認するため3区より北に延ばしたトレンチで検出されたものである。周辺の遺構との関係は、1号建物跡が南西20m、4号建物跡が南東27m、1号井戸跡が南西23m、第6トレンチ2号溝が北東60mの位置にある。

8号溝は2m幅のトレンチで確認しているだけであるので、詳細は不明であるが、南西から北東方向に向かって延びているものと見られる。幅は西側が狭く0.8m・東側は大きく広がり2.6m・深さは浅く0.2mほどである。

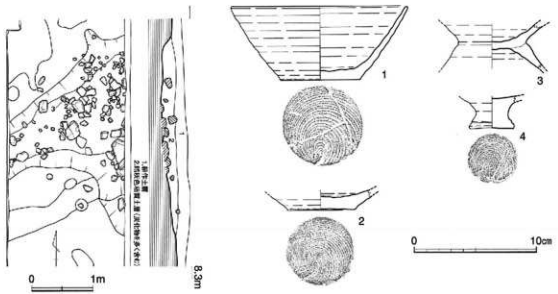
埋土は1層で、炭化物を多く含む暗灰色粘質土層が見られる。埋土の内部には比較的多くの石が入っていた。

出土遺物　土師質土器坏・柱状高台付皿が出土している。

第67図1は坏身で、逆「ハ」の字形に外傾する口縁部をもっている。底部の切り離しは回転糸切りで、その他の調整は回転ナデである。2は坏身底部で、回転糸切りである。

3は足高高台が付く坏身である。底部の小片であり、高台の内側を含めて、調整は回転ナデが施されている。

4は柱状高台付皿の底部で、切り離しは回転糸切りである。



第67図　8号溝遺構・遺物実測図

(12) 4号土坑

遺　構　2区の北西寄りで確認された土坑である。同時期の遺構との関係は、8号建物跡が東43m、3号溝が東49m、14号土坑が南西17m、第20トレンチで確認されている石敷護岸施設は西28mの位置にある。また、4号土坑は2号竪穴住居跡及び2区P.4と重複しており、それぞれの埋土を4号土坑が切っていることから、2号竪穴住居跡・2区P.4→4号土坑の順に営まれていることが明らかである。

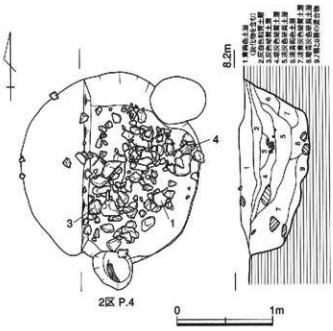
4号土坑は、ほぼ円形を呈しており、南北2.0m・東西1.8m・深さは0.7mである。埋土は基本的には7層で、上層より順に炭化物を含む黄褐色土・灰白色粘質土・灰色粘質土・暗灰色粘質土・淡灰色粘質土・淡黄灰色粘質土・淡黄灰色粘質土と暗青灰色粘質土の混合層が堆積している。埋土中からは比較的多く石が検出されている。

出土遺物　須恵器蓋坏と甕がある。

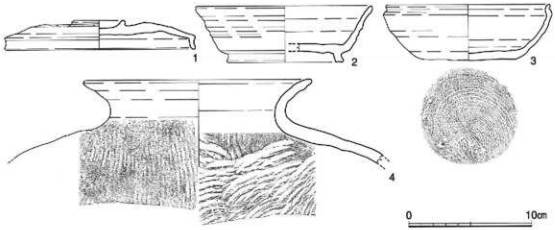
第69図1は坏蓋で、頂部に輪状つまみをもっており、口縁部は屈曲して直立している。頂部外面には回転ヘラケズリ調整が施されている。

2は高台付きの坏身である。やや外反気味の口縁部をもち、底部は周縁のやや内側にほぼ直立する高台が付いている。底部は回転ナデ調整が行われており、切り離しの手法は不明である。

3は無高台の坏身である。口縁は



第68図　4号土坑遺構実測図



第69図　4号土坑出土遺物実測図

端部が屈曲して外反する特徴をもっており、体部は丸みを帯びている。底部は回転糸切りである。

4は甕である。「く」字状に外反する口縁部をもっており、外面肩部は平行タタキ・内面には同心円状の当て具痕が見られる。

(13) 5号土坑

遺　構　3区中央やや西寄りに位置する大形の土坑である。周辺遺構との関係は、西側の2号竪物跡との距離は23m、東側の4号建物跡は4m、7・8号建物跡は11mである。3号建物跡のP.6とは切り合い関係があり、5号土坑の埋土を3号建物跡P.6が切っていることから5号土坑→3号建物跡の順に営まれていることが明らかである。

平面形は南北がやや長い隅丸方形に近い形状を呈しており、規模は上端で南北4.1m・東西3.4m・深さ1.1m、下端で南北2.8m・東西2.3mである。底面には南半分に円礫が厚く敷かれており、後述するように祭祀遺構であったと考えられる。

土坑の埋土は底面から深さ0.6m程のところまでに見られる灰色系粘質土（6層・8～12層）と、その上の炭化物を含む灰色または暗灰色系土（1～5層・7層）に大きく分けることができる。下層の粘質土は土坑内に自然に溜まったものと見られるが、上層の埋土は細かい互層状になっており、人為的に埋められたものと思われる。土坑埋土が3号建物跡P.6に切られていることからすると、上層の埋土は3号建物の建設に伴う整地土と考えられる。

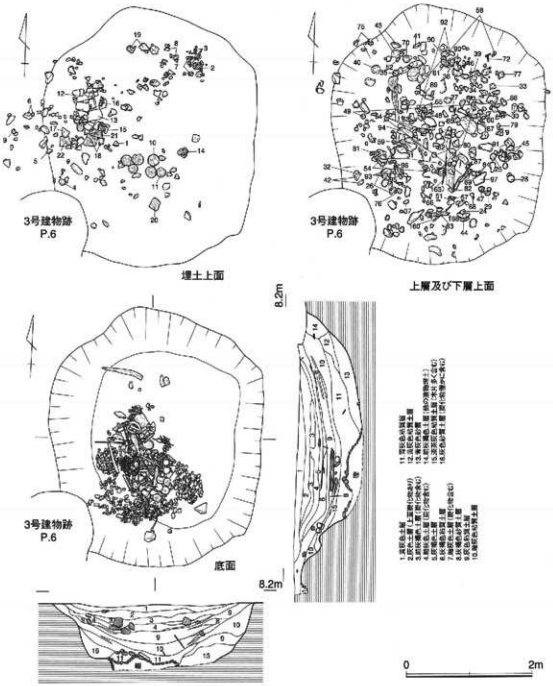
遺物出土状況　土坑埋土上面は、整地作業の後、何らかの祭祀行為が行われたようで、中央やや南寄りで土師器甕7個体がまとめて置かれていた。いずれも、上半部は既に削平され失われていたが、丸い底部が埋土上に据えられた状態で検出されており、細かく見ると西側に3個体、東側に4個体が分けて置かれていたようである。また、土坑埋土上面西側では、埋土中にはほとんど見られない瓦が検出されており、丸瓦2枚が平行している点からすると、意図的に置かれた可能性も考えられる。

埋土の上層では、石や木片とともに夥しい量の須恵器が検出されている。破片が多いのが特徴で、「意宇」・「○（記号）本」などと書かれた墨書土器も含まれている。須恵器の他には土師器甕・竈・焼塩壺なども出土している。下層粘質土の上面では、木簡5点と習書のある木製品片1点が検

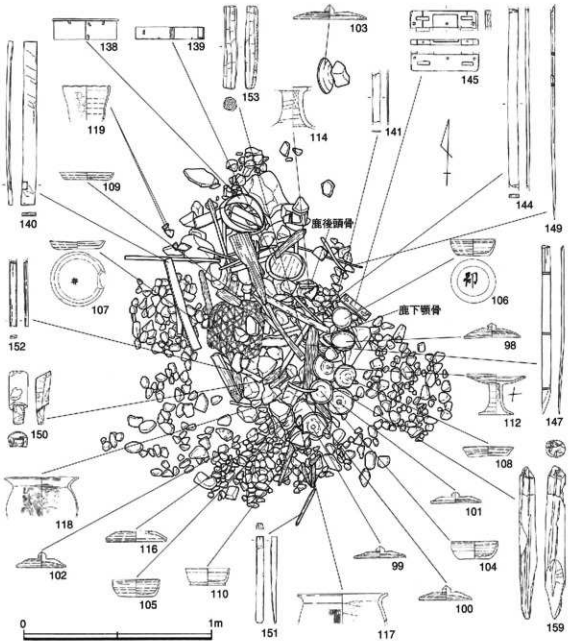
出されており、木簡の中には「東殿　出雲積大山　伊福部大□」と建物名・人名が書かれたものが含まれている。

底面の祭祀遺構は、南北1.8m・東西1.6mの範囲で中央が盛り上がるように円礫が敷き詰められている。中央にはやや大きめの石が使われており、礫敷の厚さは厚いところで20cmほどであった。また、土坑の掘削が砂層に及んでいるため、底面から湧水が見られた。

検出された遺物としては、円礫上の中央から北半部に鹿頭骨・刀形代・曲物・かご・斎串・木製品部材などがあった。中央から南半部には須恵器坏・高坏などがまとめて置かれおり、その中には「郡」・「井」と墨書されたものも含まれている。遺物の中に形代や斎串といった祭祀遺物がある



第70図　5号土坑遺構実測図



第71図　5号土坑底面祭祀遺構遺物出土状況実測図

ことや出土状況から見ると、土坑底面で何らかの祭祀が行われたものと考えられる。

この中で注目されるのは、鹿頭骨１個体分検出されている点で、四肢骨など他の部位は見られないことから頭だけが持ち込まれたものと思われる。また、須恵器内部の土や祭祀遺構周囲の粘質土を水洗選別したところ、モモ・イネ・メロン類・ヒョウタン類のような栽培植物や、食用にもなるブドウ属が検出された。鹿の頭を含め、これらは須恵器・かご・曲物などに入れられ、祭祀に用いられた供物であった考えられる。

なお、植物遺体分析よれば、栽培植物の他には伐採跡地に先駆的に成育する二次林的要素の植物が多いとされており、周囲が荒れ地状態になっていた可能性が指摘されている。遺構の状況から見ると、土坑内で祭祀が行われた後は、整地が行われるまで底に粘質土が溜まった窪地として残っていた可能性が高く、こうした分析結果とよく対応している。

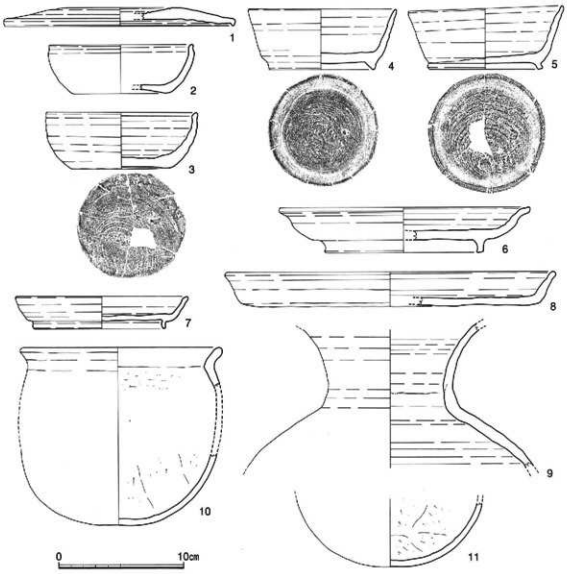
上面の出土遺物　須恵器蓋坏・皿・壺、土師器甕、瓦が出土している。

第72図１は須恵器坏蓋である。口縁端部が断面三角形状をなしており、頂部に沈線が１条入っている。２・３は坏身で、無高台のものである。口縁部が僅かに屈曲し体部が丸みを帯びるもので、３の底部は回転糸切りである。４・５は坏身で、高台を有するものである。外傾する口縁部をもち、底部の周縁に高台が付いている。底部切り離しは、ともに回転糸切りであるが、４は回転ナデ調整を加えている。

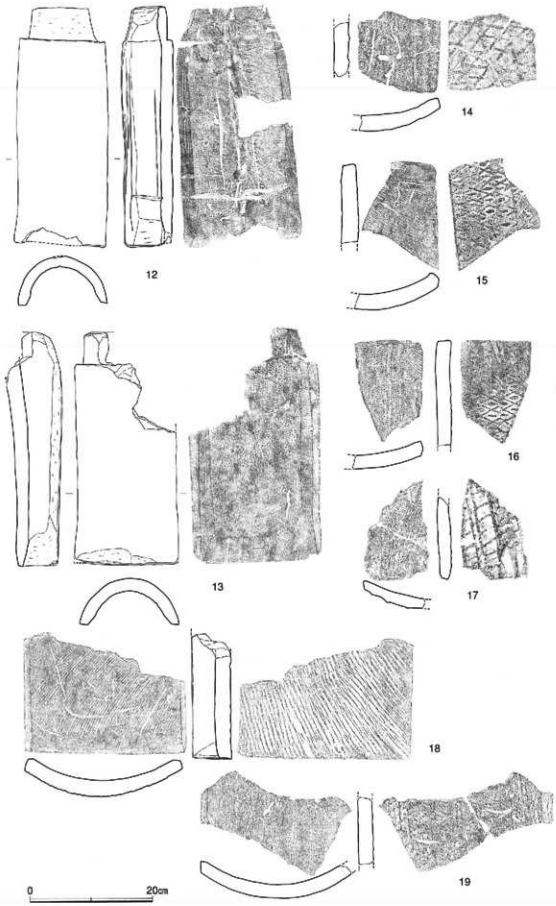
６～７は皿で、高台が付くものである。６は口縁部が大きく外反するもの、７は外傾するもので、前者の底部の切り離しは回転糸切りであるが、後者は回転ヘラケズリ調整されている。８は無高台の皿で外傾する口縁をもち、底部はヘラ切りと見られる。

９は壺で、大きく開く頸部とよく張った肩部を有する。

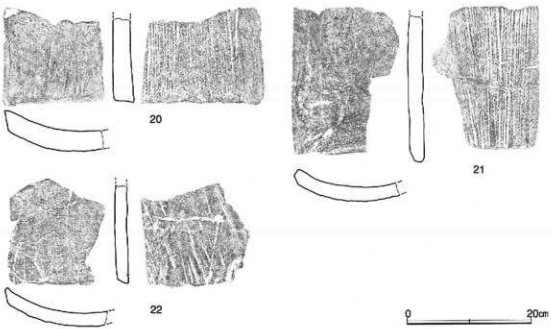
10・11は土師器甕で、土坑埋土上面に置かれていたものの一部である。頸部は短く屈曲して外反し、底部は丸底である。内面にはケズリが見られる。



第72図　５号土坑上面出土遺物実測図



第73図　5号土坑上面出土瓦実測図（1）



第74図　5号土坑上面出土瓦実測図（2）

第73図12・13は丸瓦である。ともに玉縁部をもつもので、12は長さ38.5cm・幅14.6cm、13は長さ37.6cm・幅16.7cmである。

14～第74図22は平瓦である。全形が分かるものはないが、18は幅が25.7cmである。下面のタタキは格子タタキ（14～17・19）、平行タタキ（18）、縄目タタキ（20～22）がある。格子タタキは数種類あり、出雲国分寺平瓦分類のKA（19）・KB1（14）・KB2（15・16）・KD（17）がある。焼成は須恵質のもの（12・13・15・16・18・19）と、土師質のもの（14・17・20～22）が見られる。

上層の出土遺物　須恵器蓋坏・皿・高坏・壺・甕、土師器甕・竈、焼塩壺、瓦が出土している。

第75図23～26は須恵器坏蓋である。23は輪状つまみ、26は宝珠つまみが付くもので、24・25も本来は宝珠つまみが付いていたものと見られる。25・26は口縁端部が断面三角形状をなしており、24～26の頂部には回転ヘラケズリが施されている。また、24・25は内面に墨痕が付着し、表面が磨滅していることから、つまみを取って転用硯として使われたものと見られる。

27～37は坏身で、無高台のものである。27～34は口縁部が僅かに屈曲し体部が丸みを帯びるもので、35・36は口縁が直線的に外傾するものである。底部の切り離しはいずれも回転糸切りである。また、29・32・37には底部外面に墨書があり、29は「○（記号）本」と釈読できる。32と37は不明な点があるが、前者が「餔」、後者が「光」と読める可能性がある。

38～第76図45は皿で、高台をもたないものである。いずれもやや外反する短い口縁をもっており、底部の切り離しは回転糸切りである。44の外面底部には焼成前にヘラ記号が付けられており、39・44の内面、41の外面底部には墨が付着している。

46～52は坏身で、高台をもつものである。46・47は体部が丸みを帯びたもので、底部は46が回転ナデ調整されており、47は静止糸切りである。48・49は口径がそれぞれ11.1cm・10.5cmと小さく、直線的に外傾する口縁部をもつ。底部は48がヘラ切りで、49は回転糸切りののち、回転ナデ調整である。また、48の口縁には煤が4ヶ所に付着しており、灯明皿として利用されたものと見られる。

50は直線的に外傾する口縁をもつもので、底部周縁よりやや内側に低い高台をもっており、底部はヘラ切りの後回転ナデである。51・52は器高が高いもので、52は6.6cmである。直線的に外傾する口縁部をもっており、底部の周縁に高台が付く。底部切り離しは52は回転糸切りである。

53は口径から見て皿の蓋と考えられるものである。頂部に宝珠つまみ、口縁端部は僅かに屈曲している。頂部はヘラ切りの後、粗いヘラケズリが入っているものと見られる。胎土分析では、他地域からの搬入品という結果が得られている。

54～63は皿で、高台が付くものである。口縁はやや外反するものが多いが、57のようにやや内湾するものもある。口縁端部は55は沈線状に窪んでいる。底部の切り離しはほとんどが回転糸切りであるが、57はヘラ切りと見られる。61・62の外面底部にはそれぞれ「意字」と墨書があり、よく類似していることから同筆の可能性もある。63の外面底部にも墨書があるが、釈読できない。また、57・63の内面と外面底部、59・61・62の内面には墨の付着と磨滅が認められ、転用硯として使用されたものと見られる。

64～71は高坏である。64～67は坏部で、口縁端部が上方にやや肥厚しており、外面下半には回転ヘラケズリが入っている。68～71は脚部で、69は坏部の剥離面に接合用の刻みがある。また、66・67の内面には墨が付着している。

72・73は短頸壺蓋である。ともに宝珠つまみが付いており、頂部は平坦である。72は頂部から口縁部にかけてやや丸みをもち口縁端部がやや外反しているが、73は直線的である。72は頂部に回転糸切り痕を残しており、周囲に浅い回転ヘラケズリが見られる。73の頂部は回転ヘラケズリ調整されている。

74～第78図81は壺である。74・78・79は長頸壺と見られ、78・79は底部に高台が付いている。78は底部はヘラ切りで、胴部下半に回転ヘラケズリが施されており、頸部にはしぼり目が見られる。75～77・80は胴部または底部の破片である。75は高台をもたないもので、底部は回転糸切りの後、回転ヘラケズリ調整を行っている。76・77は肩部で、76は外面下半に回転ヘラケズリが見られる。80は高台をもつものであるが、外面胴部下半と底部に平行タタキが入っており、底部内面には指頭圧痕が残っている。81は口縁が短く屈曲するもので、底径に対し口径が大きい。底部に高台をもっており、ヘラ切りである。

82は壺で、口径26.2cmと大きい。口縁端部は僅かに下方に肥厚しており、外面には刺突文、頂部には回転ヘラケズリが入っている。

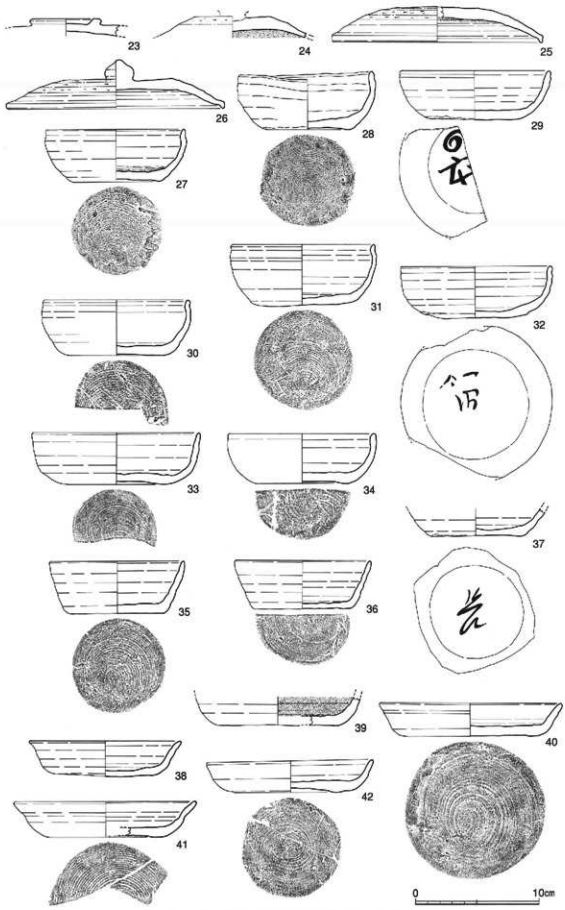
83は大形で扁平な皿で、口径は24.0cmである。短い口縁は僅かに外傾して立ち上がっており、外面底部は回転糸切りの後、粗い回転ヘラケズリである。

第79図89は甕の口縁部である。口縁端部外面に稜をもち、その下にそれぞれ2条の波状文と沈線が施されている。

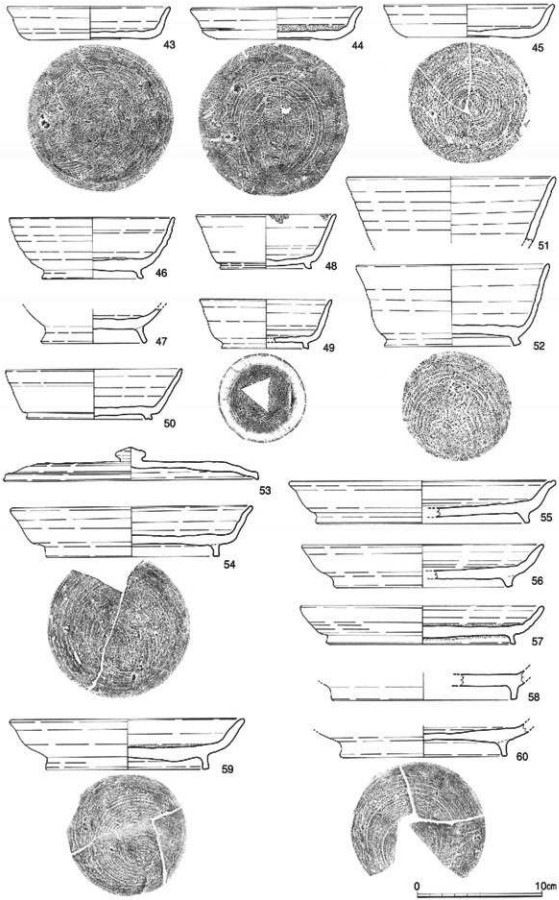
91～96は土師器甕である。いずれも「く」字形に屈曲する口縁部をもっており、底部が残る91は丸底である。91・93・94・96の胴部外面と93の口縁内面にはハケメが入っており、確認できない92を除いて胴部内面はヘラケズリである。

90は移動式竈の頸部である。口縁は欠損しているが外反しており、内外面にケズリが見られる。内面は被熱し赤褐色になっており、一部に煤が付着している。

84～88は焼塩壺で、いずれも砲弾形の器形をとるものと思われる。外面は指押さえまたは押圧痕



第75図　5号土坑上層出土遺物実測図（1）



第76図　5号土坑上層出土遺物実測図（2）